

神戸大学・加西市共同研究

鵜野飛行場関係歴史遺産

—活用シンポジウム記録集・基礎調査報告書—

2011.3

加西市教育委員会

序 文

加西市は、加古川中流域に位置する歴史文化遺産に恵まれた農村地帯です。市域の南部に、第二次大戦中に造られた姫路海軍航空隊の鶉野飛行場滑走路跡があり、周辺には今なお防空壕などが数多く残り、地域の開発と保存活用が行政課題のひとつとなっています。

これらの戦争遺産は、十数年来、住民の方々を中心に鶉野平和祈念の碑苑保存会が結成され、調査活動等が地道に行われてきました。教育委員会では、これらの戦争遺産を今後活用していくために、保存会の調査成果等を参考にさせていただき、歴史遺産としての再評価を目的に学術的な基礎調査を実施することとなりました。

今、鶉野飛行場跡の一画には神戸大学農学部附属食資源教育研究センターが所在し、構内に数多くの基地施設が残っています。このことから、神戸大学の理解と協力は不可欠であり、基礎調査を大学と共同研究として取り組むことになりました。

この研究成果の公表を目的として、平成 22 年 12 月 5 日に神戸大学の先生方、地元保存会にもパネリストとして発表いただき、鶉野飛行場跡の歴史遺産活用シンポジウムを開催することができました。また、会場参加者の方々からも貴重なご意見をいただくなど、盛会のうちに終ることができました。本書は、その記録集として刊行しました。

戦後六十有余年が過ぎ、戦争を体験した方々も少なくなるなか、戦争の悲惨さ、平和の大切さを語り継いでいくことが難しくなっています。平和教育を推進するためにも、鶉野飛行場について語り継ぐ一助として本書が活用されることを願っております。

最後になりましたが、本共同研究についてご理解をいただき、終始ご協力いただきました鶉野平和祈念の碑苑保存会をはじめ関係各位、ご指導・ご助言をいただきました多くの方々に対し、厚くお礼申し上げます。

平成 23 年 3 月

加西市教育長 吉田 廣

目次

序文

目次

第1部 鵜野飛行場関係歴史遺産活用シンポジウム記録集

シンポジウム次第	3
開会挨拶	4
基調講演	5
パネリスト報告1	12
パネリスト報告2	20
パネリスト報告3	28
パネルディスカッション	31
閉会挨拶	41
当日配布シンポジウム資料	43

第2部 鵜野飛行場関係歴史遺産基礎調査報告書

第1章 はじめに		第3章 聞き取り調査	
1 調査に至る経過	58	1 鵜野飛行場建設時の様子について	81
2 共同研究の概要と体制	58	2 鵜野飛行場の調査・研究の取り組みについて	89
3 調査の概要	59	第4章 鵜野飛行場関係施設測量調査	
第2章 鵜野飛行場の歴史		1 鵜野飛行場の現況	97
1 姫路海軍航空隊基地	60	2 今に残る戦争遺産	97
2 川西航空機株式会社鵜野工場	66	3 測量調査	98
3 紫電・紫電改	67	第5章 戦争遺産活用事例調査	
4 国鉄北条線列車転覆事故	68	1 概要	105
5 空襲	69	2 内容	105
6 戦後の鵜野飛行場	70		
7 鵜野平和祈念の碑	71		
8 空中写真に見る 鵜野飛行場の変遷	73		
9 年表	76		

第 1 部

鶉野飛行場関係歴史遺産

活用シンポジウム記録集

シンポジウム次第

タイトル 加西・鶉野飛行場跡 ～戦争遺産をまちづくりにどう活かすか～

日時 平成22年12月5日(日) 13:30～16:30

会場 加西市健康福社会館 大ホール

主催 加西市・加西市教育委員会 後援 神戸大学

プログラム

開会挨拶

1 基調講演

「鶉野飛行場の歴史的意義・価値」 高岡裕之（関西学院大学文学部教授）

2 パネリスト報告1

「鶉野飛行場に残された施設」 上谷昭夫（鶉野平和祈念の碑苑保存会）

3 パネリスト報告2

「共同研究の成果－戦争遺跡の活用－」 佐々木和子
（神戸大学地域連携推進室研究員）

4 パネリスト報告3

「鶉野周辺の歴史的風土」 坂江 渉
（神戸大学人文学研究科特命准教授）

休憩

5 パネルディスカッション

[コーディネーター]

奥村 弘 （神戸大学地域連携推進室長・人文学研究科教授）

[パネリスト]

伊藤一幸 （神戸大学食資源教育研究センター長）

上谷昭夫 （鶉野平和祈念の碑苑保存会）

坂江 渉 （神戸大学人文学研究科特命准教授）

佐々木和子 （神戸大学地域連携推進室研究員）

高岡裕之 （関西学院大学文学部教授）

中川暢三 （加西市長）

閉会挨拶

ロビー特別展示

- 1 飛行服等資料展示
- 2 鶉野飛行場に残された施設パネル展示

司会・立花聡（加西市教育委員会自己実現サポート課長）

司会：こんにちは。それでは定刻が参りましたので、鶉野飛行場関係歴史遺産シンポジウム「加西・鶉野飛行場跡 ～戦争遺産をまちづくりにどう活かすか～」を開催いたします。まず、開会に先立ちまして加西市長の中川がご挨拶を申し上げます。

開会挨拶

中川暢三（加西市長）

市長：皆さんこんにちは。本日は、歴史遺産活用シンポジウムに多数ご参加いただき誠に有り難うございます。また基調講演をいただく関西



学院大学高岡先生はじめコーディネーターやパネリストをお務めいただく先生方には心より感謝を申し上げる次第です。

加西市はこれまでも神戸大学、兵庫県立大学、関西学院大学など県内の各大学の先生方には、各種委員会や審議会等で色々とご指導ご協力いただいておりますが、神戸大学様とは大変遅まきながら、平成20年5月に漸く包括協定を締結して、地域や市政が抱える各種課題の解決のために、これまで以上にお力添えをいただけることになりました。このような連携の一環として、鶉野飛行場跡に関する歴史遺産の基礎調査の成果を市民の皆様にも知っていただくということで本日のシンポジウム開催となった訳です。

さて、鶉野飛行場は旧帝国海軍姫路航空隊の基地として今から67年前の昭和18年秋に完成しました。戦局が悪化した昭和20年春には神風特別攻撃隊第一護皇白鷺隊が編成され、戦地に向けて飛び立って行った訳です。鶉野周辺ではそれ以外にも米軍の爆撃や北条線の列車転覆事故など終戦までに多くの民間人犠牲者も出ました。3年前には神戸大学の農場で映画「火垂るの墓」の撮影も行われました。

鶉野飛行場とその歴史は年月の移ろいの中で、滑走路は荒れ果て戦争の歴史さえも風化しかねない状態でしたが、保存会の三宅通義会長はじめ皆様のご尽力により、平成11年に鶉野平和祈念の碑苑が造営されました。今でも鶉野飛行場に行き、平和祈念の碑を前に佇むと、この豊かで平和な郷土を次世代に引き継ぐことが今の世に生かされている者の責務ではないかと私はいつも思います。

この5年間で加西市内の産業団地に23社の新規企業立地があり、工業用地が足りない状況です。鶉野飛行場跡地とその周辺の土地は加西市全体から見ても開発ポテンシャルの高いエリアですが、土地利用の前に、これまでの歴史をしっかりと調査し、保存することも大切だと思っています。

私は、市長就任直後から市民の要望要請を受けて旧防衛庁幹部と払い下げに向けての接触・交渉を始めました。防衛省・財務省とも協議を重ねて払い下げについては基本了解いただいております。この間、市民意識を盛り上げるために3年前には市民提案を受け付け、35名から42件の利用提案がありました。2年前には神戸大学と共同で飛行場関係歴史遺産基礎調査に着手

するとともに、飛行場跡のウォーキングを実施、東洋大学からも二度にわたって研究・報告を受けましたし、地元3町の勉強会も続けられてきたところです。今年度末で市史の編纂刊行が終わりますが、鶉野飛行場の歴史も含めて、それらの歴史遺産を保存活用していく新たなフェーズを迎えていると認識しています。

先月から戦争遺産バスツアーが実施され、毎回大変好評で、いつも満席となっていることをとても嬉しく思っています。と同時に、それだけ市民・県民の皆様のご関心も高いのだと認識を新たにしました。

今日はシンポジウム終了まで3時間のロングランになりますが、実り多いものとなりますよう期待します。シンポジウム開催にあたり、知らない鶉野飛行場の歴史、今に残る遺産、物語を知るきっかけになりますことを願って、私の挨拶とさせていただきます。

司会：それではお手元のプログラムに従い進めてまいります。まず、基調講演を高岡先生からいただきます。

講演いただきます高岡裕之先生をご紹介しますさせていただきます。高岡先生は現在関西学院大学文学部教授で、ご専門は日本近現代史、主に大正・昭和期の社会、文化史を研究していらっしゃいます。隣市の小野市史では第2次世界大戦前後の社会動向について執筆担当され、鶉野飛行場についてもよくご存知でございます。

本日は鶉野飛行場の歴史的意義・価値についてご講演いただきます。それでは高岡先生よろしくお願ひします。

基調講演

高岡裕之（関西学院大学文学部教授）

高岡：ご紹介いただきました関西学院の高岡です。基調講演ということですが、僕が今日ここで話すことになったのは、加西市の隣の小野市史の編さん委員を以前しておりましたときに、鶉野について調べたことがあるからだろうと思います。小野市を調べると、鶉野の話がいろいろ出てまいりました。そういう関係で、お話させていただきます。



今日は鶉野飛行場の歴史的意義・価値ということで、全体的なお話をさせていただきます。具体的な話は、多分次の上谷さんやその後の佐々木さんがされると思います。

まず最初に強調しておきたいことは、お手元のプログラムの2ページ目になりますが、戦争遺跡への関心の高まりについてです。ちょっとオーバーに言えば、現在戦争遺跡はブームです。ここにいくつか本を持ってきました。プログラムのレジメにも書いてあります。『しらべる戦争遺跡の辞典』、続編も出ています。これも最近でました『戦争遺跡を歩く』という本です。太平洋戦争研究会が作ったものです。これは群馬の戦争遺跡をフィールドワークで、学び・調べ・考えるというものです。このような本はいろいろな県の本がでています。大阪のも出ていました。ちょっと大きな書店に行きますと、戦争遺跡関連の書

物がほうぼう出ているのがわかります。こういう本が作られているのは、ようするに作っている人たちがいるわけで、全国的な一つの運動になっています。とてもホットな運動で、現在進行中なんです。この10年くらいの中に急速に戦争遺跡に関する関心は高まりつつあります。しかしこれは、ついこの10数年の間の出来事です。

戦後の日本において、戦争遺跡は全く関心を集めてきませんでした。無関心というよりはむしろ見たくない、忌まわしい存在として扱われてきたのが、日本の戦争遺跡の特徴だろうと思います。

当然ですが、戦争が終わった後には日本中に戦争遺跡があったわけです。空襲のあとの廃墟もそうです。軍事工場なんかもそうですし、軍事施設もそうです。戦後の日本というのは平和憲法のもとで、軍隊をなくしました。自衛隊は軍隊ではないということになっています。そういう中で、ともかく戦争関連のもの、もしくは軍隊関連のものってというのは忌まわしいものとして、むしろ拒否されてきたというのが事実だろうと思います。

僕は寅年で今年48歳ですが、自分の子供の頃を思い返してみても、まだそんな雰囲気がいっぱいあったと思います。小学校などで戦争物の本を読んでいたりと、なんとなくその友達から白い目で見られるというような状況がありました。戦争そのものが悪だったんですね。

ところが20世紀の終わりの頃に、こういう状況がかなり激変したと言ってもいいと思います。そういう流れをよく示しているのが、広島原爆ドーム、広島市の旧産業奨励館です。

原爆ドームは戦争遺跡一般には当てはまらなくて、あれは人類史上最初の核兵器が用いられた痕跡の象徴という位置づけです。今でこそ原爆ドームは世界的にも有名な歴史遺産になっているわけですが、広島市では、そこを公園にする時に壊しようという話になって、かなり具体的に進捗しました。そういう状況で、やっぱり守らないかん、残さなあかんという話が出てせめぎあいの結果、広島市では1966年（昭和41）に原爆ドームの永久保存決議をあげ、保存されることになりました。それが次のステップに進むのは1995年（平成7）のことです。実は原爆ドームが翌96年にユネスコ世界遺産に指定されて、その絡みで史跡指定がなされたんです。だから原爆ドームを残しておく事は広島市の方針で、広島は平和都市ということをやっていたんですが、それを今、歴史遺産という位置づけにこだわったのが20世紀の終わりのことです。なぜやったのかというと、ユネスコの世界遺産、今は世界遺産が本当にブームで、原爆ドームの前に姫路城と奈良の法隆寺が日本で最初の世界遺産に指定されました。それに続くかたちで原爆ドームが指定されていきます。そういう流れの中で、史跡として認定していこうという動きが出たわけです。

この話は後に佐々木さんがされますと思いますが、従来日本では戦争のものに限らず、明治以降のもの、近代のものは文化財ではないとみなされてきました。ところがその原爆ドームの世界遺産化とからめて文化財の基準が変わりました。第2次大戦の頃までのものが文化財に入るんだよ、してもいいよというように変わりました。そ

のころから、次々に各地の戦争遺跡が文化財・文化遺産であるという認識が広まりました。そういうものを守ろうという動きは以前からあったのですが、制度が変わったことで、一気に大きな動きになりました。

先ほど提示しました本を作っているグループは、戦争遺跡保存全国ネットワークという組織です。このネットワークが結成されたのが1997年のことです。このグループが現在、日本の戦争遺跡の保存・連絡の中心になっています。

もう少し象徴的なことなんですが、千葉県佐倉にある国立歴史民俗博物館が、今年、現代史の展示コーナーを開設しました。現代史の展示コーナーは、奇妙なことに前半部分は軍隊、日清日露戦争から展示が始まっています。軍隊、戦争は近代の展示のときに飛ばし、現代に放り込んだんです。準備には10年以上の調査をやっていきます。やはり20世紀の終わりには調査をして、その成果が今年から、軍隊と戦争に関する展示という形で始まったわけです。

いくつか例をあげましたが、現在戦争と軍隊、かつてはそういうものが忌まわしいものだと遠ざけられていたわけですが、むしろ現在においては文化財の問題とか博物館で、むしろそういうものが非常に大きなテーマとして浮上してきています。また、運動みたいなかたちで広まってきています。

そういうことが前提なんですが、ただ原爆ドームが世界遺産になったからだけではなく、そこに至るまでに色々な形で戦争遺跡を残す、調べていくという運動はありました。いくつもの流れがありますが、一つの流れは、空襲体験記録化の運動です。

この運動は、ひとつは東京、早乙女勝元さんを中心とする東京空襲を記録する会が1970年にでき、次の年に大阪で同じような団体ができます。そういう団体の流れというのが、ひとつは個人々の空襲の経験を記録することですが、同時に空襲にかかわるような戦争遺跡を発掘して記録するという運動になって、現在でもその流れから、たとえば大阪なんかのケースがそうですけど、そのグループが中心になって大阪の戦争遺跡を発見し、保存するという運動の中心になっています。

もう一つは考古学です。考古学は基本的には縄文・弥生・古墳時代とかのモノを扱うような学問のようにみえますが、実際に掘ってみると色々なモノが出てきます。その中で戦争遺跡も当然ぶつかってくるわけです。古墳の上に高射砲陣地があったケースが大阪でもあります。こういうものがかなり大きく取り上げられたのが名古屋のケースです。弥生遺跡の上に高射砲陣地があって、結構残っていた。その調査がなされたのが笠寺の陣地跡で1975年。現在、笠寺の公園にいくと、弥生遺跡と高射砲陣地がセットになった整備がなされていて、資料館もあります。

そういった動きがはじまったのが70年代です。いろいろな形でそういう戦争遺跡に注目する動きがあって、さらに80年代90年代になっていくと、もう少し広いかたちで戦争を問い直す、平和を考えるなど、より大きな流れになって、いろいろな地域の戦争遺跡が発掘され、保存されるという形で動いていくことになります。

沖縄の南風原町の陸軍病院壕が史跡に指定されたのが1990年の事です。これは戦

争遺跡が史跡に指定された最初のケースです。有名な長野県の松代大本営、大本営にする予定で松代の山に壕を掘っていたわけですが、その保存・公開運動がはじまったのが1985年です。それを受けて松代市が公開に踏み切ったのが1990年の事です。現在では松代大本営というと、修学旅行や観光のメッカになっており、長野県に行くとき必ず通るところになっていますが、それもせいぜい1985年から1990年頃の話です。あと有名な九州の鹿児島県の知覧特攻基地です。小泉純一郎元首相も行って感動したというところですか。あそこも1985年からです。それ以前には、やはり特攻がらみの話は地元ではタブーで、有名なおばあさんが一人で苦労されていたという話です。そういうものを地域で受け止めて資料館を作ったのがようやく1985年のことです。

ですから1995年という話はしましたが、それに先立ち戦争の記録を伝える形で戦争遺産をそれぞれのところで位置づけて、伝えて行く動きが始まり、そういうものが全面化したのが90年代後半なんだろうと思います。いずれにせよ1980年代、1990年代を経過することで、戦争遺跡への関心が一挙に高まりました。ようするに戦争を知っている、軍隊を知っている世代が急速にそのあたりから減り出します。戦後50年というと1995年ですが、これはかなり深刻な問題で、戦後世代は戦争を知らないだけでなく軍隊を知らない、さっぱりわからないんです。もっと極端な話、今私たちが教えてる学生は冷戦時代を知らず、20世紀を知らないんです。ソ連という言葉を知らないし、ベトナム戦争を含め

て本当に物を知らない。そこは極端なんです。20世紀終わりの段階で、戦争・軍隊を知っている世代が決定的に少数者になって、戦争を知らない世代がもはや中心になり、戦争とは何なのかがわからなくなっているんです。そういうことで歴史的な経験を継承するためにも、もっとその大きなところで、戦争、軍隊ってどういうものだったんだろうっていうのがわからなくなってきました。その学習のため、戦争遺跡の保存、活用が非常に大きな課題として、前面にでてきているのが現在の状況だろうと思います。ところが、そういうものが、いざそういう目で見るとほとんど残っていないというのが、もう一方の状況だろうという事です。

2番目に移ります。特にアジア太平洋戦争期の戦争遺跡というものは、ありそうでないです。そもそもどこに何があるのかがよくわからない。やたらに数があるということは間違いありません。第2次大戦末期には、日本列島自体で、本土決戦に備えてましたから、日本中に色んなものを作ったのは間違いはないんですが、どこに何があったのかなんていう事はさっぱりわかりません。ともかく軍事機密です。戦争中の軍事機密は徹底してます。さらに、現地で作ってますから細部にいたってはもっとわからないです。日本は戦争に負けただけじゃなくて、軍隊そのものがなくなりましたから、資料がないんです。

中央の資料は、8月15日の午前中から焼却が始まりました。連合軍が進駐するまでに重要資料のほとんどが焼却されました。組織そのものが解体してしまいましたから、残らないんです。その前に、兵庫県

もそうですが、だいたい都市空襲で県庁とかの資料も燃えています。組織が残らなかったことも含めて、戦争中の資料は本当になくて、どこになにがあったかっていうことがさっぱりわからない。そして、長らくその戦争遺跡が放置されていた過程で、物そのものがなくなってしまったものが圧倒的に多いです。

鶉野飛行場ですが、飛行場はだっ広い土地で、まず何に使うかという、戦後すぐの食料難の中で、畑です。田んぼにはすぐできませんが、農地や工業用地になるなり、家が建てられるなり、そういう形でどんどん開発され、再利用されて無くなって行きました。今となっては全貌はほとんどわからない。

そういうことで、戦争遺跡への関心を支えている人々は、基本的には地域の有志の方です。我々、たとえば大学の研究者が調べようと思っても、まとまったものがないんです。中央にもありません。県庁の資料もありません。だから地元の人にしか実はこの問題は明らかにできない。聞き取りとか、村の昔から住んでる方にそれぞれあたって資料を発掘するという、すごく手間のかかる作業をやらないことには、戦争遺跡というのがわからない。そういう人が、実はこの間、ほうぼうに現れて、戦争遺跡を明らかにされつつあるということです。

先ほどのこういう本を作ったネットワーク、書き手にどういう方が多いかというと、だいたい地元の学校の先生、小学校や中学校の先生。あとは地元の文化財の担当者、だいたい考古学の人が多いです。大学の歴史の先生はほとんど入ってないです。やはり地元の方々が戦争遺跡に注目され

て、そこを再評価される、掘り起こしをされているのが、現在の状況です。

加西の鶉野の場合、次にお話になる上谷さんです。

上谷さんがその作業をなされたっていうのはとても特殊です。上谷さんは別に学校の先生でもなく、市役所の方でもなく、普通の会社に勤められてる方がこういう作業をされたっていうのは驚異的だと思います。

僕も小野市史を作るときに、鶉野のことがわからなくて、上谷さんのお仕事に本当にお世話になって色々な事がわかりました。上谷さんのお仕事はとても大きいお仕事だと思っています。ここから先の問題は、上谷さんのお仕事の上に乗った話になるのですが、そういう中で色々な事があきらかにされてきた鶉野飛行場です。ここが今日の本題ですが、極めて重要な戦争遺跡だと思っています。

鶉野というと、滑走路が当然思い出されます。実は戦争当時の滑走路が残っているケースはほとんどありません。コンクリートだけ残っているのは結構あります。あと自衛隊が管轄していたから残っているというのはあるのですが、滑走路は基本的に土でできてるものですから、舗装した滑走路が少なかったんです。そういうものはまず残らなくて、畑や宅地になっている。残ってるケースは今使っている、今でも生きてる飛行場、自衛隊の飛行場とかですね、民間のものもありますけど。ただ、今残っている飛行場はジェット機が発着しないといけませんからアスファルトで上から重ねて拡張してるんです。ですから戦争中の滑走路はもう完全にわけがわからなくなりま

す。近代的な現在のジェット機の運用に耐えるような滑走路になってますから、当時の滑走路の面影は全くありません。

鶉野の場合には滑走路だけではなくて、掩体とか、機関銃座、防空壕までが残ってます。それぞれ取り出すと、たとえばコンクリートの掩体は東京の周辺にも結構あります。千葉とか東京でも西の方に行けば、公園の中に調布飛行場の掩体が公園の片隅に整備されてあったりするんですけど、それは単品であるケースがほとんどです。

鶉野の場合には色々な偶然が重なってるんです。まず滑走路がある。そして掩体、機関銃座とか防空壕とか、当時の航空基地の一連の施設が丸々残ってるんです。全て残ってるわけではないんですけど、こういう形で残ってるケースは僕の知る限りでは多分ここだけではないかと思います。

北海道にはあるようですが、ただあれは陸上自衛隊の広大な演習場の中にほったらかしになってるんで、誰もさわってないので残ってるってことです。一般的などころで、こういう形で残ってるケースは多分ないんじゃないかなと思います。

ちなみに鶉野は川西航空機の組立工場もくっついてましたけど、川西のメインの工場は今の西宮になりますが、当時の鳴尾製作所です。あそこには工場と滑走路があったんですけど、現在は完全宅地化されて痕跡が残ってません。だいたいそういうのが普通です。

航空機工場と滑走路のセットでいうと、これ各務原でつくられた戦時記録で、地元の先生方が作ったものですけど、岐阜県各務原市に今でも航空自衛隊の岐阜基地があり、あそこは川崎重工です。ここも結構ま

わりに当時の掩体とか銃座が残っているんですが、なにぶん飛行場そのものはきれいに整備された現代の飛行場で、周りの所に遺跡が残っています。

さっきもいいましたけど鶉野付近は、そういう滑走路の何本かあったうちの1本ではありますが、当時の状況を伝えるような、第2次大戦当時の滑走路、及びそれに付属する施設群がセットで残っていることは極めて貴重な戦争遺跡であると断言できると思います。遺跡保存、活用の話なんですけど、現代史の研究者としてはこういう状況をぜひ保存して、歴史教育に活用するようにしていただきたいと思います。

資料をめぐっていただいて、3ページ目、4ページ目のところにいってもらいたいと思います。これは小野市史の史料編に小野市側で残されていた地元の資料から鶉野関係の資料を抜粋して入れておきました。

飛行場ですが、当然作った人がいるわけです。誰が作ったかという話なんです。当然地元の方が作ったってことなんですけど、一番最初の資料、これはあくまで小野市側、当時の河合村の常会で配られた資料ですが、飛行場の建設計画で、どういう計画かというのが示された資料です。

建設計画は、だいたい3千人動員する構想で、本当だったら10年かかるところを、半年か1年で、ようするに突貫工事でやるということです。誰を使うかということで、うち千人は朝鮮人を使いたい。あと千人は自由出役者ということでした。ようするに加西郡と、加東郡のうち社町、滝野町、河合村、来住村、加茂村から自由出役者で千人集りたい、のこり千人は他の地域の勤労報国隊でまかないたいと、いうも

のです。

見ていくと、地元の町村での自由出役者は、実際にはこれは部落に対する割り当てというかたちで出されています。おもしろいのは3番目の資料です。中部第49部隊とは、当時青野ヶ原にできていました戦車第6聯隊です。戦車第6聯隊の下士官将校が営外居住で当時河合村の中に住んでいたんです。飛行場への動員について抗議しています。自由出役のかたちですが、部落に割り当てられ、それには陸軍の人間も出る、出ないんだったら金払えという話です。ようするに、それは冒とくだということで抗議してるんです。結局は村の人々に対する義務的な勤労奉仕というかたちで、出役がかかっていたことがわかります。

しかし、その出役がなかなかうまくいかなかったというのが4番目の資料です。ようするに農繁期になったら人が減ったという話です。5番目は、これは河合村の方ですが、ようするに鶉野に居た海軍航空隊の人たちが間借りして住んでいたこともわかる資料です。6番目は、終戦間際まで工事がずっと続いていたのだという事がうかがえる資料です。7番目は、高射砲の射撃があるから気をつけろという話です。上谷さんが調べられたデータによれば、25mm機銃ということですが、25mm機銃の有効射程は5,000mくらいです。だいたい半径10kmが危険範囲だと言われてます。機関銃の弾ってというのは爆発しませんから、外れると降ってくるんです。そういうのに注意せよっていうのが、青野ヶ原の向こう側の河合村にも指示がいつてるということです。

飛行場を作るときにも動員されてます

し、飛行場にかかわったパイロットの人たちに宿を提供するとか、鶉野飛行場というのは実はかなり広い範囲の人々に密接に関わった施設であったということも注目し、強調しておきたいところです。

実はさっきも言いましたが、当時青野ヶ原、今の小野市の所には戦車第6聯隊というのができてます。さらに加古川にはもともと陸軍の飛行場があり、高射砲連隊がありました。社には当時、県が嬉野錬成場という学徒の錬成施設を作っています。戦時下のこの地域は、こういう一連の軍事的な施設がかなり集中した地域でした。その一つとして鶉野があるわけですが、今日ほとんど忘れ去られているように思います。

鶉野については、最近ようやく注目が集まっています。鶉野の飛行場を戦争遺跡として考えていく場合には、この東播地域に戦時下に軍事施設が集中していたということも含めて、地域と戦争のかかわりを立体的に明らかにしていく必要がある。地域社会の歴史にとって戦争の時期が持った意味を、より広い目で見て位置づけていく必要があるかと思えます。

そういったことを踏まえた上で、先ほども言いました、鶉野というのは日本の戦争遺跡の中でも屈指の価値を持った遺跡であることは間違いのないわけです。そういうものの歴史的な意義を発信していく必要があるかと思えます。

現在戦争遺跡はブームで、色んなものが出てますが、実はこの中に鶉野飛行場が出てくるのは稀です。これはようするに、こういう運動されている方のネットワークのもっている性格によるかと思えます。兵庫県全体で見渡してみても、上谷さんのような

方がほうぼうに居られるんですが、戦争遺跡そのものを広く位置づけて、明らかにしていこう、発信していこうという運動がそれほど強くはありません。もったいない話で、全体的にこれだけの戦争遺跡が注目を浴びている中で、鶴野を中心とした一連の戦争遺跡をもっと広く発信していけば、その地域を訪れるきっかけになるだろうと私は思います。

たとえば松代大本營のように。原爆ドームは世界遺産ですから別格かもしれませんが、広く平和教育、もしくは戦争遺跡を学ぼうという人々がたくさん居ります。若い人もたくさん関心を持っています。

ちょうど時間になりましたので、基調講演をこれで終わらせていただきます。ありがとうございました。

司会：それでは続きまして、パネリスト報告を上谷先生からいただきます。

ご講演いただく上谷昭夫先生をご紹介します。上谷先生は、鶴野平和祈念の碑苑保存会で鶴野飛行場についての戦史研究を十数年進められています。また研究成果を展示会や講演会、戦跡のガイドなどで発表されるなど、鶴野飛行場の広報大使的な役割にもご尽力されています。

本日は「鶴野飛行場に残された施設」についてご報告いただきます。それでは、上谷先生よろしくお願ひします。

パネリスト報告 1

上谷昭夫（鶴野平和祈念の碑苑保存会）

上谷：皆さんこんにちは。私は鶴野平和祈念の碑苑保存会の上谷と申します。約15年にわたりまして、飛行場のことを色々調査しました。今日は映像で、ひとつひとつの防空壕の跡を見ていただきたいと思います。

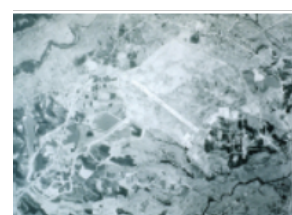


この鶴野飛行場というのは、戦争中の日本海軍の飛行場でした。戦争中は海軍と陸軍とありましたけれども、この山の中に海軍が存在し、兵庫県唯一、兵庫県最大の飛行場といえるのが鶴野飛行場です。

昭和17年の6月5日に日本海軍の大きな敗戦というミッドウェー海戦がありました。この海戦の後、海軍は航空機搭乗員の養成にかかりました。そしてこの鶴野も海戦の終わった後の9月に、この鶴野という土地を海軍が物色し始めまして、建設工事にとりかかっていたわけです。

今から、この鶴野飛行場にどういうものが残っているかを、皆さんに映像を見ていただきながら説明していきたいと思ひます。

この写真は、昭和23年3月、米軍の戦略空軍の偵察機により、鶴野飛行場を撮影



したものです。ここが今現在残っている1200m、幅60mの滑走路で、飛行場の規

横というのがこの規模です。この北の道路が国道 372 号線で、この場所が、今現在神戸大学の食資源教育研究センターのある海軍航空隊の建物跡、それからここに川西航空機の組立工場がありました。ここに誘導路といまして、こういう道路がたくさん残っている。ここが現在のフラワーセンターです。この白い部分が掩体壕と言いまして、飛行機を温存した場所です。この誘導路の延長が約 15,000m、掩体壕は全部で 55 箇所ありました。

この滑走路以外に、このあたりに一本、それからこの滑走路と、全部で 3 本の滑走路が戦争中存在しました。この滑走路は転圧滑走路ですので、戦後畑になってしまいましたが、この滑走路は完全なコンクリートですので、畑にすることもできずに現在も残っています。そして神戸大学の中にはこの白い部分、当時の道路なんですけど、現在もそのまま残っております。

これは現在の滑走路を上空から見た写真、南側から北側をのぞんだ写真です。真ん中の白くなっているのは、平成 9 年にこの飛行場跡地を使って航空スカイパークフェスタを行いまして、ここでみなさん見学されたんですけど、飛行機やヘリコプター、グライダーが飛んで来たりして、航空ショーをしました。そのために真ん中だけは飛行機が着陸できるように整備されているわけです。

そしてこの写真は、鶉野南から東北を眺めた飛行場で、この水路が官民境界線といまして、飛行場と民有地との境目の水路



です。この見える部分全部が飛行場跡です。

これは、この飛行場を上空から見下ろした写真です。これが神戸大学の中にある辰



池、これが今神戸大学事務所のところ、ここに牛舎など色々あるんですが、この四角い部分がエプロンといまして、飛行機を並べていた場所で、ここに格納庫がずらっと並んでおりました。この付近には兵舎があったという場所です。

これはまた違った方向の写真なんですが、鶉野南の交差点からまっすぐ北に上っていきますと、ここに滑走路、これが川西航空機の組立工場の跡、ここは今は養鶏場になっております。これは大学の現在の建物で、ここには魚雷調整庫という建物がありました。

この写真は、海軍航空隊の人たちが航空隊へ行く最初の入口、大正 4



年 3 月 3 日に出来上がった国鉄北条線の法華口駅です。当時は播州鉄道といいましたが、播州鉄道、播丹鉄道となり、昭和 18 年 6 月には国鉄に買い上げられ、戦争中は国鉄の北条線法華口駅として現在もその姿をとどめております。

それでは法華口駅から航空隊へたどっていく道を上げていきます。これは現在流通セ



ンターがある前の道です。北へ上り、この林の中を通り抜けて行きますと、右側に防空壕がどんどん出てきます。

この流通センターの裏側に、弾薬庫があり、中に爆弾や機銃弾、魚雷、火器類を格納しておりました。



このコンクリートの厚みは1m、壁の厚みは70cm、500万トンにも耐えられるという強固な構造で、コンクリートも非常にまだきれいなままです。

これが内部です。天井は上からの加圧に耐えられるように円形になっております。



この奥行きは約15m、幅は4mの広さです。

道路の際を歩いていきますと、所々こういうような洞穴の入口があります。これは素掘りの防空壕とい



いまして、兵隊が道路を歩いている時に、空襲にあった時にこの壕の中に駆け込む場所です。

その内部です。これは右の方向に曲がるんですけど、横にまた入



ていくことができます。高さは約3m、幅は2m50くらいの幅です。これは土をくだいて切り開いたままの状態が残っております。

またもう1つの場所ですけど、こういうふう

に現在誰が入っても危険ということでバリケードをしてロープを張っております。この中も見させていただきました。これも少し崩落しかかっております。これもこちらの方向に曲がっていきますとまた向こうに出口があります。



神戸大学の農場の入口に行きますと、そこには衛門という門がありまして、衛兵詰所の横にこういう防空壕があります。これはコンクリート製で、非常に頑丈なものです。



その内部です。入って行きますと道がわかれていきます。こういうふう

に折れて、コの字型になっています。この中は一応広い場所がありまして、机を置くなり、ある程度人が入って色々な事務仕事もできるような場所になります。

これは現在、神戸大学の入口なんですけど、今鎖をはっています。このあいだからの口蹄疫の問題がありましたので、誰でも勝手に入ることができないように、看板が立っています。

この道も戦争中にあった、海軍の作った道路です。それからここに本部庁舎と

いまして、大きな庁舎、その裏に兵舎、それからここに防空壕なんかも見られるんですけど、これが海軍の中枢部のあった場所、今は畑になっております。

航空隊入口の横には自動車部隊がありま

して、現在木が生い茂っております。そしてその自動車部隊の車庫の横にはこういう地下壕があります。非常に広い地下室になっておりまして、ここが自動車部隊の備品を色々貯蔵したり、退避するなどして使われていたんじゃないかと思います。



そして、その先ほどの車庫の所から下におりてきますとこういう洞窟が見えてきます。



その内部です。これも幅3m、高さ3m50、奥行きは約20mという倉庫になっております。ここは需品倉庫といいまして、ここにもある程度の武器、弾薬もおさめていたんじゃないかという場所です。



そして先ほどの地下壕の上にこういうようなきれいな建物があります。モルタル仕上げにして、人が入れるようにしてあります。ここは小銃を置いている場所で、この前にちょっと小高い山があるんですけど、爆風除けの山もこの右側に残っております。内部はこういう風にきれいになってます。これは非常に幅も狭く、1m50くらいで、高さが3mくらいあります。現在は民間の方が農業用倉庫と



して使用されております。

そして神戸大の中に入っていきますと、こういう小高い山があります。これは海軍の



施設で、電気を供給する発電機室がこの中にあります。この飛行場の中でも最大規模の地下壕です。今は枯れ草も生えており、防空壕の側面に入口があり、ブロックで閉鎖しております。この中は非常に広い場所らしいのですが、私もまだこの中へ入って見た事はないです。今見えておりますこの下にかかなりの地下室があります。

大学の中にこういう大きな防火用水があります。この直径が内径5m、深さ10mで、水がいっぱいたまっております。約200t近い水がここに溜まる計算になっておりまして、現在は神戸大学としてもこれを田んぼの灌漑に使っています。



航空隊の横に病院施設がありました。その病院の後にも同じような防火用水が一つありました。

それから東笠原に建設作業所があるんですけど、入口にこういうような防空壕があり、これも奥行15m、幅約3mのもので、現在はこの中に農機具とか色んなものを収納しております。



また川西航空機工場のところにも、こう

いう防火用水が戦争中は3箇所あったんですけど、1つは現在残っております。

先ほどの建設作業所の横、この上に航空隊の通信部隊がありました。この防空壕も奥行きが20mくらいあります。この内部は、入口がここにあり、ここにまたひとつ部屋があって、これから奥は広がっています。このコンクリートも非常にきれいです。



それから東笠原の藪の中、ここには敵艦載機への攻撃をするための対空機銃の銃座が残っています。内部はこのようになっておりまして、直径

5m、ここに人がおりますけど、ここに機関銃を据えております。この機関銃は25mm



連装機銃といまして、2丁の機銃が出ておりまして、1分間320発の弾がでます。低空から進入してくる飛行機を攻撃するための機銃なんですけど、射程距離が3,000～3,500m、水平で弾を撃てば6,000mくらいまでは対応できるんですけど、対空機銃の低空用の機銃ですので、3,000mくらいでも十分あたるということです。こういう機銃の銃座は全部で4箇所ありました。現在その4箇所のうち3箇所が残っております。この下は地下室になってまして、地下室から上がってきて、このような小空

間が3箇所ありますが、この中に機銃弾を格納します。

病院跡へ行きますと、病院の排水を沈下させて排水するという、浄化槽の役目をする施設が現在残っています。



これは神戸大学の中にある池の側にある防空壕です。これもほとんど皆さん今までで見られたことないと思いますけど、何とか私が探しました。これも奥行きが10m、間口が2.5mの鉄筋コンクリート構造で、非常に強固なかたちで作られています。

これは病院跡の前のコンクリートなんですけど、ここに病院がありまして、こういうコンクリートが未だに残っています。



そして飛行場はずいぶんと排水施設を作っております。これが排水溝のかたちなんです



が、こういう平たい形をして、このように少しの空間があり、ここから水が入って、非常に効率的な感じの水路になっており、これが飛行場の中を縦横無尽に敷設されています。

これは鶉野上町にある対空機銃の銃座の入口です。

その内部です。草が生えておりま



すけれど、完全な形で残っています。これが対空機銃の銃座です。

これが神戸大学の中にある銃座。この右側の入口から入っていきま



すと、中は完全な地下室で、現在水が溜まっておりますので、ちょっと入りにくくなっております。これが入口なんですけど、弾薬を入れる場所です。この上側に機銃が座っておりました。その地下室へ入る内部の階段です。この中に大きな柱がありまして、このまわりをぐるっとまわるような施設になってます。

そしてこれは大学の中にある地下壕です。ふたを開けますと、このように中へ入って行って、この奥行きが約26m、夏でも涼しく、冬は暖かいという場所です。



そして本部庁舎の横に、こういう小高い山が2つありますけど、これは暗号班がここで通信しておりました。暗号班独自の発電機、これがこの中の発電機室にありました。



これは滑走路の一番北の端に小畑池という池があります。その池の堤のところにこうい



うコンクリートの防空壕が残っております。これが池の中なんですけど、この中から何か出てくるんじゃないかという事で、ショベルカーを使いまして掘ったんですけど、何も出てこなかったです。

これが神戸大学の中の非常に広い広場、飛行機を駐機する場所、エプロンといいます。このエプロンで、



昭和20年3月23日、特攻隊の編成をした時に、ここで別れの杯を交わしました。ちょうどこの場所にテーブルを置き、飛行機はこの手前に2機の九七式艦上攻撃機という飛行機が並べられ、送るもの、行くものが、1杯の杯を交わしたのです。

大学の横にある民家の庭に、こういう大きな防空壕が見えてますけど、この下が地下室になっております。今は水がいっぱいたまって入ることができません。



その隣には、建物の横にこういう防空壕が残っております。幅2.5m、奥行き約10mです。これが家の横にあるのはなんだか不自然なんですけど、現在はこの形で残っております。



これは先ほどの大きな防空壕の裏に、格納庫がありました。幅26m。その格納庫が4棟あった跡なんですけど、転々と基

礎があり、エプロン部分と格納庫の間に水を排水する水路がありまして、現在もそのままの状態が残っております。

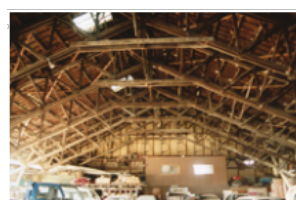


これが大学の事務所なんですけど、この前の道の横に植樹があります。これは資料を調べますと、この下に燃料タンク、ガソリンをいっぱい溜めていたタンクが、表には見えないんですけど残っております、この上で耕作しても何もできないのでおかしいと思いますと、実はこの下は全部コンクリートだったということです。その入口がここにあります。

これは大学の中にある辰池という池の堤にある防空壕です。内部はこういう形になります。通路があり、またこちらに抜ける。それからこちらに階段がありまして、上がっていくと外に出られるという、3方向、4方向の入口のある非常に大きな防空壕が堤中に2つあります。これが出口なんですけど、草が生えておりますので、外から見ても見えないかもしれません。



これは鶴野ではないんですけど、川西航空機が組立工場を持っておりまして。その3棟のうちの1つが現在姫路の西中島という



ところに移築され倉庫として使われております。長さ25m、間口25mの柱のないトラス構造の建物です。内部はこのようになっています。柱が1本もない状態の大きな建物です。格納庫もこういふかたちで航空隊が作りました。

これは3年前に「火垂の墓」のロケをした場所です。航空隊からこの土の道を、主人公のお兄ちゃん



がリヤカーを引いて、後ろに節子というかわいらしい女の子を乗せて歩くシーンです。出征兵士を送るシーンとそれからこの人たちのすれ違いをするという場面のロケがこの場所で行われました。この木のところに監督がカメラを構えて、ここから撮影しました。

戦争が終わった後、日本国土地院では全国で空中写真を撮影しております。昭和36年に撮影したものを、ここに出したんですけど、これが航空隊の跡地です。これが現在の神戸大学、これがエプロン、黒いところが全部格納庫なんです。ここからここまでが約100m、これも100m、このエプロンは150m四方の場所で、飛行機を駐機しておりました。

ここに航空隊の建物、庁舎、兵舎がありました。ここには自動車部隊、病院、通信部隊があります。これが滑走路、ここに川西航空機がありました。ここに馬力で飛行機を運んできます。順番に組み立てをしながら完成をさせて、この滑走路から試験飛行を行います。航空隊は別個の場所でおのの機能を行っております。

姫路航空隊にどういふ飛行機が使われたか、ということで唯一残ってる写真で紹介したいと思います。

これは艦上攻撃機「天山」といひまして、昭和18年に正式採用された中島航空機が作った飛行機で、現在の富士重工で作った飛行機です。



この姫路航空隊の飛行機は、ヒメ306号機と書いてありますけど、こういう写真が1枚だけ見つかりました。この搭乗員の方が現在松山に生存されておりましたので、その方からいただきました。

この飛行機がまさに、昭和20年3月23日、この格納庫の前より宇佐に向かって、先ほど宇佐市の宇佐航空隊って話が出てましたけど、宇佐海軍航空隊部隊へ向けて発進するところです。プロペラが回っております。整備兵がこのチョークという車輪止めをはずすとたちまち出撃します。この飛行機の出撃する前には旧式の飛行機が全部出撃しました。この飛行機は非常に新しい飛行機で、後からいっても十分追いつけるということで最後に発進するとき、整備兵が唯一1枚写しました。

昭和20年の10月末、アメリカ軍が鶉野飛行場に進駐してきました。その時にアメリカ軍は鶉野から3機の戦闘機を横須賀へもってこいという指令がでました。兵隊たちはみんな帰っていったんですけど、この工場に整備兵がまた呼び寄せられまして、鶉野の格納庫の前で、この飛行機は紫電という戦闘機ですが、この時既にアメリカに占領されておりますので、日の丸の場

所には星のマークがついてます。この時、横須賀には3機の戦闘機が行きました。この飛



行機を監視するために、10機のグラマンという戦闘機で取り囲んで行っております。ところがこの戦闘機も戦争中の悪い油ではなく、戦後の非常にいいガソリンを入れましたところ、すごいスピードが出るようになりまして、巡航速度もグラマンでもなかなか追いつけなかったというエピソードがあります。この3人の搭乗員は現在もまだ生存しております。

そして姫路海軍航空隊の最初の練習機、九七式艦上戦闘機といひまして、昭和12年に開発され



て、真珠湾攻撃に活躍した飛行機です。練習機に改造して、姫路航空隊に20機もってきました。唯一残った写真の1枚でヒメ342号という事ですけど、この飛行機も昭和20年4月6日、沖縄戦の特攻でこの飛行機は突入しました。ここに3名の搭乗員が載っております。操縦兵・偵察兵・通信兵、ここは無線をうつひと、ここは指揮官が乗ります。ここは、鶉野上の大岩寅吉海軍少尉という人がのっていました。さきほどの天山という飛行機が2機とあわせて計22機の飛行機が姫路海軍航空隊の練習航空隊の練習機でした。

そして日本海軍は、終戦末期、起死回生をかけた戦闘機、紫電改という戦闘機を鶉野で作っております。紫電466機、紫電

改44機、合計510機の戦闘機が川西で作られました。川西航空機全体の紫電1000機、鳴尾工場で紫電が444機作られました。そのうちの姫路工場の510機、これが鶴野で組み立てられて、これが終戦末期、アメリカの戦闘機にすごく打撃を与えたという戦闘機です。

鶴野飛行場で、私が市役所で展示する模型飛行機を寝そべて写したもので、本物に近い状態で写しました。



以上をもって現在に残る鶴野飛行場の、全容とは言いませんけども、鶴野には、私たちが調査しただけでも約60箇所くらいの戦争遺跡が現在も残っております。今はある程度容易に見れる場所を皆さんに見ていただきました。

私たち保存会では平和祈念の碑苑の保存と、こういうように歴史遺産となるようなものを、後世に語り継ぎ、また残していきたいということで現在も私たちは調査を続行しております。これで、私の説明は終わりたいと思います。

司会：続きまして、パネリスト報告を佐々木先生からいただきたいと思います。

ご講演いただきます佐々木先生をご紹介します。佐々木先生は現在神戸大学地域連携推進室研究員でございまして、専門は日本近現代史、歴史資料学で、主に戦時の空襲について研究しておられます。大学では阪神淡路大震災の資料保存活用に関して授業を担当されています。なお、今回の共同研究につきましても、中心になってご

尽力いただいております。

本日は共同研究の成果ということで、戦争遺産の活用についてご報告いただきます。それでは先生、よろしく願いいたします。

パネリスト報告2

佐々木和子（神戸大学地域連携推進室研究員）

佐々木：こんにちは。ただいまご紹介に預かりました佐々木です。どうぞよろしく願いいたします。



今日報告させていただきますのは、戦争遺跡の活用事例報告ということでございます。加西市との共同研究として、他地域でこのような戦争遺跡がどのように活用されているか等を調査してまいりました。その一端を報告させていただきたいと思えます。

先ほど高岡先生から、戦争遺跡と文化財ということでお話がありました。1990年、平成2年3月に沖縄陸軍病院の南風原壕が、沖縄県南風原町の指定文化財になりました。95年には大分県宇佐市の、城井一号掩体壕が宇佐市の指定文化財になっております。先ほど丁寧な高岡先生のご説明がありましたが、このあと色んな所で戦争遺跡の活用が行われております。その中で代表的なものをご紹介します。

一つは千葉県の館山市周辺の戦争遺跡です。南房総という戦跡マップをあげております。これは東京湾海口部にあり、対外政

策上、軍事戦略上、非常に重要なところで、東京湾要塞群として施設がたくさん残っている所です。

さて、房総半島の南側では、たくさん戦争遺跡が残っております。館山海軍航空隊、館山海軍砲術学校、洲崎海軍航空隊なども設置されておりましたし、また戦争末期にはこの地を含めて、帝都防衛の掛け声の下に、本土決戦体制ということでさまざまな特攻基地などの施設が作られております。

私たちは、館山海軍航空隊赤山地下壕を中心に調査してまいりました。館山で中心になって案内していただいたのが、NPO法人安房文化遺産フォーラムです。

少しその安房文化遺産フォーラムの説明をいたします。このNPOは、戦争遺跡だけではなく、南房総、安房地域にある海や花などの自然環境、風土に根付く歴史的な文化遺産など、その地域に今あるものを活かした地域づくりができないだろうか、ということで、地域を見直し、自然や歴史・文化の保存、再生を願いながら地域の活性化をはかるあり方を探るということで設立されました。ちょうど2004年の事です。

この考え方は、実は地域まるごと博物館というものです。房総半島である安房全域には、里見八犬伝で有名な稲村城址の保存運動ですとか、房総半島の暖かい地形を利用し、転地療養してこられた文化人の方ですとか、ちょうど日本列島の真ん中に太平洋に突き出したかたちにあるところですから、太平洋を通じて、海を通じての交流というような痕跡が残っております。

さらに先ほど話しました、東京湾開口部にあるということでたくさん作られ、今な



お残存している戦争遺跡、こういった、今あるものを全部含めて、その関連施設を、あるいは地域の特性を持ったものを中核施設にしながら、地域まるごと博物館ということで、市民による市民のための市民が主体・主役となる地域づくりをおこなうために、ということでこのNPO法人が作られました。

地域まるごと博物館の中でも、戦争遺跡の保存運動を含む歴史的環境の保存活用が中心になっています。1989年（昭和64年）頃から安房の戦争遺跡の調査を行い、1996年（平成8年）に、里見氏の稲村城跡のまんなかにかに市道が建設されるということで、そういった保存運動を行ってこられています。先ほどNPOの安房文化遺産フォーラムの所に、綺麗な大正期の銀行建物をのせておきましたけれども、所有者が居なくなり放置されていた大正期の銀行建物を、2006年よりこのNPO法人が管理・使用しています。あるいは先ほど転地療養している文化人がよく住んでいたと話しましたが、画家の青木繁による「海の子」が生まれた家、と言いますか、その当時青木が住んでいた家の保存運動ですとか、特に

歴史的環境の保存活用に力を入れてまいりました。

その中でも、先ほど言いましたように里見稲村城址の保存運動と、館山の戦争遺跡の保存運動・調査、それらを中心に文化遺産フォーラムが立ち上がり、2004年にNPOというかたちになりました。

その中で、たくさんあります史跡の中で、市有地にある、また内部の構造が丈夫であるということで、非常に史跡の指定がしやすい海軍航空隊の赤山地下壕が市の史跡、文化財として指定されて、見学ができるようになりました。

これは館山市が管理しているものですから、入場料は無料ということになっています。3月から10月には午前10時から午後4時まで、あるいは11月から2月には10時から3時まで、自由に入れるということになります。ただ、壕に入ります時には、隣にちょうど公民館がありますので、豊津ホールと申しますけれども、その地下壕の入口脇で、受付をして、ヘルメットを借りて、必要であれば懐中電灯を借りて入る、というようなかたちで自由に入れるようになっております。

市は毎月第2日曜10時から12時には



無料ガイドをつけております。ただし、その対象は個人や小グループのみです。10名以上の団体は事前に有料ガイドに問い合わせるとい事になっております。

有料ガイドを引き受けておりますのが、先ほどのNPOの安房文化遺産フォーラムです。

安房文化遺産フォーラムのガイドツアーについては、インターネット上で、「安房文化遺産フォーラム」と入れていただくと検索していただきますと、立派なホームページが出てきます。その中にNPOの趣旨ですとか、まるごと博物館の意味ですとか、あるいは東京湾の位置の話、あるいは里見八犬伝の話等々が掲載されています。非常に細かい丁寧なホームページが作られており、その中にツアーガイドのご案内というのがあります。

NPOの安房文化遺産フォーラムではこういうツアーガイドをやっております。ただ、10人以上で申し込んでくださいということが言われています。人数が足りなければ、複数グループでもいいですよ、ということ。その理由はと、お尋ねしますと、実はこれにはガイドが付きます。ガイドさんにはほとんど交通費のみしかお支払いしませんが、10人以上集まらないとなかなかそれもしんどい、という事で、10人以上のグループにして欲しいとお話されました。

この特徴は、見学コースだけではなくて、まず座学を受けることから始めるところです。座学というのは、この館山の戦跡から見るアジア太平洋戦争とか、戦跡を活用した教育と地域づくりとか、つまり、地域まるごと博物館というかたちで、安房

について勉強する。今日のようなパワーポイントを見ながら、勉強する時間があります。

この安房について、まず勉強していただいて、知っていただく。そして地域の持っている意味とか、他の遺跡との関係とか、色々説明をいただいた後、見学コースへと出ていきます。

団体バスに添乗して、2時間ないし3時間。カラーのガイドブック付きと書いてありますけれども、基本は一人当たり1500円、料金は行程時間・日数によって異なりますという事で、これについてはオプションなど、色々こちらの希望をかなえていただけるということになっています。

ここにツアーガイドの基本的なコースがのっています。Aコースですと、アメリカの占領軍の初上陸地点から、館山海軍航空隊の赤山地下壕跡、あるいはその近くにあります戦闘機用の掩体壕、洲崎海軍航空隊の射撃場跡等々、その興味に応じて、あるいは時間にに応じて色々まわることができるというコースが作られています。

アメリカの占領軍の初上陸地点とは、1945年（昭和20）9月2日に日本は、東京湾のミズーリ号で降伏文書に調印をしました。その翌日、9月3日の日に、アメリカの占領軍が館山に初上陸しました。その時の地点が、今でも見れるということです。そしてそこ、下にかいてありますように、それは決して戦跡だけということではなくて、戦国大名里見氏の城、あるいは文化財めぐり、日韓交流に関わるハンゲルめぐりなど、地域の歴史文化財についても必要であればご案内しますということで、戦跡だけではなくて、この安房国再発見、あ



るいは地域まるごと博物館ということで、その間について色々みることができるようになっております。

この時来られるツアーのガイドさんっていうのは、地域の方です。ガイドにやってきてくださるんですけど、それについては決まった本があったり、マニュアルがあったりするわけではありません。ガイドさんの後をついていって、それなりに、自分なりに、その人なりのやり方を覚えるといった方法をとっておられるようです。

赤山地下壕は、市の管理と申しました。赤山地下壕は、市の持ち物ですから、市の窓口申し込む、ただしこのツアーガイドに入れば、その申し込みあるいは手続き等については、このNPO法人がやってくれるという事になっております。

土曜日日曜日は、中央公民館の市の管理はお休みで、地元の方が保存協力会とかたちで受付を行われています。

ツアーガイドについて、一番多いのは小中学校の平和学習利用です。市外からの見学者が多いと聞きました。昨年の見学者は1万7千人、修学旅行などによく訪れられてるということです。アクアラインができましたので、修学旅行で、新幹線を利用し

て関西などからやってきた学校が、東京からバスでアクアラインを通して、館山までやって来て、半日なり勉強をする。そして次の日はディズニーランドをまわって帰る、というコースでたくさん修学旅行生がきているという事です。

ツアーガイドを行っている NPO 法人の代表は、ガイド事業というのは高齢者の生きがいつくりにもなる、ガイドと見学者との人の交流を大事にしているんだとおっしゃっていました。

NPO はガイド料が年間 400 万円ほど入るとおっしゃっていました。しかし、経営自体は非常に苦しいようです。専任の職員は、これでも 2 人しかおけないとおっしゃっていました。ただ非常にたくさんの方がきて、交流して帰っていくというお話でした。

次に先ほどの上谷さんのお話に出てきました、大分県宇佐市周辺の戦争遺跡をご紹介します。

こちらは NPO というよりも宇佐市が中心になって整備している所です。

宇佐市には、戦争中には宇佐航空隊基地があった地域です。ちょうど真ん中のあたりに色が変わっておりますのが宇佐航空隊の跡のところ。周りに番号がうってあります。2 番滑走路跡、あるいは 3 番爆弾池、レンガ造りの建物、特攻隊の慰霊碑、生き残り門等々書いてありますけれども、この滑走路跡というところは、実は宇佐周辺には、戦争遺跡がたくさん残っているのですが、滑走路そのものは残っておりません。

これが何枚かとってきたうちの写真のひとつです。柳ヶ浦駅という日豊本線の駅を



降りますと、こういう大きな看板が駅にかかっています。ツーリズム推進都市宇佐市ということです。イベント情報もありますその横に城井 1 号掩隊壕の写真、絵と、それから、ツーリズムに力をいれているということでこういう大きな看板がかかっています。

その横にありますのが滑走路跡です。滑走路のように見えますけども、ちょうどこの上を道路が走っております。ちょうど白い車が走っている所が見えるかと思えます。滑走路そのものは残っていませんから、滑走路跡ということがわかるように、下にありますような平和の願いというような、モニュメントを作ったり、こういう何 m かおきにモニュメント、これは寄付等の良財をいただいでつくったというものも含まれておりますけれども、ここが滑走路ですよと示すような事をされております。

爆弾池の写真もあります。爆弾池というのは、若い方はご存じないと思いますが、私も全然話にしか聞いたことがないんで

すけども、爆弾が落ちた後、破裂して穴が開いており、ちょっとご年配の方だったら、ああこの辺にたくさんあったとおっしゃ



るかもしれないんだけど、実際に今でも爆弾池が残っています。

持ち主が学校の先生だったということで、本当にめずらしく残っています。実際に耕作されている方にとっては機械が入りにくいので、本当は埋め戻してほしいという話もききました。でも唯一ということなので、保存する方向で考えられています。

この建物が、実は当時の建物です。当時のレンガ造りの建物です。これも実際本当は何に使われていたのかよくわからなくなっています。



実際には、時期によって、色んなかたちで使われていたのだろうということです。

この建物は、実は国有地に建っている国の建物です。これを含め3つの建物が国有地に残っているということです。この国有地にある建物について、これをどうするか、国のほうは買ってほしいということですが、国有地の建物について、どのようなかたちで今後整備していくか、現在宇佐市のほうで、委員会等つくられて検討をされています。

こういう戦争遺跡の保存整備状況です。一番最初に、宇佐市が中心に行っているといいましたけど、これも決して市が初めか

ら音頭をとってやったわけでもありません。1983年（昭和58年）に大分県が豊ノ国づくり塾ということで、地域づくりの塾を地域で作るといふ、開塾するということで、県内12地区に3年間、開設しました。その中で宇佐市の地域が「宇佐市塾」といふ豊ノ国づくり塾の宇佐塾の卒塾生を中心としたグループが、卒業生たちが地域をもう一度見直そうということで、活動を始めました。

自分たちの地域をもう1回足元から見直そうという時に、まず著名人である徳光利一を調べよう、そして次の年は双葉山について調べよう、ということが続けられました。

そういう著名人に続いて、自分たちの町、自分たちの足元を見直してみたら、やはり自分たちの町は宇佐航空隊を抜きには語れないだろう、ということで宇佐航空隊に目を向けられました。

そういう活動がはじまってきますと、92年宇佐海軍航空隊の海軍日記発見とかいてありますけども、その宇佐航空隊の門が、本当に埋もれて、埋没していたのがみつかった。そしてそれをもう一度掘り起こして建て直すというようなことをはじめられました。

宇佐市での戦争遺跡保存活動は市がやっている事業ということですが、やはりうしろから後押しをしたのは地元の人たちです。そして、それに応えるかたちで、市は宇佐航空隊の史跡等の保存事業の検討委員会を作ったり、保存事業基金をはじめられました。

城井一号掩隊壕というコンクリート造りの掩体壕が市の指定の文化財になったのが

戦後50年の95年の3月です。戦争遺跡で、指定文化財に1番最初になりましたのが90年の沖縄県南風原の病院壕ですけども、それに続く第2番目のものです。

それにともなって自治省から地域文化財の保全事業のお金をもらったり、あるいは地元の人に史跡の管理委託契約をお願いしたりして、史跡公園を整備してまいりました。

史跡公園を整備するのにあたっては地域振興事業調整費等で、上手に国のお金を援助をいただいております。その補助金を活用して、モニュメントをつくったり、また地域振興事業の調整事業として、観光トイレを作るというようなこともされております。

これは宇佐市塾の人たちが作られた冊子です。これ1と3ですけども、4冊、こういう宇佐航空隊の世界という本をだしております。

これが城井一号掩体号の史跡公園の写真です。真ん中にありますのが掩体壕です。この中に多分広さからして零戦のような戦闘機が入っていたらろうということで、現在ではこの中に別府湾から見つかりました零戦のプロペラが飾られています。整備事業として作られました鎮魂の碑ですとか、それからその横には先ほど滑走路跡に並ん



でございましたモニュメントに俳句を刻んだようなものが並んでおります。

これもやはり市民といいますか、他地域の方が最初言ってこられたということですけども、そういう戦争関係の碑、俳句などを寄付によってご自分の句、あるいは唄等を刻んだようなものが建てられています。このように、まわり何もなくてすから、やはり観光トイレも必要だろうということでトイレが整備されたということです。

城井1号掩体壕史跡公園ということになっておりますけれども、まわりにはいくつか掩体壕残っております。築山のようになっておりますして車が入っておりますから、現在はこういう車庫に使われて、そして上は庭になっているというような例があります。そして家が横に写っていますから、大きさを比べてください。これが一番大きい分です。

先ほど見ていただきました城井一号掩体壕は、サイズからして戦闘機だろうということですけども、これは家が横にあるのを見ていただいたらわかりますでしょうが、非常に巨大なんです。これはサイズからして爆撃機が入っていたものであろうということです。

写真からみると、これ半分だけで何のこともかさっぱりわからんという感じです。実はこれは無蓋の掩体壕です。無蓋というのは覆いのない掩体壕、掘り込みが入ったような掩体壕、こういうものも残っております。宇佐には実は10基、有蓋なものもきれいなかたちで掩体壕が残っております。

その他、宇佐では子供たちにも掩体壕の残る町ということで、小学校・中学校、小

学校低学年、あるいは中学校高学年用、中学校用というかたちで副読本が作られています。掩体壕の残る町ということで、必ず、自分たちの町の戦争中の暮らしということで勉強するようになっております。

最後に、1番最初に戦争遺跡が町の文化財として指定されました、沖縄県南風原町の病院壕についても少し触れておきたいと思えます。

レジュメのところでも申し訳ないんですけども、南風原市と書いてありますけれども、まだここは南風原町のままです。ですから、あとで町・当時と書いてありますけれども、隣の南城とちょっと勘違いしておりましたので、今でも南風原町ということでレジュメのほうを修正してください。

南風原町については、陸軍病院壕が、戦争遺跡では、全国初の指定文化財になりました。きっかけはと言いますと、沖縄県立の南風原高校で学園祭で沖縄戦をテーマに企画展示をしたことに始まると言われております。昭和58年の事です。そしてその後十余年かけて、若者によって、字別に、全地域の戦災の実態の悉皆調査が行われました。その間に初代の南風原文化センターで南風原と沖縄戦ということで陸軍病院壕の復元展示が行われています。

そうしまして90年にはこの沖縄陸軍病院南風原壕が町指定文化財になりました。これが全国初の戦争遺跡の指定です。

ただこれに関しても、先ほど高岡先生のほうからご説明ありましたけように、文化財としては、当時、なかなか理解してもらえませんでした。ですから、町としても文化財の保護条例を改正して、沖縄戦に関するものという条文を付け加えて、指定文化

財にしたと聞いております。

このあと保存活用について色々ご苦労なさってきました。病院壕に人を入れるのは危険だからということで、見るだけというような答申がでたんですけど、やはり中に入ってもらわないと、ということで町長が変更したという風に聞いております。

そのあと2003年には整備公開についての答申書が出、2006年度からはガイド養成講座が行われ、2007年には沖縄陸軍病院南風原壕25号の公開がされております。

沖縄県ではガイドはこういうガイド養成講座によって養成されたガイドによって行われているということです。

現在、戦争の記憶は人から物への時代だというふうに言われています。戦争遺跡の活用に注目が集まってきた事の背景です。ただし、物は決して何も語りません。人を通して語らないと戦争を語れないということでガイドの役割というのは重要になってきます。そのガイドたちが色んなかたちで、地域地域でやり方は色々ですけども、養成されながら、自分たちの言葉で出会ってきた人と交流をしながら戦争の記憶を伝えているという時代です。

その他で、平和学習の物証・語り部として体験型・参加型観光・修学旅行の対象として戦争遺跡が見直されています。

しかし戦争遺跡だけをとりあげているということではありません。地域まるごと博物館に見られるように、あるいは南風原の平和ガイドの方は、25号のガイドから各ガイドマップを作って話を進めてきたように、あるいは宇佐も、宇佐の歴史の町、宇佐八幡宮から現代遺跡までというように、地域の全体の自分たちの町の歴史を語るも

のの一つとして取り上げられているというところも、現在の戦争遺跡のかたちがうまくいっているところの特徴だというふうに思っています。ではここまでにしたと思います。

司会：続きまして、パネリスト報告を坂江渉先生からご報告いただきます。

坂江先生をご紹介させていただきます。坂江先生は神戸大学人文学研究科特命准教授でいらっしゃいまして、専門は古代史です。加西市史の執筆にも携わっていただいております。今日は、「鶉野周辺の歴史的風土」というテーマで報告をお願いします。よろしくお願いたします。

パネリスト報告 3

坂江渉（神戸大学人文学研究科特命准教授）

坂江：坂江渉と申します。現在、神戸大学の大学院人文学研究科地域連携センターで働いています。これは



兵庫県内の文化財や、身近な歴史遺産を活用しようという組織です。加西市との連携協定にもとづく事業も、このセンターを中心にしています。今から、鶉野地域の文化財、とくにこの地域の古代、中世の歴史遺産や歴史的環境について話したいと存じます。

まず古代の加西市域は、奈良時代には賀毛郡（かもぐん）という巨大な郡の一部でした。「播磨国風土記」（はりまのくにふど

き）という書物には、郡内の里の数について載っています。それをみると賀毛郡には、トータル 12 里がありました。これは当時の播磨国内の中で、第三位の数の多さとなります。

配付資料には、それらの里の配置状況載せておきました。その中で鶉野はどこになるかということ、おそらく榎原里（ならはらのさと）という里に属していたと考えられます。ちなみに榎原の「榎（なら）」というのは、わかりやすく言うと、「どんぐりの木」です。だからこの里にはどんぐりの木が多かった。

そのほか榎原里にはどんな地名があったか。「播磨国風土記」には、伎須美野（きすみの）という地名がでできます。場所はおそらく市域外の、小野市の来住町（きしちょう）あたりだったと推定されます。

次に風土記に出てくる地名としては、飯盛嵩（いもりだけ）があります。この比定地は市内の豊倉町の飯盛山です。さらに同じく御飯の神話に関連して、糠岡（ぬかおか）という山も出てきます。この地名も現存していませんが、加西市域の南部地域、小野市との境の、網引町に糠塚山というのがある。北条鉄道の網引駅に降りたって南西方向をみると、この糠塚山を眺めることができます。

さらに古代史の専門家の間では、全国的に名が知れ渡っている玉野村と玉丘。これはまさにこの福社会館の近くに比定されている地名です。有名な根日女（ねひめ）の悲劇に関わる地名です。二人の皇族から同時に求婚され、宮中への召し入れを待ち続けている間に（二人の皇子が互いに譲り合ったので）、あっという間に年を取り亡

なくなってしまったという。そこで二人の皇子は、そのお墓を玉でもって飾った。だから玉丘といい、その村を玉野村というんだという風にでてまいります。

こういう6つの地名が、この地域に残っております。私はこの中で玉野という地名は、現在の玉野町あたりのみならず、もうちょっと広い範囲、つまり現在の鶉野あたりも含めて、そう呼んでいたのではないかと考えています。というのも、このあたりを中世の時代の14世紀頃に通った人の「旅日記」が残っており、それによると、鶉野も実は「玉野」と呼ばれていたらしいのです。

みなさんよくご存知だと思いますが、中世以降、この鶉野あたりは、西国三十三箇所のお観音巡礼のルートになっておりました。かつてのこの地域は、決して孤立した片田舎ではなく、いろんな人の行き交う、情報の集まりやすいところでした。外来者、巡礼者と地元の人々の多彩な交流、ふれあいがあつたはずで、都の文化もいち早く伝わってきたのがこの鶉野のあたりでした。

さて兵庫県内には、西国巡礼の札所の寺は4つありまして、1つは宝塚市の中山寺(24番札所)、それから現在の加東市の清水寺(25番札所)、そしてこの加西市の一乗寺(26番札所)、さらに姫路の円教寺(27番札所)の4つです。その巡礼コースについては、順番に24, 25, 26, 27という風に廻るのが普通です。

ところが江戸時代になります、この通りに廻らなくなる。かなり回り道をして逆を行く。24番の札所の中山寺の宝塚から西宮を経て、神戸・須磨を通過して、明石を経

て、高砂から場合によっては金毘羅さんを巡って、再び四国から姫路に上陸して書写山に行って、そこから逆まわり27, 26, 25と行くようになります。いわゆる「逆打ち」あるいは「兵庫まわり」ともいわれるコースです。つまり巡礼の中に、物見遊山的な要素が入ってくる。だからこういう「観光」目的の旅路をするようになるのです。



肝心の加西市内の巡礼ルートですが、お手許の配付資料をご覧ください。現在の国道372号線に沿うルルルートがだいたいの巡礼道になります。加西市内の26番札所の一乗寺から、坂本～三口～高岡～笠原～繁昌～青野ヶ原～滝野社という風なルートです。その途中で、鶉野台地の一部をかすって巡礼地が通っていたこととなります。鶉野という場所は、歴史的にみて「巡礼」にも関連する所だったという点が、わたしが今回強調したかった大きなポイントです。



最後に、古代から中世の時代の鶉野が「玉野」と呼ばれていたのではないかという話に関して、レジュメ集の11頁には、中世後期の有名な史料を「加西市史」からコピーして載せておきました。

応安4年(1371年)、南北朝時代の末期の頃、京都祇園社の元執行(もとのしぎょう)の「ケンセン」という僧侶が、まず「湯山」というところ、つまり現在の有馬温泉に湯治に立ち寄ります。そしてその翌日以降、一行は有馬温泉から六甲山の裏側を通りながら、現在の姫路市の「広峰神社」に向かっていきます。

その時の旅日記みたいなものが残っています。それによるとまず彼らは、現在の西宮市や神戸市北区あたりの「山口」や「ハタ」という所を通過します。そして現在の三木市の「吉川」を通過して、一日目は現在の「東条」にて宿泊です。

翌日は、卯の刻、午前6時ぐらいに東条の「八日市場」をたち、次に小野市内の「クボキ」(現在の窪木町あたり)という地名が出てきます。加古川の東岸のまちですね。そこからおそらく加古川を渡ったはずで、その後「東の河合」を通過します。これは現在の小野市の河合中町あたりでしょうか。

そしていよいよ加西市域に入ってきます。まず最初に出てくる地名が「ハンミョウ」、つまり現在の繁昌町あたりです。次に「西の河合」とあります。つまり「東の河合」とは別に、もう一つの「西の河合」があったと。この「西の河合」というのは、現在の小野市の「河合」地区だと考えられなくて、加西市域の青野ヶ原の西側付近に、もう1つの「河合」という地名があっ

たのだと思われます。

その次に「大河」を渡ると。おそらくこれは万願寺川でしょうか。そしてその後はいよいよ、さらに「野」があると記されます。その名は「玉野」とうんぬんとあります。これがおそらく現在の鶉野を指すのでしょう。

つまり玉野というと、現在の加西ICの南側にある国道の「玉野交差点」から南東付近の地名となりますが、昔はもっと広がった。現在の鶉野あたりもその中に含まれていたことになる。

そして旅の一行は、そこから「ミクチ」、現存するあの三口で昼食をとったと。さらに「中山」という場所を通り、最終的に大雨の中、午後10時ぐらいに、ようやく広峰さんに着いたと書かれています。

最初にお話したことですが、この地域にはよく探してみると、文献史料におきましても、非常に面白い史料がたくさん残っております。先ほどの佐々木和子さんの話にありましたように、そういう前近代の歴史遺産も含めた形で、鶉野飛行場の価値を考えていったら良いのではないかという点が、私からのひとつの提言であります。ご静聴、どうもありがとうございました。

パネルディスカッション

司会：それでは定刻になりましたので、パネルディスカッションを開始いたします。

本日コーディネーターおよびパネリストをつとめていただきます先生方をご紹介しますさせていただきます。

まず、コーディネーターは奥村先生にお願いしております。奥村先生は神戸大学人文学部研究科教授であり、地域連携推進室長も兼務しておられます。専門は日本近代史でございます。小野市史、神戸市史、姫路市史など兵庫県内の市町村史を多数執筆されておられます。今回の神戸大学との共同研究についても研究代表者としてとりまとめにご尽力いただいております。

続きましてパネリストの先生方をご紹介しますさせていただきます。

まず、伊藤一幸先生でございます。先生は神戸大学農学研究科教授で、鶴野飛行場跡地にあります食資源教育研究センター長を兼務していらっしゃいます。

続きまして、基調講演をいただきました高岡先生でございます。それからパネリスト報告をしていただきました上谷先生でございます。そして佐々木先生ございま



す。坂江先生でございます。最後になりましたが加西市長の中川でございます。

それでは奥村先生、よろしくお願い致します。

奥村 弘（神戸大学地域連携推進室長・人文学研究科教授）

奥村：神戸大学の地域連携推進室の室長をしております奥村でございます。

短い時間ですが、がんばって進めていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

最初に、時間があまりありませんので、先ほどの基調講演や報告について、もしくは会場の皆様からのご質問をいただければと思います。今回鶴野の地元の方々や北条高校の先生がみえられているとお聞きしています。いろんな関係するようご意見や活動の経験など、どのようなことでも結構ですから、まず、これらの方から少し、聞かしていただければありがたいと思っております。本来ならばメモとか何かをおまわしするところですが、その用意が出来ておりません。唐突ではございますが、皆様の方からご質問を出していただいて、それに答える形で、パネルディスカッションをすすめて行きたいと思っております。よろしくお願い致します。

会場の皆様の方から、いかがでしょうか。何かありましたら、手を挙げてご発言いただければと思います。どんどん出していただければと思いますが、いかがでしょ



うか。

会場参加者：北条高校に勤めております稲次といいます。

総合的な学習の中で、平和について1年間授業をやって、最終的には鶉野飛行場を見学して終わるというカリキュラムを組んでいますので、参加させてもらいました。

今、社会科の授業としては戦争について学ぶ機会が、すごく少なくなっています。実感としてはわからんというか、若い高校生が、戦争というのは遠い昔の話で、なんだか他人事ということになっています。

ところが小学校や中学校のときには、物語教材としてはわりと戦争のことを学んできています。以前、高等学校の平和教育というか平和学習をするときには、おじいちゃん、おばあちゃんに戦争中のことを聞いてきなさいと言うたら、だいたいその教材にはなっていました。ところが今は、おじいちゃん、おばあちゃんに聞いてきなさいと言っても、戦争体験者ではありません。私たち教師も戦争体験者ではありません。

ではどうやればいいのかと考えるときに、地域に残っている戦争、さっきも話されたような戦争遺跡とかが地域に残っていて、地域からアジア太平洋戦争を見る、自分たちの住む地域と戦争との関係を知らないと、やっぱり生徒も実感がわかない。だから、フィールドワークなどを通じて、私たちが住んでいる地域にもやっぱり戦争があったんやと知らせる。高校生は、特攻隊の人の遺書などを読ませると、おんなじ年代の人が、やっぱり死にたくないのに死にたくないとは書けない、そこまでちゃんと

読み取ってくれます。

平和教育の立場からいえば、今のその銃座とかそういう戦争体験が出来るような場所ではできるだけ残しておいて欲しいと思います。そういうことを、今度は若い高校生達が、加西市の高校生達が、語り継いでいかなあかんと思います。年配の方が語るのを聞くだけではなくて、高校生の立場、視線でやっぱり語り継いでいかなあかんと思っています。以上です。

奥村：ありがとうございました。他にいくつかのご意見をいただきたいと思います。いかがでしょうか。どうぞ。



会場参加者：保存会の会長三宅でございます。今日の「鶉野飛行場跡地をまちづくりにどう活かすか」ということを、10年ほど前、調査してきたときから思っていました。やっとその時期が来たなど、思っております。当初皆さんのおかげで、祈念碑ができました。われわれ保存会としては何とかこれを、公の場所に出したいなということで、上谷とともに歩んできたわけでございます。

鶉野飛行場で、当初兵隊としておられた方々、特攻隊員で出て行く姿を見ながら後に残った方々の思いを、50年もたって、

なんとかこの地に残したいというのが、この隣におられる方々でございます。

その後、毎年10月の第一日曜日に記念式典を行ってきましたが、約5年ほどしたときに、だんだんとその方々が亡くなっていかれました。そういうことで、5年間は毎年、式典をやってきました。あと、もう少しずつ、われわれも地元で守って行こうじゃないかということで、今現在にいたっております。

現在、建立してから12年になると思いますが、今度15年の節目には盛大に行きたいと、このように皆さんと話し合いをしたわけでございます。

こうして、まちづくりに活かされる、あるいはこういう場ができたことには、先ほども申しましたように、大変私たち喜んでるところでございます。ぜひ神戸大学の佐々木先生がおっしゃいましたように、各地域でもどう活かされていくかというものの事例を参考にしながら、鶉野飛行場も皆さんとともに、いい場所にしていきたいと思っています。どうぞよろしく願います。

奥村：ありがとうございます。はい、どうぞ。

会場参加者：地元鶉野上町の田中です。昨年まで区長をやっていました。2年ほど前に、市の経営戦略室の音頭で、鶉野南、上、中は鶉野飛行場跡地をどのように考えているのかと、地元で意見の交換会などを、4、5回やったと思います。そのときに、具体的な跡地利用の計画が出れば、防衛省からの払い下げが簡単に行われるという話がご

ざいました。その中で、戦争遺跡を活用する案と、地場産業、飛行場の地形を利用して何かいい産業が興せないかどうかということもでてました。

いろいろ私も関心がありましたし、勉強しました。宇和島の紫電改も見に行ってきました。紫電改が宇和島にあるのですが、これが鶉野にあればよかったのになあと、残念でしょうがないです。それがあれば鶉野の飛行場跡は、非常にいい意味で、資源なると思います。

経営戦略室が、3町の意見をまとめたものがあると思います。これをどう活かしていただけるのかという事を、また、お聞きしたいなと思いました。できるだけ協力したいなと、私個人的にはそう思っています。以上でございます。

奥村：ありがとうございました。あとひとかたぐらい。はい。どうぞ。

会場参加者：中野町の三宅と申します。今日は「戦争遺産をまちづくりにどう活かすか」というテーマでございます。先ほど田中さんからお話がございましたように、あの鶉野飛行場の広大な土地を、この戦争遺産を残しながらどのように作っていくのか、これが一番大事だと思います。

最初ご挨拶のときに、中川市長も申されましたように、あそこの土地に工業団地を作るという活用はできないだろうかというお話もございました。鶉野の飛行場全体を考えたまちづくりをできないのか、またお聞きしたいということです。

奥村：ありがとうございます。はい。ど

うぞ。

会場参加者：私、姫路市に在住してます三宅と申します。父親が鶉野の出身です。

実は子供のときは、夏休み、春休みに鶉野にやってきました。子供達で防空壕の探検に回ったり、飛行場にも立ち回った記憶があります。

それで、今回こういうことが計画されていると聞きまして、そういう研究会があるならぜひ入りたいなと思います。また一つ子供のときの記憶で解決してない問題があります。探検したときに、鶉の鳥を探して卵を探したのですが、一つも見つかりませんでした。それが研究されてるようでしたら、私もやりたいと思います。以上でございます。

奥村：はい、ありがとうございます。いくつもずっと出てきそうな気がするんですけども、時間もございますので、この辺にさせていただきます。

パネラーの方には、一言ずついただく時間しかとれないようになってきました。

稲次先生や三宅さん達のお話にもありましたが、ちょうど世代が変わってきて、その中でいかに語り継いでいくかというその一番基本的なところと、その中でいかに施設を活かしていくのかという2つのことが大きな課題としてでてきたように思います。

先ほどの佐々木さんのお話にありましたが、いろんな工夫の仕方があって、それぞれの地域ごとやその文化に根ざしたあり方があるようにも思います。

そういう点で、補足も含めて、考えると

ころをしゃべっていただきます。さらに他の皆様にも意見を聞いていくという形で、すすめさせていただきたいと思います。高岡先生から、報告の順番をお願いします。

高岡：具体的な活用の方向性というのは、佐々木さん等でまたお話されると思います。僕のほうから、いくつかという事であれば、鶉野飛行場とその周辺の施設群です。これが持っている歴史的な価値というのはきわめて大きいです。

戦争を経験された方が急速に亡くなりつつあって、われわれもおそらく、父親、母親世代が、ごく普通に戦争を知っていました。そういう世代がいなくなって、じゃあ残っているものがどれだけあるかということ、実はほとんど残っていないんです。

掩体壕なんかもあることはある。いくつか断片的にはあるんですが、鶉野の施設群というのは、まとまって残っている。ほとんど奇跡に近いと思います。こういうものをぜひやはり残していただきたいというのが、切なる希望であります。

具体的なところでいうと、まずお願いしたいのは、市としての文化財指定。そこからまず始まっていくんだろうと思います。

僕は個人的な感じでいうと、鶉野の戦争遺跡、飛行場遺跡は国の史跡として指定される価値があり、実は可能性はあると思います。戦争遺跡で国の史跡というのはまだあまり例はありませんけれども、それだけの価値は十分持っているものだと思います。

それから、やはり情報発信です。インターネット等では現在市のホームページなんかでもだしておりますけれども、例えば上谷

さんが保存会で出されたあの本です。とてもいい本なんですけど、残念ながら手に入らない。ご本人さんの手元にも残部がないし、古書店にもありません。県の図書館にようやくあるというぐらいです。

これは、もし外に出れば絶対売れるんです。この手の本っていうのは、軍事の世界にはマニアがいますので、出れば確実にこれ売れる本です。残念ながら出てること自体知られていないです。やっぱり情報発信という形でやっていただきたいです。

それから、観光、活用の話で地域まるごと歴史遺産みたいな話です。一つは加西で考えてもらえばいいんですが、もう少し広域でも考えてもらいたいと思います。兵庫県はどうしているのかわからないですけど、軍事遺跡、戦争遺跡でいえば加東郡も加古郡も含めていっぱいあるんですけど、鶴野は姫路航空隊で、姫路から紫電改を運んできており、実は近いんです。

姫路城は世界遺産です。円教寺も歴史遺産です。そういうものにうまく引っ付けていくことにより、鶴野飛行場もかなり大きな観光遺産になるのではないかなと思います。

いろいろと他にもありますが、とりあえず僕の方からの勝手な提言は以上です。

奥村：はい、ありがとうございました。上谷さん、よろしく願います。

上谷：先ほど、前の鶴野上の区長の田中さんが非常におもしろい話をされました。

鶴野の滑走路は戦争中は海軍航空隊の滑走路とは違うんです。あれは川西航空機の紫電、紫電改という戦闘機のテスト用の滑

走路です。海軍航空隊の滑走路は、今の神戸大学の東側のあたりから奉天池の方に向かって、幅100mの1,500mの滑走路でした。艦上攻撃機といいまして、魚雷を抱いて飛ぶ飛行機の練習航空隊の練習生が使っていたんですけども、非常に幅の広い、土を転圧した滑走路です。

先ほど田中さんが紫電改を見てきたと言われましたが、愛媛県の宇和島からまだ少し南へ行った城辺という町の山の頂上に、海に落ちた紫電改を引き上げまして、現在の新明和工業と地元愛媛県とで保存しようという取り組みをしております。

あそこは戦闘機が墜落した場所。本来はその飛行機が所属したのは松山航空隊といいまして、現在の松山空港にあった航空隊の所属する第343海軍航空隊の所属の飛行機でした。その飛行機を造ったのが、鳴尾と鶴野の2ヶ所でした。

田中さんが言われるように、私もこの地域の活性化で、あの飛行機をここに持ってきたいと思っています。ある方は、現在アメリカで保存されている紫電改の3機のうち1機でも返してくれたらな、というような希望も言われていました。あの川西で、飛行機の製造に携わった人たちは、加西市にもたくさんおられます。だからそういう思いは、本当に強いものがあります。

この紫電改は太平洋戦争の末期に本当に日本海軍の、また日本国の起死回生をかけたという、戦記のなかでもヒーローとして残っております。だからその飛行機をやっぱり近くに置いておきたいと思います。

それから、北条鉄道です。長駅、播磨下里駅、それから法華口駅という3つの駅は、当時のそのままに残っております。こ

の駅と飛行場跡とを観光資源として結びつけなければと考えています。

写真で報告しましたが、その道をたどって行くと飛行場へ非常に近く行けます。鶉野南の交差点から行きますと2.5キロほどで滑走路に至るんですが、この道から行きますと1.8kmぐらいで滑走路にたどりつきます。そういうところもふまえて、全国でも珍しい戦争遺跡の見れる駅といえます。

法華口駅には、昨年2月中旬にNHKが取材に来ました。全国木造駅舎の旅という題で、兵庫県では城崎駅をはじめ3ヶ所、鶉野の法華口駅が取材の対象になりました。8月に全国いっせいに放映され、また、DVDになって皆さんのお目にかかります。私が時折、駅の方に行きますと、テレビで見て、訪れましたという方も何名かおられます。鉄道マニアもあの駅のことを非常に興味を持っております。だから駅と飛行場跡とのゾーンを、ある程度きちっとしたものにするればよいと思います。

先日来、神姫観光と市のふるさと営業課で企画をしまして、5回にわたり鶉野飛行場を見るというバスツアーを行いました。1回のツアーで45名を募集しましたが、5回とも満席、まだ今もキャンセル待ちをされている方もおるという事で、その5回とも私はガイドをしました。参加者の皆さん、こういうものが今現に残っていると、非常に感動されます。

戦争についていろいろと叫ばれる今日、こういう現物のものがあるということをやっぱり広く皆さんに見て欲しいと思います。戦争の経験者という方は、もう83歳、85歳というような方ばかりになりました

た。戦争に関する現物がほとんど見られない今日、子供たちにもそういうものを見ていただくような企画を市のほうでも考えていただければとおもいますし、全国にこういうものがあるという事を加西市がPRしていかなければいけないんじゃないかと思ひ、私もその一助として、協力させていただいております。

先ほどの戦闘機の話も、映画のロケーションでよく本物の飛行機に近いものを造って映画に使っております。そういう一分の一というような実物大の戦闘機の模型でも、鶉野の滑走路で展示し、戦争中ここでこういう風に使われたという事を見せれば、見に来る人も非常に増えると思います。また、全国から来るほとんどの方が、鉄道にも乗られると思います。

これもひとつのPRじゃないかと、田中さんが先ほど言われたようなことから感じ取りました。

奥村：どうもありがとうございました。はい、佐々木さんお願いします。

佐々木：先ほど、稲次先生から語り継ぎという事で、今までであれば、家へ帰っておじいちゃん、おばあちゃんに話を聞いてきてもらえばよかったとおっしゃいました。

実は千葉県、安房の文化遺跡フォーラムのところで、私がお聞きしましたときに、子供さんたちが一番話に乗ってくる、そういう言い方はおかしいですけども、自分のものとして考える話は、戦争中に花作りが禁止されていた話だそうです。食料供出が一番であるから、花作りのようなぜいたくなものはだめだった。そして花の種を持って

いる人は非国民だと言われた。しかしその千葉、安房のあたりで、それをこっそりという言い方はおかしいですけど、持っていた人がいた。そしてそれは、戦争が終わって、東京の方で花が欲しがられるようになったときに、非常に飛ぶように売れて、千葉のそのあたりの復興の原動力になったという話です。

子供たちは、今普通に売られている花が、それが禁止される事が戦争中だったのかという事で、非常に自分のことのように話がわかった、それに非常に話が食いついてきた。どんなにいろんなことを言ってもなかなかピンとこなかった子供たちがそれに、ああそういう時代だったのかと思いたった、という話をされました。

つまり、戦争のものだけでは話は伝わらないという話です。今生きている自分たちの生活と結びついた時に伝わる。

ですから、今だから、私たちがこの地域に残っている、その当時の苦勞された話ですとか、直接戦争に関係のないような話でも、戦争中だからこんなことがあったんだろうかと、周辺の話でもいろんな話を語り継ぐといえますか、掘り起こして、そして、それを蓄積していく。そのようなことが必要なのではないかなと、思いました。

安房の国のNPOのすばらしいところは、ずっと皆さんが勉強といえますか、学習、あるいはNPOの皆さん自身が調べて、ずっと知識をためていっておられる。そういうような活動が、細々とでも息長くできたらと思っております。

奥村：どうもありがとうございました。坂江さんお願いいたします。

坂江：先ほどもお話しましたが、加西市の歴史につきましては、「加西市史」の執筆の時は、古代史だけの、やや狭い視野だけで勉強しておりました。しかし今回のこの企画に参加して、改めて加西市域の歴史の豊かさをひしひしと感じた次第です。

播磨という地域には、古代の「風土記」が残っておりますから、古代の地域史を掘り起こす素材は豊富ともいえます。しかし加西にはそれにプラスして、古墳もあるし、廃寺もあるし、五百羅漢もあります。さらに巡礼の問題も絡んできます。今後はこのような地域住民の「生活」に密着した身近な歴史遺産をドンドン掘り起こしていく必要があると思われまます。

もちろん近代になってからの戦争遺跡も重要なんですけども、さまざまな角度から、地域の生活に関わるかかわった歴史を総合的に掘り起こすと、いろんな人が参加できる地域づくりが可能になるのではないのでしょうか。戦争遺跡を1つの軸としつつ、地域全体の歴史を見直すという方向性で、今後地域づくりをやっていくべきだと考えます。以上です。

奥村：はい、ありがとうございました。

今まで歴史に関係する方々を中心に話をしてきました。神戸大学では、大学として、いろんな形で地域連携をおこなっていると考えています。今回も、ちょうどこの遺産がたくさん神戸大学の食資源教育研究センターの中に残っています。さまざま課題もあるかと思いますが、われわれも一緒に考えていきたいと思っております。伊藤先生から、少しご意見をいただければ思い

ます。よろしく申し上げます。

伊藤一幸（神戸大学食資源教育研究センター長）

伊藤：はい、皆さんこんにちは。私、今日初めてお話させていただくので、少し長くなるかもしれませんが、ご容赦ください。



神戸大学農学部であそこを現在使っています。名前は今おっしゃっていただきました、ややこしい食資源教育研究センターという名前ですが、昔の附属農場です。

少し歴史の話をしみますと、去年で私ども神戸大学農学部は60年経ちましたが、およそ45年前に県立の兵庫農科大学から神戸大学農学部になりました。

そのときに鶴野に施設をつくって牛を飼い始め、そして水田をつくり、果樹園をつくりました。それが現在、神戸大学の唯一の農場として活動しております。学生も15名ほどあそこで研究しておりますし、そして農場実習、牧場実習というのを中心に、教育のために使われています。

少しそういう話をしみますとびっくりされるのですが、例えば昨年、枝肉共励会に出した黒毛和牛が優秀賞という事で1頭180万円というような値段で神戸大学ビーフとして売れたりすることもありました。また、神戸大丸の食品売り場でピオーネを一房500円で売れるとか、あるいはさっきの牛はどこで売ってるかっていうと、東京の日本橋の三越本店で1グラム1

ドルという値段で売ってるというくらいの話で、現在きちっと活用しております。

今日、私がここに呼ばれた最大の要因は、お前らの使ってる土地は非常に由緒正しい所だし、しっかりとその話を聞いて帰りなさいということで、たぶんここに呼ばれたんだろうと思います。

まちづくりのために使う必要は十分ありますし、われわれも協力できるところは協力しなければなりません。ですが、正直なところ、去年は鳥インフルエンザ、今年は口蹄疫というような形で、市民の皆様に簡単に入っていただくわけにはいかないという事情があるということをおくみ取りいただきたいと思います。業務に支障のない範囲で何とか、ご協力はさせていただきたいと思っております。

それは、神戸大学とこの市との連携協力もありますし、私自身も農学研究科地域連携センターの副センター長をつとめておりますので、なるべく開かれた大学という形をとりたいと思います。ですが、この45年間の間に何をしてきたかという、自分らでは掘りあげられない滑走路とかエプロンを大事に守ってきたと言えば聞こえはいいのですが、本当のところは、掘れなかったので残っているというような状態です。

上手く活用しなければならぬと思いますし、われわれが学生のために危ないと思ってすっかり埋めてしまった、圃場から出た石で防空壕を埋めてしまったようなところもあります。そういうところをこれから、だんだんに、ボランティアの力を使って掘りおこすなりなんなりして、何らかの形で公開できるようになればとも思います。

実際に動き始めると、いろいろぶつかることがあるかと思いますが、何とか前向きに考えていきたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

奥村：どうもありがとうございました。

食資源教育研究センターでは、秋の収穫祭のときなどに地元の方にも来ていただいたり、トライアルウィークなど、地元の中学の授業などでも使っていただいています。私どももいろいろ皆さんと知恵出し合っていければと考えています。

このシンポジウムのとりまとめをおこなう時間がやってまいりました。実はもう時間がほとんどございませぬ。市長には最後にまとめてお伺ひしたいと思っております。パネラーの方で言い落としたこととか、これだけは言うておきたいというようなことが一言ございませぬたら、発言をお願ひします。

高岡：一言よけいなことを。第一次大戦時の戦争遺跡という事で、ちょっと言い落としたことがありました。

加西の場合には、青野ヶ原捕虜収容所があります。第一次大戦時のドイツ兵の捕虜収容施設ですが、これは小野市史のときに調べたら、加西市の側に当時の捕虜収容所の建物が残っているということがわかりました。もう壊されるということで、神戸大を通じて要請していただき、保存していただいています。

ドイツ兵の捕虜収容所は、徳島が有名です。ドイツ館というような観光資源になっていますけれど、建物が現存するのは関西では唯一です。しかもそれに関連する史料

も出てきてます。青野原に収容されていたのは、オーストリアの海軍の兵隊さんで、もっぱら小野市のほうが、いろいろとオーストリアと交流したりしてはいますが、建物自体は加西なんです。

ついでに言うと小野市ですが、戦車第6連隊というのがありました。実は日本の陸軍で唯一活躍した戦車隊で、マレー迎撃戦で活躍してはいます。ちなみにその部隊は司馬遼太郎が入隊した部隊です。

そういう意味で言うと、やっぱり小野から青野ヶ原、加西にかけ、軍事施設がいろんな時期を通じて集中しているわけですね。それを上手くつないで、保存ならびに情報発信をしていく工夫が、実はあまりされてはいません。そういうつながりがあるというのを強調しておきたいと思ひます。

奥村：どうもありがとうございました。

いくつか課題が出てはいます。いかに語り継いでいくのかということなど、まだまだ課題が多いように思われます。

高岡さんが最初に言われたことともつながりますが、阪神・淡路大震災の資料を市民の皆さんに見ていただくということをおこなおうとすると、現物はもうほとんど残ってはいません。いわゆる、非常に悲惨な記憶に関するようなさまざまな歴史遺産は残りにくいのです。逆に言うと、鶴野には非常に貴重な遺産が残っています。

今日は話にでてきませんでしたでしたが、鶴野飛行場跡地での戦後の開拓が非常に大変だったことも、地域の方々の記憶のなかに残っていることと思ひます。語り継ぐというときにはやはり、さまざまなことが重層的にいろんな深まりを持って、語りつがれ

ていきます。そういう意味でも、佐々木さんが言われました、千葉県館山の例なんか非常に興味深い事例だと思います。加西市史ができましたから、豊かな歴史遺産が明らかになってきました。これらを利用できる可能性がこれから広まっていくかと思われま

す。いろいろなご意見を調整する必要があり、いろいろ課題はあるかと思われま

す。最後にこの難しい課題に対して、市長から総括的なご意見をいただければと思

います。よろしくお願ひします。

市長：本日のシンポジウムが開催できたのも、三宅会長はじめ保存会の皆さんや上谷さんの15年以上にわたる市井の研究の結果が大きな足掛りとなっていると思

います。上谷さんは高砂市民でありながら加西市民以上に加西をご存知で、北条鉄道のボランティア部長として鶉野飛行場の最寄駅法華口駅の駅長も引き受けていただ

いております。

が、紫電改を進駐米軍が横須賀に輸送する際に搭乗した3名のパイロットがまだ存命とのこと。松山にも生き証人がいらっしゃる由。是非話を聞き、映像でも残しておきたいです。高岡先生からお話のあった国の史跡として指定してもらうことも働きかけたいと思

います。

スミソニアン博物館などには紫電改が展示されていますが、復元やデモ飛行や返還交渉を検討したいと思

います。飛行場跡は細長い地形で道路や電気、上下水道など基盤整備もされておらず、それ単体では利用しづら

いと考

奥村：どうもありがとうございました。

なお、この戦争遺産の話というのは、長い間のさまざまな方の活動のうえに成り立っております。今後もそれを活かしてさらにすすめていくということが、一番その基礎になります。それをいかに行政や私たちの神戸大学がサポート支援できるかということも大きな課題になっていくかと思っております。

まだ始まったばかりといってもいいと思います。今後もいろんな形で、皆さまとともにこの遺跡をこののち活用していく方法を考えていきたいと思っております。今後もしよろしく願いいたします。

今日はどうもありがとうございました。どうも、講師の先生方ありがとうございました。皆さんどうもありがとうございました。

司会：ありがとうございました。それでは閉会にあたりまして、教育長吉田よりご挨拶を申し上げます。

閉会挨拶

吉田廣（加西市教育長）

教育長：本日、鶴野飛行場関係の歴史シンポジウムの開催に際しまして、講演、報告をいただきました先生方、パネルディスカッションで貴重な意見をいただきました先生方をはじめ、会場にお越しいただいた参加者の皆さんに、厚くお礼を申



し上げます。

保存会の三宅会長も申されたと思いますけれども、本日こういう会が開催できたのも、三宅会長、上谷様、そして保存会の皆さん、研究者の皆さん、そして地元町の皆さんの、これまでの大変な努力があったからこそと思います。今後とも、いろいろお世話になりますけれども、よろしく願いたいと思います。

私事になりますが、私の家から、ちょうど西を見ると、鶴野飛行場の空が見えるんです。小さいとき母親から私に、その戦争のときのすごさを教えてもらったことを今でも覚えています。

飛行機が鶴野飛行場をめがけて爆撃をしたときに、私の家から見た飛行場が、真っ赤に染まっており、非常に怖かった、思わず自分の家の防空壕に入った、ということを実に忘れられない、と母親から聞かされました。そのときに、平和というものの大事さをあらためて感じたわけでありませう。

北条高校の先生もおっしゃいましたが、戦後60数年経過しますと、本当に戦争というものを感じることに、戦争の悲惨さ、そしてまた平和の大事さというものを感じていく、そういうことが風化しつつあると思います。

事実に触れて、目で見て、手で触って、自分で体ごと感じることによって、平和を愛する心っていうのは、私は生まれてくると思っております。

また、われわれ高齢者は、今、知っていること、聞いたこと、そして、そういうものを次代に伝えていく責務があると思えます。これはそれぞれの場であると思えます。

が、ご参加の皆さんも今後とも、いろんな形で若い世代に伝えていく、そういうときに飛行場跡も活用いただいたら、非常にありがたいと思います。

今後、この会場でいろいろ教えていただきましたことを教育、そしてまたまちづくりに活かしていきたいと思います。

本日は講師の先生方、本当にありがとうございました。また、会場の皆様方も、ありがとうございました。

司会：これでシンポジウムを終了いたします。最後になりましたが、今日、コーディネーターをつとめていただきました奥村先生をはじめ、各パネリストの先生方に拍手でお礼にかえたいと思います。よろしくお願ひします。

ありがとうございました。それでは皆様方これで終了いたします。気をつけてお帰りくださいませ。

[シンポジウム記録集は、各発表者が発表内容に加筆修正を行ったものであるが、上谷昭夫氏及び会場発表者については、編集者により発表内容に加筆修正を行い掲載したものである。]



ロビー特別展示風景

当日配布シンポジウム資料



芸術文化振興基金助成事業

神戸大学・加西市共同研究

鶴野飛行場関係歴史遺産活用シンポジウム

加西・鶴野飛行場跡

～戦争遺産をまちづくりにどう活かすか～



日時 平成 22 年 12 月 5 日(日)

会場 加西市健康福祉会館 大ホール

主催：加西市・加西市教育委員会

後援：神戸大学

プログラム

13:30 開会挨拶

13:40 基調講演

「鶴野飛行場の歴史的意義・価値」

高岡裕之（関西学院大学文学部教授）

14:15 パネリスト報告

「鶴野飛行場に残された施設」

上谷昭夫（鶴野平和祈念の碑苑保存会）

14:50 パネリスト報告

「共同研究の成果—戦争遺跡の活用—」

佐々木和子（神戸大学地域連携推進室研究員）

15:10 休憩

15:25 パネルディスカッション

【コーディネーター】

奥村弘（神戸大学地域連携推進室長・人文学研究科教授）

【パネリスト】

伊藤一幸（神戸大学食資源教育センター長）

上谷昭夫（鶴野平和祈念の碑苑保存会）

坂江渉（神戸大学人文学研究科特命准教授）

佐々木和子（神戸大学地域連携推進室研究員）

高岡裕之（関西学院大学文学部教授）

中川暢三（加西市長）

16:25 閉会挨拶

ロビー特別展示

◎飛行服等資料

◎鶴野飛行場に残された施設

鶴野飛行場の歴史的意義・価値

2010年12月5日 鶴野飛行場関係歴史遺産活用シンポジウム

関西学院大学文学部文化歴史学科 高岡裕之

【1】「戦争遺跡」への関心の高まり

(1)戦後の「戦争遺跡」への無関心

・否定されるべき戦争・軍隊の遺物／半なる廃墟

(2)脚光を浴びる「戦争遺跡」

・広島市旧産業奨励館（原爆ドーム） 広島市議会による永久保存決議（1966）

→国史跡（1995） →ユネスコ世界文化遺産（1996）

・文化財指定基準改正（1995）第二次世界大戦終結ごろまでの建造物・土木構築物へ拡張

・戦争遺跡保存全国ネットワーク結成（1997）

→『じらべる戦争遺跡の事典』（柏書房、2002）、『続 じらべる戦争遺跡の事典』（2003）

・国立歴史民俗学博物館「現代史」展示コーナー開設（2010）戦争と軍隊が柱のひとつ

(3)「戦争遺跡」保存運動の水脈

・空襲体験 東京空襲を記録する会（1970） 大阪大空襲の体験を語る会（1971）

→『東京大空襲・戦災誌』全5巻（1973～74）…

→大阪陸軍造兵廠本館の取り壊し（1981）反対運動

大阪府平和祈念戦争資料室（1981）→大阪国際平和センター（1991）

・名古屋市南区見晴台遺跡〔弥生環濠集落＋笠寺高射砲陣地〕の調査（1975）→史跡整備

考古学における「戦争遺跡」の意義の確認 →戦争遺跡考古学の生成

・平和教育・学習運動

神奈川南風原町による旧陸軍病院壕群の史跡指定（1990）＊初の文化財指定

長野県松代象山地下壕（松代大本営）の保存・公開運動（1985）→90公開

・慰霊・鎮魂・平和祈念

鹿児島県知覧町特攻平和会館（1985）

＊戦争体験者の減少 →歴史的経験の継承／戦争・軍隊とは何だったのか？

【2】アジア・太平洋戦争期「戦争遺跡」と鶴野飛行場遺跡

(1)全体像がみえない「戦争遺跡」

・数の多さ 施設の分散化／戦争末期には本土決戦に備える施設が急増→本土要塞化

・軍事機密 →極秘に建設 情報の秘匿

・関係資料の喪失 関係機関の被災／敗戦時の焼却／軍隊そのものの消滅

・施設の消滅 農地化・再利用・再開発

＊地元の「有志」による掘り起こし

戦争遺跡保存全国ネットワーク →教員（小中高）・考古学・文化財

(2)鶴野飛行場遺跡の「再発見」

・上谷昭夫さんによる調査・研究と「平和祈念の碑」建立への努力

『いまに残る姫路基地』（鶴野平和祈念の碑建立実行委員会、1999）

『紫の閃光—川西航空機秘話』（鶴野平和祈念の碑保存会、2002）

(3)鶴野飛行場遺跡の特徴

・当時の滑走路がほぼそのまま残る希少な事例

・滑走路に加えて掩体、銃座、防空壕などの施設がセットで残るのは極めて貴重

＊滑走路が残っている事例は現用 →改修されている

・「戦争遺跡」として超一級であることは間違いない

【3】小野市粟生町有文書（旧加東郡河合村粟生区）にみる鶴野飛行場建設

（『小野市史 第六卷（資料編Ⅲ）』小野市、2002年）

（1）鶴野飛行場出役のはじまり

河合村常会協議事項（昭和一八、三、八）

七、勞務者供出ニ関スル件

「加西郡鶴野 敷地 七〇万坪

從來ナレバ十ヶ年ノ処半年乃至一年ニ仕上ゲル

人夫三千人 内一千人 朝鮮人

千人

千人

自由出役者、（加東郡社町滝野町河合来住加茂及

加西郡九ヶ町村ノモノ）

兵庫県下勤勞報國隊

河合割当 三月 二〇人

四月以後 四〇名

賃金先ツ三円位

出勤時間午前七時一午後五時迄

（2）自由出役者の割り当て

区長会協議事項（昭和十八、三、三一日）

一、姫路施設鶴野工事勞務出役ニ関スル件

「河合村五十人 上復井三人 下復井七人 中七人 西三 粟生一四人 新部八（中略）

四月四日ヨリ出役ノコト

（3）中部第四九部隊の抗議

将校以下営外者勤勞奉仕方ノ件 昭和十八年四月八日 中部第四九部隊

河合村役場御中

粟生ニ居住シアル将校准士官下士官ニ対シ海軍〇〇工事場ニ勤勞奉仕方（不出場者ニ対シテハ代償トシテ一回三円（一月計六円）部隊ノ証明アルトキハ一円五十銭供出）粟生区長ヨリ要求シ来レルモ之極メテ穩当ヲ欠キ下士官以上ノ軍人勤勞ヲ蔑視スルモノニシテ事情ニ通セサルモ甚ダシク又被要求者之ニ応セサルトキハ隣組トシテ義務不履行者トシテ差別待遇（配給停止其の他）スルガ如キ言動アルハ軍民離隔ノ一事象ニシテ（以下略）

（4）出役者割り当て充足に関する件

河通二第八〇九号ノニ 昭和十八年七月二十四日 河合村長 三枝基太郎

各区長殿 緊急勞務者供出割当充足ニ関スル件移牒 社国民職業指導所長

管内九会村ニ於ケル内務省軍施設工事勞務出役ニ関シテハ種々御配意相煩シ御座ヲ以テ着々事業モ進捗致居候処今春農繁期ヲ契機トシ出役者ノ数一時ニ激減シ以来工事進捗ニ頓座〔控〕ヲ招来セル現状ニ有之延イテハ軍ノ作戰ニ及ボス影響尠カラザルモノ有之候ニ就テハ貴町村ニ於ケル農繁期モ大体一段落目下除草ノ時期ニ有之候事ト存候モ本工事ノ緊急且ツ重要性ニ鑑ミ義ニ打合会ニ於テ決定ノ割当員数ノ確保ニ一層ノ御協力ヲ相煩度此段及通知依頼候也（以下略）

（5）海軍軍人の止宿先

河通四第八三号ノ一 昭和十九年三月三日 河合村長 三枝基太郎

各区長殿 海軍軍人ノ止宿先ニ於ケル家庭状況調査ニ関スル件照会

首題ノ件其ノ筋ヨリ調査方照会有之候条貴部落ニ於ケル該当者ヲ左記様式ニ依リ御調査ノ

上折返シ御回報相成度此段及照会候也

住所	工業	飛一曹長	佐藤仁男	／	飛一曹	高橋翁
河合村粟生一七五一		飛一曹長	加藤久一郎			
河合村粟生六百九拾一番地	農業	飛曹長	若崎裕四郎			
河合村粟生七二二ノ一	農業	飛二曹長	阿河功			
河合村粟生一八二五	農業					

(6) 継続する工事

号外 昭和十九年八月三十一日 河合村長 三枝基太郎
 粟生部落区長殿 鶴野人夫日割人員変更ニ関スル件
 鶴野人夫出役ニ関シテハ去ル二十一日ノ区長会ニ御協議ノ上決定致シ居リ候処昨日「内務省姫路施設工事々務所長海軍技師兼内務技師有本欣二氏ヨリ公文書ヲ以テ工事協力方ノ要請有之」概ネ十一月初旬迄トシテ従前通り出役方依頼有之候条過日ノ決定ニ依レバ貴部落ヨリハ九月十二日ヨリ四日間ニ各十六人宛(初日ハ十七人)合計六十五人出役願フ様御手配願上候処新部川原ヘノ出役モ有之為ニ貴部落ハ明後九月二日ヨリ毎日五人宛十五日間ニ出役下サル様再三変更恐縮ニ候ヘ共御高配願上候

昭和二十年一月九日 河合村長
 各区長殿 緊急区長会開催ノ件
 標記ノ件左記之通り開催可致候条必ず御出席相成度此段及通知候也 (以下略)

海軍航空隊施設工事(鶴野飛行場建設工事)緊急労務供出(勤労奉仕隊)ニ関スル打合事項

- 一、部落別出動人員(勤労奉仕隊)割当数別紙ノ通り
- 二、出勤期間 自一月十三日 至 月 日 日間 (中略)
- 四、集合場所及集合時間
 場所 加西郡九会村 姫路海軍施設工事々務所前
 時間 毎朝七時ニハ作業開始 (以下略)

(7) 高射砲への注意

昭和二十年一月二十八日 河合村長 三枝基太郎/河合警防団長 小林光次
 各区長/分団長 殿

高射砲射撃実施ニ関スル件通知

標記ノ件関係官庁ヨリ通牒有之候間
 爾今姫路海軍航空隊(鶴野飛行場)ニ於テ空襲警報発令時(敵機来襲ニ対シ)高射砲ノ射撃ヲ実施セラルハニ付之ガ破片ニ依ル危険区域ハ左記ノ如クナルヲ以テ一般ニ之ガ危険予防対策ヲ請ゼシムル様周知徹底相成度此段及通知候也

記

- 一、区域 加西郡、加東郡(河合村、滝野町、社町、福田村、小野町、大部村、来住村)
 鶴野中心二十キロ以内(二里半)
- 一、危険予防対策トシテ鉄兜、或ハ防空頭布ヲ常ニ使用セシムルコト

*建設の中心となつた加西郡・加東郡民+朝鮮人+県下勤労報国隊
 *加古川飛行場・高射砲聯隊/青野ヶ原戦車聯隊/鶴野銃成場

鶴野飛行場跡

姫路海軍航空隊鶴野飛行場は、太平洋戦争が悪化しはじめた頃、優秀なパイロットを養成するため、昭和17年に着工し、昭和18年に完成した旧日本海軍の飛行場跡です。飛行場の建設に伴い、昭和18年10月には姫路海軍航空隊が開設され、同時に航空整備、兵科、運用、主計、航海、機関、通信、工作、兵器、砲術、医務等の兵隊が在隊していました。また、飛行場の西南には、川西航空機姫路製作所鶴野工場があり、「紫電」「紫電改」など500機余りの戦闘機が組み立てられました。当時、航空隊には、17歳から25歳までの若者が全国から約320名集められ、ここで30時間の飛行訓練を受けた後、各航空隊へと散っていきました。昭和20年には、練習生による神風特攻隊「白鷺隊」が編成され、終戦までに63名の尊い命が失われました。今は、飛行場跡は防衛庁が管理しており、一部は神戸大学農学部の敷地として利用されています。



アクセス 中国自動車道加西ICを出て左折し、飯森交差点を左折、約500m先、フラワーセンター南入り口手前を右斜め方向へ進み約2km先右手方向。

加西市ホームページより

姫路海軍航空隊基地施設

基地名 姫路海軍航空隊其他(陸上) **所在地** 兵庫県加西郡九会村・下里村
創設年月 昭和17年12月 **航空隊開設** 昭和18年10月1日
完成年月 昭和19年5月 **面積** 2,531,040㎡
滑走路 飛行場滑走路 1,200m×60m 1本
主要機種 中・小型練習機 (97式艦攻,93式中練)
格納庫(木造) 9,157㎡ 40m×120m2棟(4×4) **兵舎** 約8,919㎡
収容施設 庁舎2,092㎡ 送信所179㎡ 講堂1,756㎡ 移住施設6,200㎡(1,200人) **工業場**
 1,580㎡ 倉庫1,454㎡
防空施設 対空機銃25mm連装4ヶ所・単装2ヶ所

川西航空機株式会社姫路製作所

工場名 鶏野組立工場 **所在地** 加西郡九会村・下里村
工場創設 昭和17年7月 日本毛織より川西航空機へ
 昭和19年8月 鶏野組立工場落成式
工場面積 約93,500㎡
生産機種 「紫電」446機製造 20年3月より「紫電改」生産開始 44機製造
工場施設 第一組立工場 1,650㎡ 第二組立工場 185㎡ 2ヶ所 第一格納庫 875㎡
 第三格納庫 940㎡ 飛行指揮所・兵器庫・プロペラ調整室・点火栓室・管制器室

終戦後に残存した航空機

紫電 57機、紫電改 13機(他に未完6機)、零式練戦3機、白菊・彗星・銀河・90式陸練・陸軍
 高運各1機、93式中練2機

加西市ホームページより

2010年12月5日

佐々木和子

戦争遺跡の活用—共同事業の成果から

1. 戦争遺跡と文化財

- 1990年（平成2）3月 沖縄陸軍病院南風原壕が、沖縄県南風原町の指定文化財に
- 1995年（平成7）3月 大分県宇佐市城井一号掩体壕が宇佐市指定文化財に
- 1995年（平成7）6月 広島市原爆ドームが、国の指定文化財に
- ⇒ 1996年（平成8）12月 原爆ドームが世界遺産に登録

*1995年3月、史跡名勝天然記念物指定基準を第二次世界大戦終結頃までの重要な遺跡が史跡指定の対象に改正)

2. 活用の事例から

①千葉県館山市

- 赤山地下壕 市指定文化財（2004年） 2004年 公開
- ・NPO法人安房文化遺産フォーラム（市民団体）によるガイド
- ・地域まるごと博物館（エコミュージアム）
- ・館山市による無料ガイド

②大分県宇佐市

- 城井一号掩体壕 市指定文化財（1995年）
- ・史跡公園の整備
- ・小学校（低学年）、小学校（高学年）、中学校用副読本

③沖縄県南風原市

- 沖縄陸軍病院南風原壕 町（当時）指定文化財（1990年）… 全国初
- ・南風原陸軍病院壕—保存・活用についての答申書（1996年）
- ⇒ 町長による変更（壕の中に人をいれる）
- ・整備・公開についての答申書（2003年）

⇒ ガイド養成講座（2006年度） ⇒公開（2007年）

3. おわりに

戦争の記憶は「ひと」から「もの」へ

- ①近代史研究・戦争考古学研究の資料
 - ②歴史教育・生涯学習の教材（＝ 地域歴史遺産）… 参加・体験型観光
 - ③平和学習の物証・語り部
- 修学旅行生

2010 羽野飛行場関係歴史遺産活用シンポジウム関連資料

「古代～中世の加西・鶴野付近」

2010年12月5日(日) 神戸大学・坂江 渉

▼自己紹介から/神戸大学地域連携センター勤務/日本古代史専攻/『加西市史』執筆。

▼律令制下(8世紀以降)の播磨国概略



- ←播磨国には合わせて12郡あった。
- 現在の加西市は、東隣の小野市や加東市など共に賀毛郡に属した。
- 各郡には、50戸で構成される里が存在。
- 里数の多い郡(播磨国風土記)・揖保郡18里、飾磨郡16里、賀毛郡12里、宍粟郡7里…

▼賀毛郡の里名(播磨国風土記)

- ①上鶴里
- ②下鶴里
- ③糸布里
- ④三重里
- ⑤楯原里
- ⑥起勢里
- ⑦山田里
- ⑧端鹿里
- ⑨穂積里
- ⑩雲洞里
- ⑪河内里
- ⑫川合里

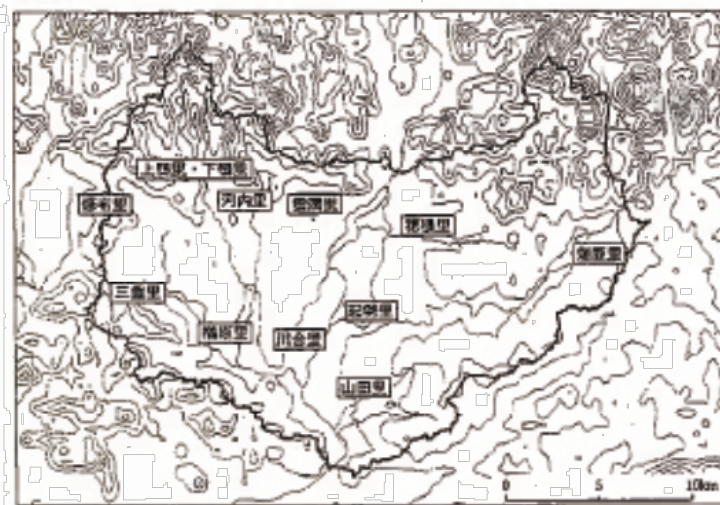


図22 里の復原

▼加西市の鶴野付近…賀毛郡楯原里

■楯原里内の地名(それぞれの地名が現存し、風土記にはその地名起源説話が残っている)

- ・伎須美野
- ・飯盛高
- ・櫻岡
- ・玉野村
- ・玉丘

▼『播磨国風土記』賀毛郡榎原里条

470 重ね居て、起き立つこと能はずありき。故、三重と曰ふ。
榎原里。(土は中の中なり。)榎原と号くる所以

471 は、作此の村に生ふ。故、柞原と曰ふ。伎須美野と号くるは、品太天皇の世に、大

472 伴連等、此処を請ひし時に、国造里田別を喚して地状を問ひたまひき。爾時に、対へて曰ししく、(縦へ

473 衣を櫃の底に藏めるが如し)とまをしき。故、伎須美野と曰ふ。飯盛郷 右、然号くるは、大汝命

474 の御飯を、此の高に盛りき。故、飯盛郷と曰ふ。榎岡 右、榎岡と号くるは、大汝命、

475 稻を下鴨村に吞かしたまひしに、散りし榎、此の間に飛び到りき。故、榎岡と曰ふ。玉野村有り。所以

476 は、豊美・袁美二の皇子等、美奈郡志深里の高宮に坐して、山部小栢を遣して、国造許麻が女根日女命を誂ひたまひき。是に、根日女、巳に命に依り訖りぬ。爾時

477 に、

478 二の皇子、相ひ辞びて娶ひたまはず。日の間に、根日女、老いて長通りぬ。時に、皇子等大きに哀しみ、

479 即ち小立を遣して、勅して云ひたまひしく、(朝夕に日の隨はぬ地に、墓を造りて其の骨を藏め、

480 玉を以て墓を飾れ)といひたまひき。故、此の墓に縁りて、玉丘と号け、其の村を玉野と号く。起勢里。(土は下の中なり。)(吳江。黒川。)右、起勢

(1) 加西市文庫第八巻「史料稿」

応安四年(一三七)十月、紙園社の元執行願證が、湯山から広葉社への途上西河合・三口・中山を通過する

181 『紙園社家記録』 応安四年十月七・八日条

八坂神社記録(増補史料大成)

- ノ七日、(中略)
- 1 一 辰一点湯山ヲ立、広峰寺、
- 2 3 路次記。在別、大概記之、
- 4 次山口庄、赤松律師所領、自湯山一リ、
- 5 次畑庄、道場河原、自湯山一リ、松山城ヲ右ニ見、
- 6 次家原、赤松所領、当庄内大道ノ左ニ社アリ、
- 7 次カウツハタ山ト云ツル也、
- 8 巴上撰州
- 9 撰州
- 10 撰州、播磨ノサカヒノタクケニ、人カミ松十四五本リ、
- 11 次ヨコフ、昼休所、國人藤田所領云々、カウツハタヨリ三里、
- 12 次東条ノ八日市ニ夜宿、北畑カヤ屋、湯山ヨリ七里、
- 13 是マデ領、夕雨、同夜並雨
- 14 一 卯刻ニ東条ノ八日市場ノ宿ヲ立領、神玉宮領云々、日吉社
- 15 一次クホ木、自八日市一里、四日市アリ、自東条ニリ、
- 16 一次東ノ河井、玉野ノ行又ハムミヤ、西ノ岸ノ坂ヲ上テ野也、

17 玉野ト云野ハルノナリ

18 一次西ノ河井、大河渡テ又野アリ、其名玉野云々ハムミヤ野ノアノ地

19 山ノハツレニ口跡アリ

20 一 ミクケ、自東条市三里半、今日昼ノ休所、

21 一 中山ト云山ニ念々地行、前広峰山見、

22 又アラチノ岩屋トテ、左ニ小寺アリ、紅葉殊勝、

23 一 辰刻広峰西坂ヲ上テ、公文有賢坊ニ付、自今日西刻路次大雨大風、落付公文、酒肴如例、

24 一 今夜甚雨大風之間不参社、代官寄方正禪、

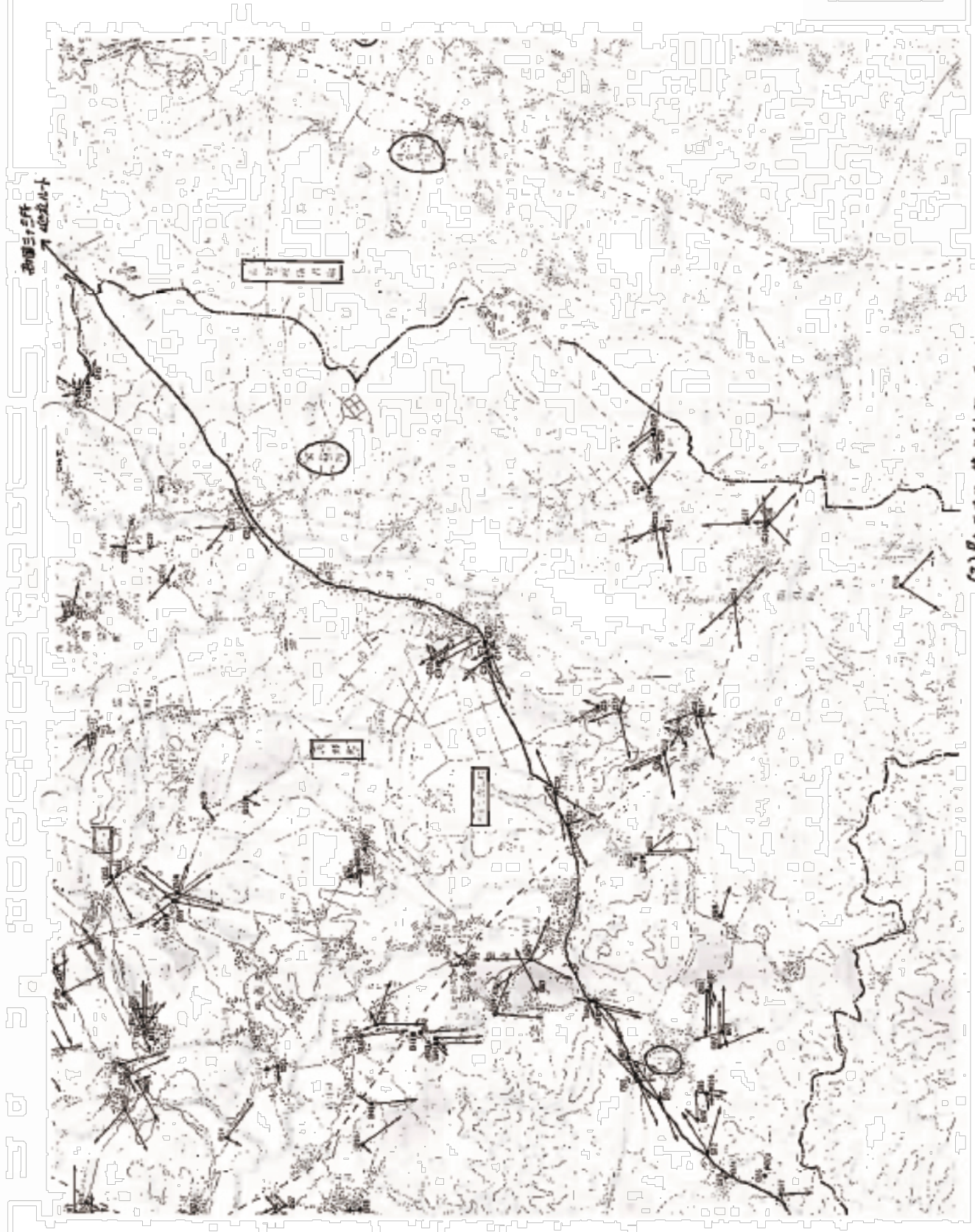
○ここにあげたのは、紙園社の元執行宝寿院願證が、撰津湯山(有馬郡奥)で湯治した後、播磨広葉社(姫路市)の参詣に向かった際の日記。これによると、願證は、現在の小野市域にあたる八日市・久保木・東河井(合)を経て、西河井(合)(中世?解説)で市域に入り、三口で昼休みをとったあと、中山(現中山町、大朝町付近の山間を指すか)を越えて現姫路市域に抜けている。なお、文中の「ハムミヤノ野」は朝野で西野原古地、「大河」は万願寺川、「玉野」は朝野の古地名のことと推定される。

これまでに、赤松則祐が金剛三昧院継掌への信達について返信する

184 『赤松則祐書状集』(年未詳)七月十三日

金剛三昧院文書、高野山文書五

御礼安承水候了



坂田三ノ井
坂田三ノ井

(2) 坂田三ノ井(本編)の位置

第2部

鶉野飛行場関係歴史遺産

基礎調査報告書

第1章 はじめに

1 調査に至る経過

加西市は、兵庫県南部の内陸部に位置する。市域の南部、鶉野町を中心としたところに、第二次大戦中に姫路海軍航空隊基地、川西航空機鶉野工場が造られた。当時の鶉野飛行場滑走路は現在も残り、防衛省（陸上自衛隊青野ヶ原駐屯地）により管理されている。また周辺には今なお防空壕などの基地施設が数多く残り、地域の開発と保存活用が行政課題のひとつとなっている。

この行政課題は、平成18年度に策定された加西市第1次改革マニフェストに「鶉野飛行場跡地の有効活用」としてとりあげられ、行政の取り組みが進められた。平成19年度には、防衛省に滑走路跡地の払い下げについて要望をあげた。また、市民からは跡地利用についてパブリックコメントを求め、35名から42件、防災施設、運動公園、住宅地、道の駅、平和祈念館などの利用提案を受けている。平成20年度には、官学連携により東洋大学から飛行場跡地の利用の検討がなされ、次世代エネルギーパークなどの活用提言を受けた。また、地元鶉野上、中、南の3町による鶉野飛行場跡地利用協議会において勉強会を開催し、地元の意向、要望等について聴取を行っている。

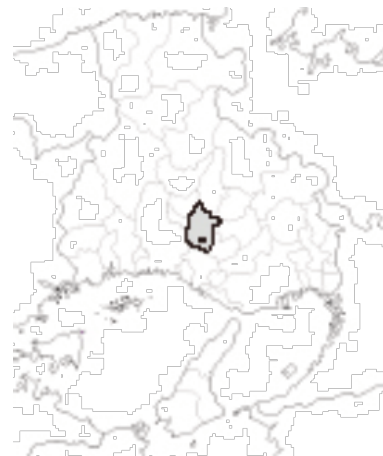


図1 鶉野飛行場位置図

跡地活用を検討する上で、鶉野飛行場跡の歴史文化遺産としての側面は重要である。鶉野飛行場跡については、十数年来、地元住民が中心となる「鶉野平和祈念の碑苑保存会」が結成され、調査活動等が地道に行われていた。教育委員会では、保存会の調査成果等を参考にし、歴史遺産としての再評価をする学術的な基礎調査を実施することとなった。

基礎調査は、鶉野飛行場跡の一画に神戸大学農学部附属食資源教育研究センターが所在し、構内に数多くの基地施設が遺存していることから、神戸大学の協力を得て、平成20年度より3カ年の共同研究として取り組むことになった。

なお、平成22年度には、市観光部局による鶉野飛行場跡をめぐる「戦争遺産バスツアー」企画など、歴史遺産を観光資源として活用していく取り組みなども始まっている。

2 共同研究の概要と体制

- (1) 研究題目 鶉野飛行場（旧姫路海軍航空隊基地）関係歴史遺産基礎調査
- (2) 所在地 兵庫県加西市鶉野町ほか
- (3) 研究目的 第二次大戦時に建設された鶉野飛行場に関する基礎調査を実施することにより、歴史遺産の学術的な評価を確立し、調査成果を近現代史の学術資料ならびに歴史遺産の活用に関する基礎資料として供することを目的とす

る。あわせて、地域資料の重要性を市民に伝える普及事業も実施する。

- (4) 調査項目 文献調査・聞き取り調査・施設測量調査・戦争遺跡活用事例調査
- (5) 調査体制 神戸大学（人文学研究科地域連携センター・地域連携推進室）
- 奥村 弘 （神戸大学大学院人文学研究科教授）
- 佐々木和子 （地域連携推進室研究員）
- 坂江 渉 （神戸大学大学院人文学研究科特命准教授）
- 加西市（加西市教育委員会自己実現サポート課）
- 八巻一雄 （加西市教育長 ～平成22年9月）
- 吉田 廣 （加西市教育長 平成22年10月～）
- 立花 聡 （加西市教育委員会自己実現サポート課長）
- 森 幸三 （加西市教育委員会自己実現サポート課長補佐）

3 調査の概要

(1) 平成20年度調査（平成21年1月～3月）

- 文献調査 防衛研究所史料閲覧室・財団法人大阪国際平和センターほか
- 聞き取り調査 対象者 藤原昭三氏（内務省姫路施設工事事務所勤務者）
- 施設測量調査 遺存施設分布調査
- 普及事業 講演会「戦争遺跡調査と鶉野飛行場」佐々木和子（神戸大学）
鶉野歴史ウォーキング「第6回加西ロマンの里ウォーキング」

(2) 平成21年度調査（平成21年7月～平成22年3月）

- 文献調査 神戸大学百年史編集室・兵庫県県政資料館
防衛研究所史料閲覧室・国立国会図書館ほか
- 施設測量調査 予備調査・実測調査（地下倉庫ほか5施設）
- 普及事業 北条高校総合学習による戦争遺跡見学会

(3) 平成22年度調査（平成22年7月～平成23年3月）

- 文献調査 防衛研究所史料閲覧室・国立国会図書館・神戸大学百年史編集室ほか
- 聞き取り調査 対象者 上谷昭夫氏（鶉野平和祈念の碑苑保存会）
- 戦争遺跡活用 千葉県館山市 赤山地下壕跡関連戦争遺跡
事例調査 大分県宇佐市 宇佐海軍航空隊関連戦争遺跡
- 普及事業 歴史文化遺産活用シンポジウム
- 刊行事業 鶉野飛行場跡戦争遺産ガイドブック
鶉野飛行場関係歴史遺産活用シンポジウム記録集・基礎調査報告書

（森）

第2章 鶉野飛行場跡の歴史

1 姫路海軍航空隊基地

1942年（昭和17）6月のミッドウェー作戦の失敗により、日本海軍は戦場での制空権の重要性を認識し、同年秋、パイロットを急遽養成するため、基地航空兵力の増隊を決定した。同年10月、作戦航空隊は番号航空隊に改正され、地名を冠した練習航空隊と分けられた。

姫路海軍航空隊（通称「姫空」）は、1943年（昭和18）10月に加西郡九会村に開隊した。同じ日、美保（予科練）、第2相模野（整備）、松山（予科練）航空隊などが開隊している。姫空は、実用訓練をおこなう練習部隊であった。初級、中級訓練を終えた練習生が、艦上攻撃機、練習機による実用教程を終え、全国の航空隊に赴任していった。

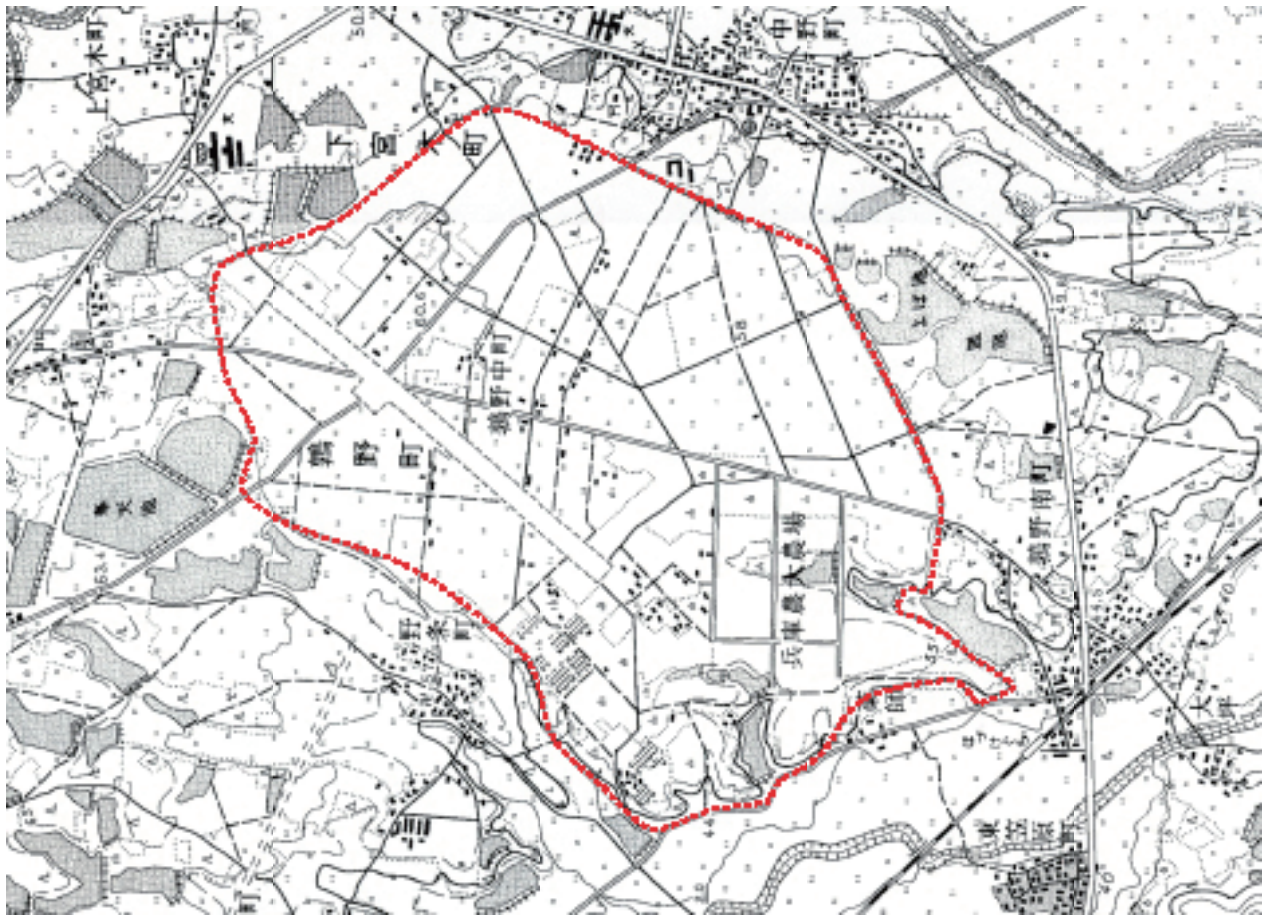
それに先立つ同年三月、基地の建設工事がはじまった。工事建設のため、内務省姫路施設工事事務所が設置された。敷地内（鶉野、中野、下宮木）にあった100戸余りの住宅や九会国民学校（現小学校）の移転も余儀なくされている。

工事は、人力でおこなわれた。付近の小高い丘を削り、池を埋めたてた。丘はツルハシで削り、土の運搬にはレールを引いてトロッコを使用した。この工事には、朝鮮人の労働者、近隣の加西郡、加東郡などからの勤労奉仕団が従事した。従来であれば、10年かかるものを「半年乃至1年」で建設することになった。当初の計画によると、毎日3,000人の必要人員のうち、1,000人が朝鮮人、1,000人が加東郡、加西郡からの「自由出役者」、残り1,000人が兵庫県下からの勤労報国隊が従事することとされた。地元では、「父は戸主会から、母は婦人会から、私は女子青年からと、定められた日になると例え田畑が多忙でも」「出勤しないと非国民」と言われる割当だった。九月には一部使用が開始された。

航空隊員には、基地周辺の民家に「下宿」が準備された。外出日に立ち寄り、加西の人達と航空隊員の交流がおこなわれた。

1945年2月、戦局の悪化に伴い、実用教程練習航空隊からも特別攻撃隊が編制されることになり、姫空からも志願者が募られた。特攻隊は白鷺隊と名づけられ、3月には大分県宇佐海軍航空隊へ進出した。4月には沖縄戦支援のために6回にわたって鹿児島県串良基地から出撃し、63名が戦死した。姫空が閉隊されたのは、45年5月5日、この日第五航空艦隊に編入され、その短い歴史を閉じた。

一方、航空基地は、「緊急作戦実施施設工事」として、飯盛山（現フラワーセンター）にトンネルを掘り、誘導路の整備をおこない、本土決戦に備えた。工事は、第3112設営隊が担当した。奈良空練習生も飛行機で訓練するのではなく、土木作業に従事した。作業は、一日三交代の突貫工事だった。終戦時には、飯盛山に5本のトンネルが掘られ、居住区、戦闘指揮所などが設けられた。

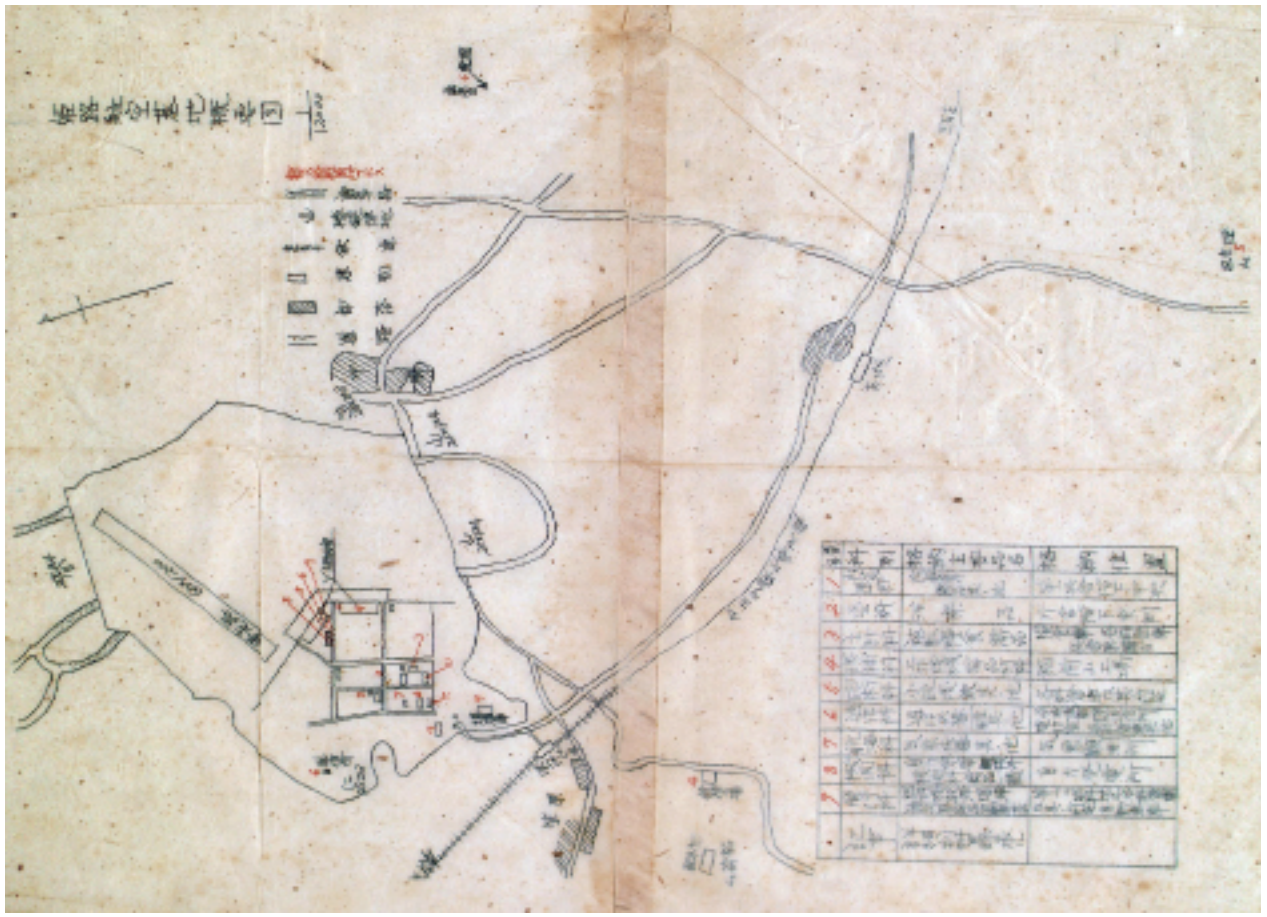


戦後の基地周辺の地形図 (昭和 42 年測図)

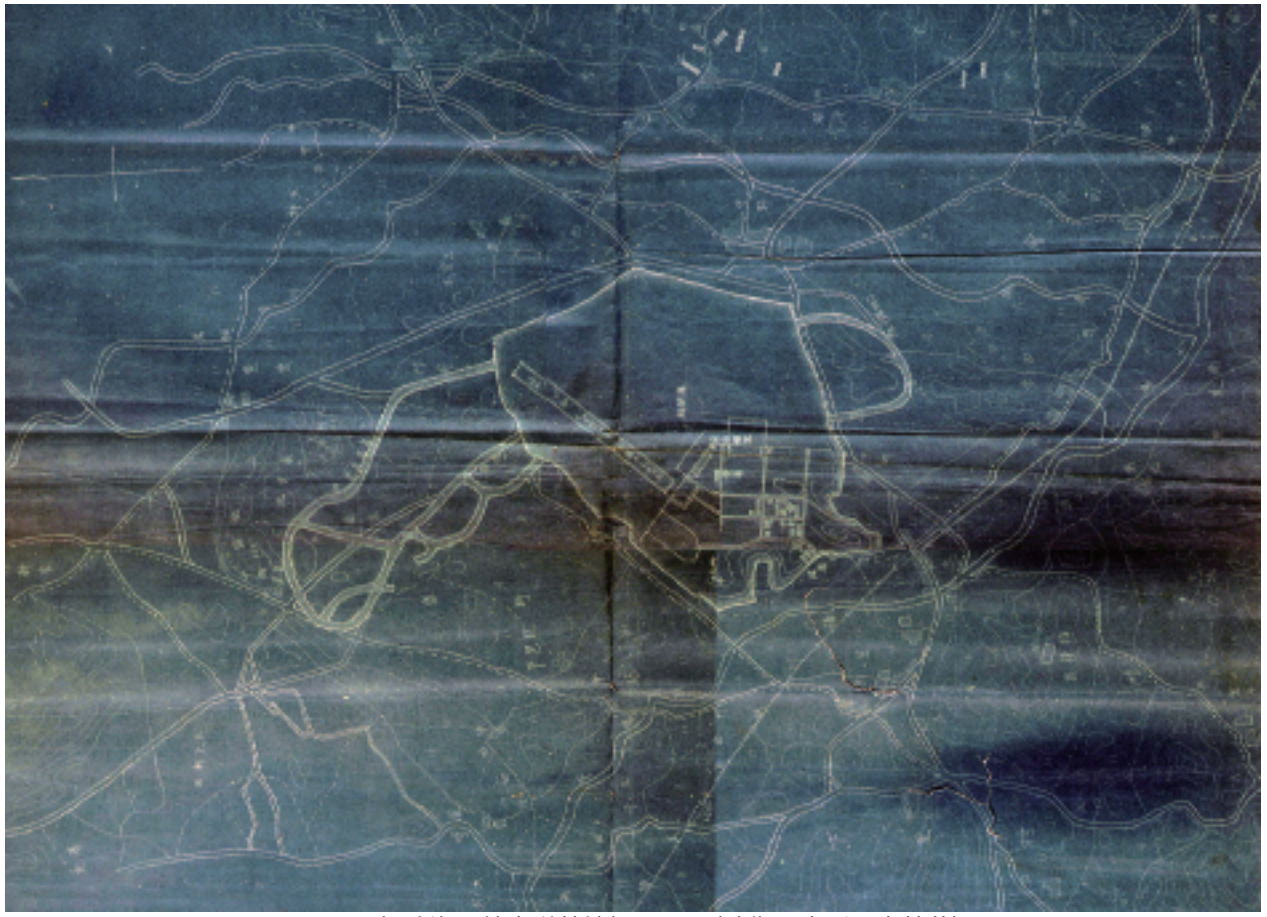


基地ができる前の周辺地形図 (大正 12 年測図)

図2 基地造成前後の比較 (国土地理院発行 2万5千分1地形図より抜粋)



史料名：航空基地図（本土関係） 姫路航空基地概要図



史料名：航空基地図（本土関係） 33 姫路航空隊

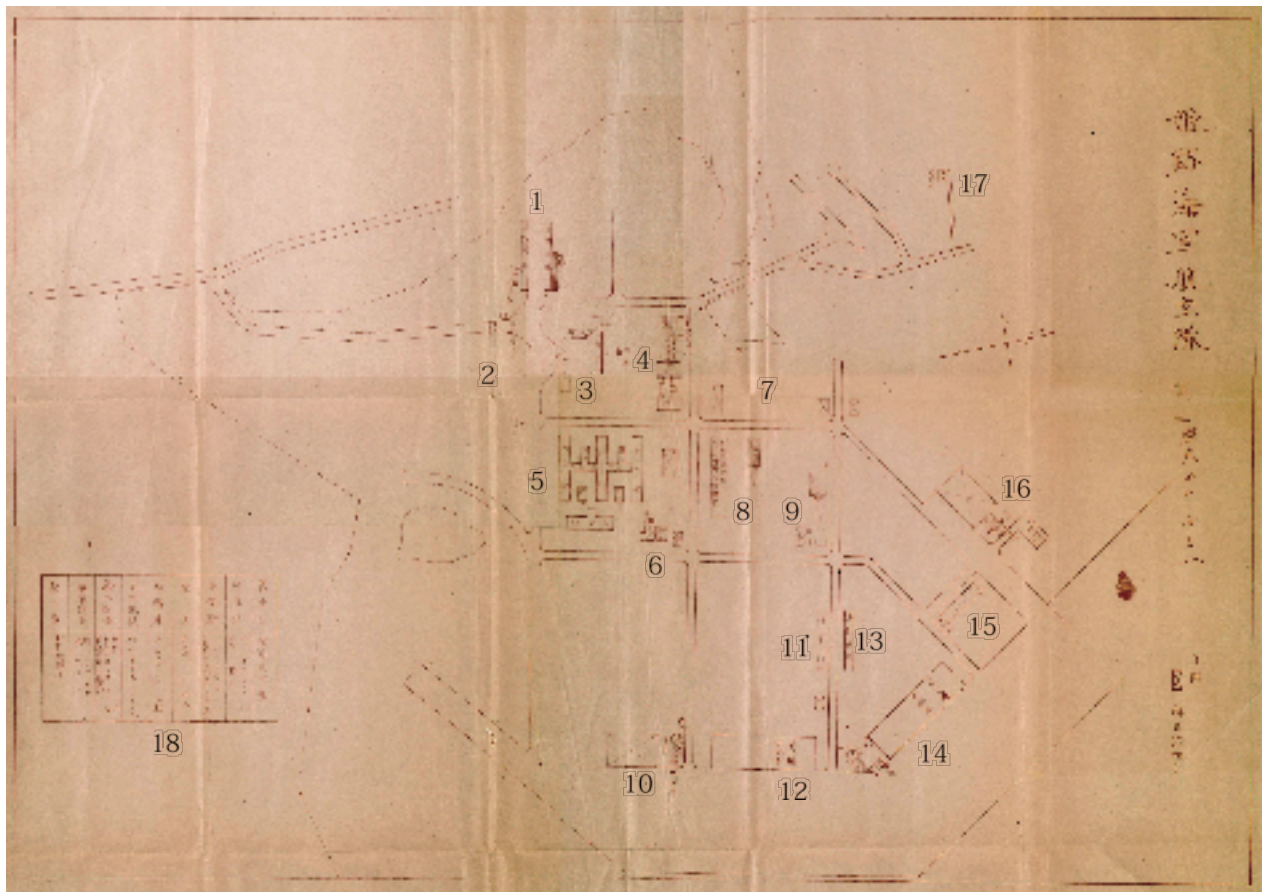
図3 姫路海軍航空隊基地概要図（防衛研究所図書館蔵）



写真1 今に残る鶉野飛行場滑走路跡



写真2 鶉野飛行場で飛行訓練に使用された戦闘機
(上)九七式艦上攻撃機11型 (下)天山12型 写真提供：上谷昭夫



1 便所 燃料油庫 自動車庫 自動車庫 自転車置場	5 兵(二階)舎 便所 洗面所 物干場 烹炊所 ×	7 × × ×	13 各科倉庫
2 衛兵詰所及面会所 □□□ □□□	×	8 兵舎兼講堂兼航空機爆撃演習講堂 計器操縦演習場	14 便所 作業員休憩所及湯沸場 指揮所 飛行機格納庫
3 庁(二階)舎 ×	6 ×	9 × ×	15 × 便所
4 露場 氣象観測所 氣象作業水素瓶格納所 道場	煙突 気缶場 石炭置場 灰捨場	10 × 便所 作業員休憩所及湯沸場 指揮所	16 × 便所 作業員休憩所及湯沸場 ×
		11 × ×	17 送信所
		12 飛行機格納庫	(×印は解体建物)
18 地名 姫路航空隊	掩体 無蓋 五五	電気設備	動 一〇〇キロ
滑走路 混 六〇×一二〇〇 一	格納庫 木 四〇×一二〇 二棟	照 一二〇キロ	
土質 粘土	居住施設 約六二〇〇平米 一二〇〇人	記事	瓦斯設備ナシ
運搬路 三〇×八〇〇〇	給水設備 井戸 二		
一部中央□□マカダム(未完成)	一日給水能力各 一五〇屯		
	第二給水源は濾過使用		

図4 姫路海軍航空隊基地建物概要図

(史料名：航空基地図(本土関係) 姫路航空隊其三 防衛研究所図書館蔵)

◎史料にみる基地の概要データ

位置：兵庫県加西郡下里村 基地名：姫路

最寄り駅よりの方位（距離 料）：播丹線法華口駅 N5

建設の年：1943 飛行場：1,200 × 60 混、1,200 × 200 のもの 2 本

用地面積（除飛行場）：9,157㎡ 格納庫：庁舎 2,092㎡、兵舎 8,919㎡

収容施設：工 1,580㎡、倉 1,454㎡ 工場倉庫：1,756㎡

主要機隊数：小型 主任務：教育、作戦

隧道並に地下施設

居住、倉庫、工場、燃料、爆弾：居（1,500 平米）、指、通、爆、燃、工倉、運搬路 8,000m

掩体：中型 10、小型 45、隧道 300 平米

（史料名：大東亜戦時における航空基地一覧表 海軍航空基地諸元調査表

大阪警備府航空基地関係より抜粋

防衛研究所図書館蔵）



写真3 姫路海軍航空隊基地全景（昭和22年撮影）

（米軍撮影空中写真より抜粋 国土地理院蔵）



写真4 姫路海軍航空隊基地庁舎（写真提供：上谷昭夫）



写真5 兵舎から見た衛兵詰所

（写真提供：上谷昭夫）

2 川西航空機株式会社鷓野工場

川西航空機株式会社は、現在の新明和工業株式会社（本社宝塚市）である。戦前は、兵庫県西宮市に本社のある海軍機をつくる飛行機会社であった。川西は、1928年（昭和3）11月、川西機械製作所飛行機部から事業を継承し設立された（本社神戸市）。1930年には、本社と工場を武庫郡鳴尾村（現西宮市）に移し、海軍指定工場として、フロート水上機（水上機）や飛行艇の製造をおこなった。

日中戦争が始まると、海軍主導で、川西は急激に生産力を拡大していった。1939年（昭和14年）6月、甲南製作所を、続いて翌40年に宝塚製作所、42年7月には、播但線京口駅近くにあった日本毛織姫路工場の建物を転用し、姫路製作所（姫路市天神町、現城東町）が設立された。日本毛織の従業員の多くは、そのまま戦闘機の製造に従事した。

姫路製作所では、鳴尾製作所から技術者を招き、紫電・紫電改の量産に備えた。姫路製作所には、完成した飛行機を飛ばす飛行場がなかった。そこで、加西郡九会村（現加西市鷓野町）に建設された姫路海軍飛行場の西に組立工場を建てたのである。

鷓野工場は、1944年（昭和19）12月に姫路製作所の組立工場として開設された。姫路で作られた機体を、馬力などを使い鷓野に運び、最終組み立てをおこなった。その後、鷓野飛行場で川西航空機のテストパイロットの試験飛行をおこない、完成した機は海軍に引き渡された。さらに、同飛行場で、海軍の搭乗員による試験飛行を経て、実戦部隊に引き渡された。終戦までに姫路製作所では、紫電466機、紫電改44機を製造した。

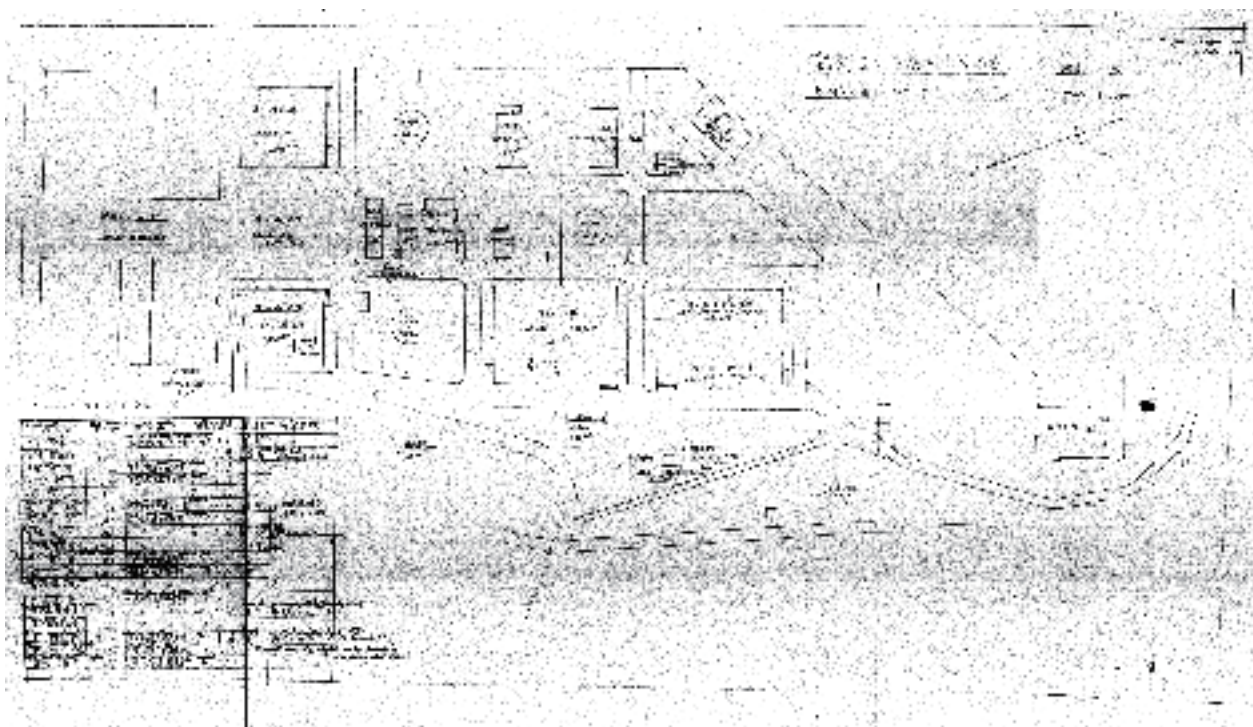


図5 川西航空機工場の概要図

（史料名：米国戦略爆撃調査団資料 米国国立公文書館蔵）

45年（昭和20）2月23日、第316設営隊が宮崎県から北条町に到着した。同隊は北条高等女学校、北条国民学校を宿舎に、北条（保木山）に川西航空機の疎開工場を建設した。北条工場は、北条町横尾の山の斜面を掘った半地下壕だった。同工場に一部工作機械が運び込まれたところで、終戦をむかえた。そのほか、米国戦略爆撃調査団報告書には、段下、笠松などに疎開工場を作ったと記録が残っている。

3 紫電・紫電改

川西航空機は、大きくわけて大型飛行艇グループと小型機グループの二種類の水上機を製造する海軍の飛行機会社であった。

1941年（昭和16）12月、アジア太平洋戦争の勃発とともに、川西は局地迎撃戦闘機の開発にのりだす。完成間近な高速水上戦闘機「強風」を改造して、陸上機にすることが考えだされたのである。同機では、摩擦抵抗を少なくする層流翼、空戦能力をあげるための自動空戦フラップなど新しい技術が取り入れられていた。これに中島製2,000馬力エンジン「誉」を搭載し、フロートを引込脚にする2点に絞って、設計変更がおこなわれた。また、主翼下に20mm機銃2挺、機首に7.7mm2挺が装備された。

翌42年12月、川西初の陸上戦闘機の初飛行が、陸軍管轄下の伊丹飛行場を借りておこなわれた。水上機専用メーカーであった川西には、飛ばせる陸上飛行場がなかったのである。試作機の初飛行には成功したが、前下方視界不良、主脚引込機構の故障、エンジン不調とトラブルが相次いだ。一足先に開発された三菱製「雷電」の不調もあり、生産しながら問題点を解決していくことになった。この機の制式採用は、43年8月、「紫電」一一型と名づけられ、鳴尾・姫路製作所で量産されることになった。

1943年3月、「紫電」を基礎に、次期戦闘機の設計がはじまった。「紫電」の欠点克服のためには、全面的な設計変更が必要だった。その結果、主翼を中翼式から低翼式に変更し、引込脚トラブルや視界不良が解消された。20mm機銃4挺を装備し、攻撃力も増加した。「紫電」の改造型、「紫電改」の初飛行は、「紫電」からわずか1年後の12月である。制式採用は、45年（昭和20）1月、「紫電」二一型と名づけられ、のちに紫電改と呼ばれるようになった。



写真6 紫電改 （写真提供：雑誌「丸」潮書房）

◎史料にみる紫電改の概要データ

機種 機名 略符号		乙戦(注1) 紫電改 N1K2-J	型式 乗員		単座低翼 1名
主要寸度	全幅	11.99 m	燃料搭載量 (増槽)		716 リットル (400 リットル)
	全長	9.346 m			
重量	自重	2657kg	性能	最高速 / 高度	312kt/3000m
	正規全備	4000kg		上昇時間 / 高度	7'22"/6000m
発動機	名称	中島	兵装	実用上昇限	10760m
	離昇馬力	誉二一型 1990 HP		航続力	全力 0.5 時后 460 哩 /200nm /3.0km
プロペラ	形式	住友 VDM 4 翅	爆装	着裝	20 mm X 4
	直径	3.3 m		爆装	60kgX4 又は 250kgX4

注1 乙戦とは、火力と上昇力に優れた戦闘機（主に局地戦闘機のこと）

（史料名：海軍現用機性能要目一覧表昭和20年8月22日 第一海軍（航空）

技術廠飛行機部 より抜粋 防衛研究所図書館蔵）

4 国鉄北条線 列車転覆事故

1945年（昭和20）3月31日午後3時30分頃、北条町駅発栗生行上り列車が、網引駅付近で脱線転覆した。この事故の原因は、海軍による最終検査中の紫電21型（紫電改）のエンジンが急に停止し、不時着しようとした際、線路を引っかけたことによるものであった。線路が少し外れたところへ、機関車が接近、転覆。機関車の上に木製客車（一両）が乗り上げ、客車は中ほどでくの字型に折れ曲った。搭乗員は、逓信省乗員養成所出身の第1001海軍航空隊姫路基地派遣隊員であった。1001空が、試験飛行、輸送を担当していたのである。

転覆と同時に汽笛が鳴り響いた。村では半鐘が鳴らされ、警防団の人々が駆けつけた。負傷者を救出し、竹と箆で作った急拵えの担架や戸板で網引の公会堂に運んだ。何回か運ぶ内に海軍の兵隊が来て運んだという。

民間人を巻き込み、死者11人、負傷者62人と言われる大惨事となった事故。にもかかわらず、結局詳しく調査されることはなかった。「軍の機密」「調査の必要無し」と憲兵隊長が言ったと、当時の車掌はのちに証言している。この日の第1001空の戦時日誌には、「紫電1機 離着陸訓練中不時着陸、機体大破、搭乗員殉職」とのみ記してあった。

なお、このほか、同年4月15日には、紫電が多可郡中町に試験飛行中に墜落、第1001空の搭乗員が死亡する事故がおこっている。

5 空襲

姫路航空隊基地を襲ったのは、米海軍の空母艦上戦闘機による銃爆撃であった。第1回目は、1945年（昭和20）3月19日であった。この日の攻撃部隊は、第5艦隊第58機動部隊。洋上から18・19日の2日にわたって、沖縄攻略支援作戦の一環として、九州、四国、瀬戸内海方面の飛行場、工場などを攻撃した。「鷓野にも二十六機来襲、黒煙奔騰」と、当時坂本に住んでいた古家實三氏の日記にある。

基地への本格的な攻撃は、7月24日以降のことである。攻撃部隊は、5月末に第5艦隊第58機動部隊から改称した第3艦隊第38機動部隊であった。7月1日、同隊は、フィリピン、レイテ湾を出動。その任務は、日本本土侵攻作戦を容易にするため、日本の残存艦艇と航空兵力、戦争継続に必要な施設や基地の破壊にあった。西日本への攻撃は、24日から30日までおこなわれた。

米軍資料によると、姫路航空隊基地を襲ったのは、24日と30日。24日午前11時にF4U コルセア 10

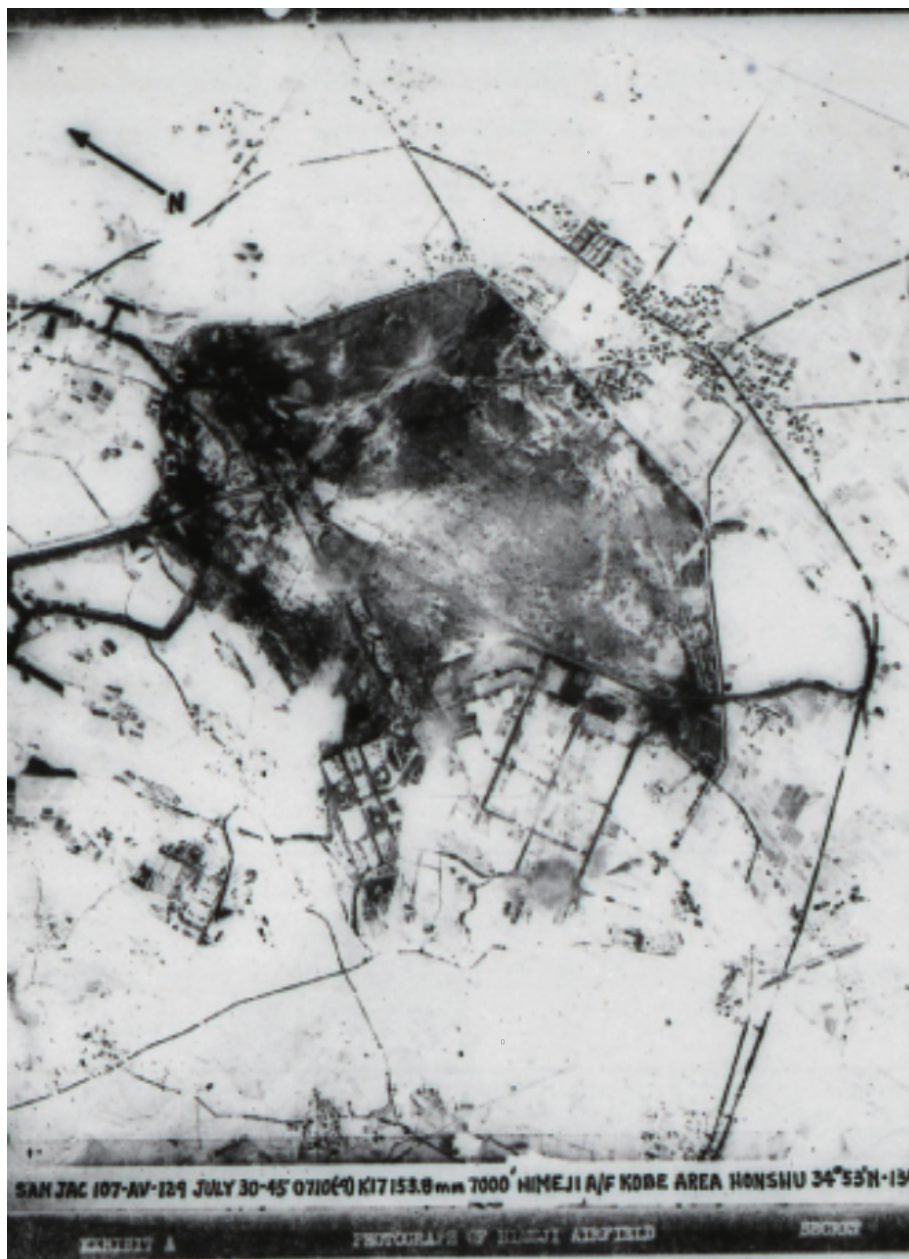


写真7 爆撃当日に撮影された鷓野飛行場（昭和20年7月30日撮影）
（史料名：米国戦略爆撃調査団文書：海軍・海兵隊艦載機戦闘報告書
米国国立公文書館文書 国立国会図書館蔵）

機が、11時59分に8機のF4Uが攻撃したと記されている。この日の海軍第3112設営隊戦時日誌によると、「11時40分敵艦上機本隊並二飛行隊来襲爆撃銃撃」。飯盛山トンネル入口付近で、「三発五〇疋爆弾投下され奈良空練習生一名戦死人夫三名重軽傷」という。翌25日の記録は米軍側にはないが、古家氏は、「鶉野へも艦載機数機来襲」と記している。

30日の攻撃は、午前6時50分に4機のF6F（グラマンヘルキャット）、9時40分に9機のTBM、9時45分に7機のF6F、午後2時に4機のF6Fの4回と、米軍資料にある。古家氏もその日の日記に、午前3回、午後1回、鶉野へ敵機来襲。翌日には、「川西（航空機）の社宅で母子三人即死、外工員、海軍兵数名の死傷者」「王子の民家五戸が機銃掃射により屋根を破壊」とその被害を記した。基地では、30日午後7時から、総員夜間作業を以て補修作業を行ったという。

6 戦後の鶉野飛行場

終戦後の1945年（昭和20）10月23日、アメリカ軍が元姫路海軍航空隊基地に進駐し、翌年5月まで兵器や弾薬の処理にあたった。

一方、約244万㎡に広がった基地跡では、同年秋から戦災・復員・引揚者などの受入先として、あるいは食糧増産のためや緊急開拓事業が行われた。当初約100世帯が入植したが、基地建設時には表土を切りとったり、ローラーで固めており、非常に開墾が困難であった。酸性の強い土質にも悩まされ、約5年間のうちには、半分の約50世帯となった。一方、同地は戦争中に急遽軍によって買収されたところであり、地元の増反の要求にも答えた。入植者や地元民の努力によって、基地跡地は次第に立派な農地に姿をかえていった。

敷地の多くは次々と農地に払下げられた。しかし、滑走路一本を含む一部はアメリカ軍に接収された。1952年（昭和27）4月には警察予備隊（自衛隊の前身）が旧航空隊兵舎に進駐、近隣の人たちに本格的に演習場になるのではと不安をいだかせた。その後滑走路のみ連絡不時着用として使われることになり、兵舎2棟も同年11月には解体され、再利用のため運ばれていった。

57年（昭和32）9月には、接収も解除され、滑走路は大蔵省の管轄となった。防衛庁（当時）は全面払下げを希望した。地元は農林省を通じて払下げを希望し、結局その北側1／4が、62年（昭和37）夏に農林省に払下げられた。また、何度か播磨空港建設用地にと話はずだが、実現することはなかった。

一方、1964年（昭和39）頃、県立兵庫農科大学の神戸大学移管に伴い、滑走路に隣接する兵舎施設跡40ヘクタールに附属農場が建設されることになった。66年度に工事着手。当時敷地内には建物基礎、防空壕などが散在していた。これらの頑強なコンクリート構造物は、予算の都合上完全に撤去できず、一部はそのまま残ることになった。

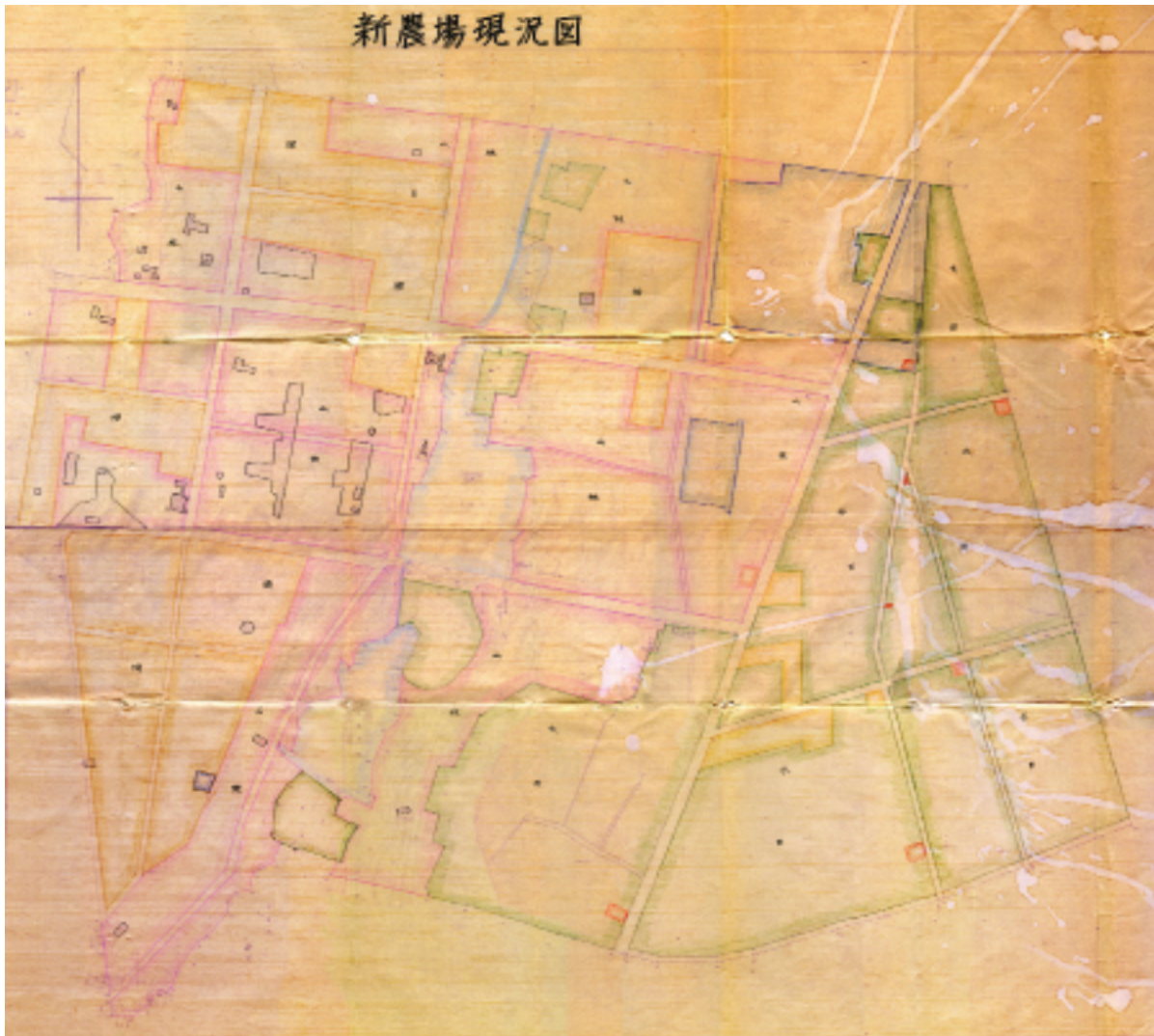


図6 兵庫農科大学附属農場建設時の現況図（黒線が予定地内に残るコンクリート施設）
（史料名：新農場現況図 神戸大学附属図書館大学文書史料室蔵）

7 鵜野平和祈念の碑

1994年（平成6）11月6日、滑走路跡で、スカイスポーツを楽しむための「KASAI スカイパークフェスティバル」が開催された。滑走路近くの会社に勤務していた上谷昭夫氏は、以前会社に元海軍関係者が航空隊基地のことを尋ねてきたこともあって、テントを張り、紫電改などビラを用意した。軍関係者だけでなく、地元の人たちからも、「ここで飛行機を作っていた」など、反響は非常に大きかった。終了後も別の海軍関係者が、自分たちの記録をもって訪ねてこられた。こういった動きの中、基地や川西航空機について、どこにも聞いても満足する結果が得られず、上谷氏は自分で調査をおこなうことにした。調査は、1947年、48年米軍撮影の空中写真を手に入れ、防衛研究所図書館に通う本格的なものだった。関係者に話を聞く中で、資料や写真の提供を受けるようになった。戦争末

期には、この基地で特別攻撃隊が編成され、出撃していったことも判明した。

2回目のスカイパークフェスティバルは、97年11月2日におこなわれた。この日には、連絡をとりあっていた海軍関係者と、ピラを1万5000枚程度準備し、再び集まる場を設けた。これらの動きが、航空関係雑誌の編集者のめにとまり、上谷氏は、『丸』1998年1月号に「海軍姫路空 知られざる太平洋戦争の2年間」を寄稿した。

この記事はさらに波紋をもたらした。終戦時に訓練生であった水川通氏が、何とかこの地に碑をたてたいと市議会関係者、商工会などにこの記事をもって、加西を訪れた。当時の北条高校校長先生は、同氏と軍隊での同期生であり、海軍軍人の下宿先であった地元の人、上谷氏も加わり、土地探しがはじまった。また、基地のあった地元区長三宅通義氏も賛同し、「鶉野平和祈念の碑保存会」を結成した。

1999年（平成11）10月、鶉野平和祈念の碑が建立された。碑には、元特攻隊員の思いや戦死者氏名、搭乗員殉職者の名前が刻まれた。また、慰霊碑というよりも、再び戦争のない為の平和を祈念するための碑として、記録として残そうと、基地建設の経緯、基地および川西航空機鶉野工場の概要も記された。名前も、「平和祈念の碑」とされた。

碑の建立にあわせ、上谷氏は、これまでの調査研究の成果を、『いまに残る姫路基地』（上谷昭夫編、鶉野平和祈念の碑建立実行委員会、1999年）にまとめられた。さらに、その後川西航空機に焦点をあてた『紫の閃光 - 川西航空機秘話』（上谷昭夫編、塩谷一男レイアウト、鶉野平和祈念の碑苑保存会、2002年）を出版された。これらの2冊は、姫路航空隊基地と川西航空機鶉野工場を知るうえで貴重な資料となっている。



写真8 鶉野平和祈念の碑苑

8 空中写真に見る鶉野飛行場の変遷

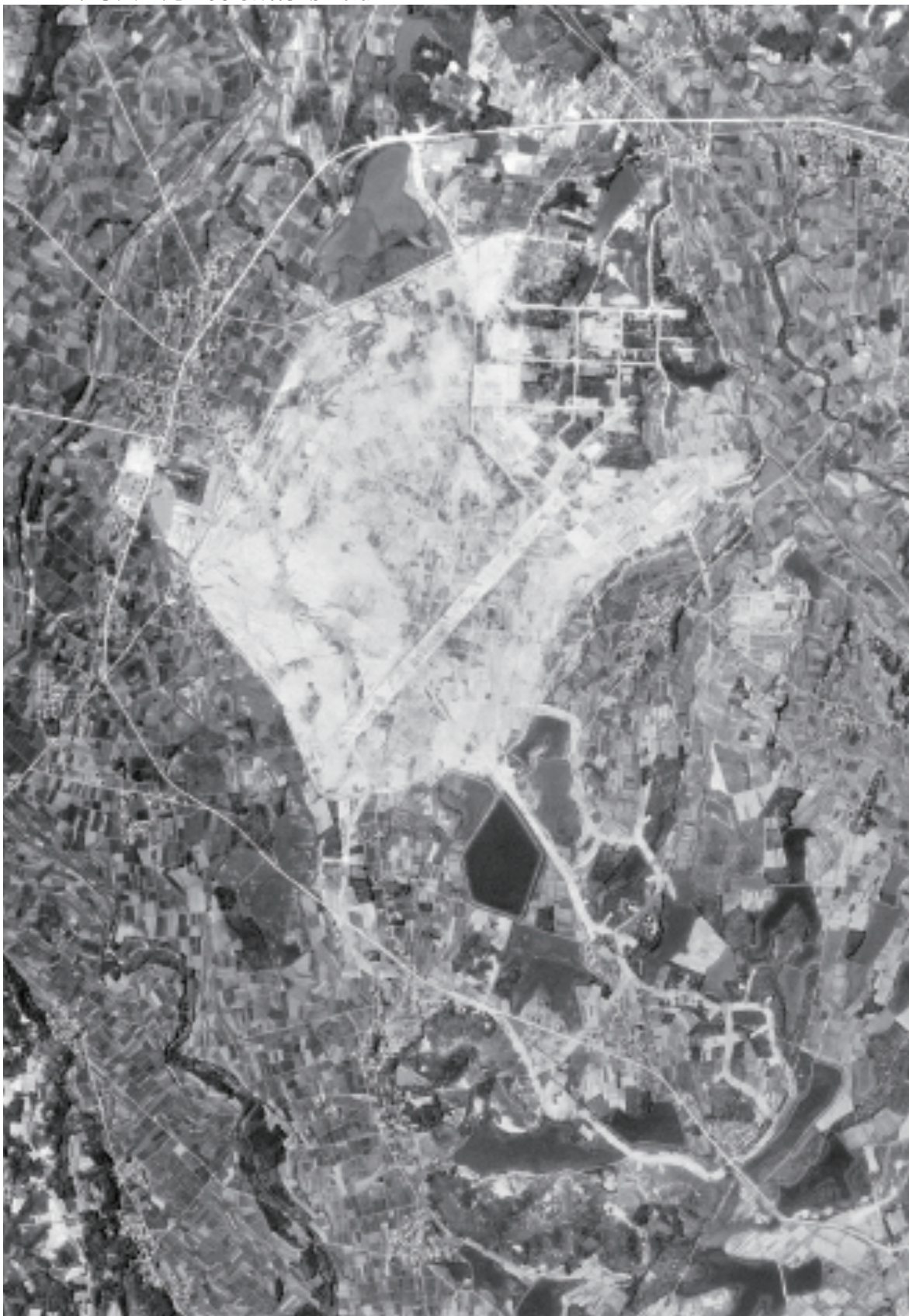


写真9 戦後間もない頃の鶉野飛行場全景（昭和23年撮影）

（米軍撮影空中写真より抜粋 国土地理院蔵）



写真 10 戦後の鷺野飛行場全景（昭和 36 年撮影）
（国土地理院撮影空中写真より抜粋 国土地理院蔵）



写真 11 最近の鶴野飛行場全景（平成 16 年撮影）
（国土地理院撮影空中写真より抜粋 国土地理院蔵）

9 年表

- 1920 (大正 9) ●川西機械製作所創設、その後飛行機部設置
- 1928 (昭和 3) ●川西航空機株式会社創立 (川西機械製作所飛行機部の事業を継承、11 月)、同社海軍指定工場に (12 月)
- 1930 (昭和 5) ●川西航空機、本社及び工場を武庫郡鳴尾村に移転 (5 月)
- 1931 (昭和 6) 柳条湖事件 (満州事変、9 月)
- 1937 (昭和 12) 盧溝橋事件、日中全面戦争 (7 月)
- 1941 (昭和 16) マレー半島上陸、真珠湾攻撃、アジア太平洋戦争 (12 月)
- 川西航空機宝塚製作所を開設、操業開始 (12 月)
- 1942 (昭和 17) ●川西航空機甲南製作所を開設、操業開始 (2 月)
- 仮称一号局地戦闘機の試作に着手 (4 月)
- アメリカ軍、初の日本本土空襲 (ドウリットル空襲、4 月)
- ミッドウェー海戦敗戦 (6 月)
- 川西航空機姫路製作所を開設、操業開始 (7 月)
- 仮称一号局地戦闘機完成、海軍制式機に採用、「紫電」と命名、量産実施 (12 月)
- 1943 (昭和 18) ガダルカナル島から撤退 (2 月)
- 仮称一号局地戦闘機改の試作に着手 (3 月)
- ◇姫路海軍航空隊基地建設工事はじまる (3 月)
- ◇九会国民学校移転 (9 月)
- ◇姫路海軍航空隊基地開隊 (第十二連合航空艦隊、10 月)
- 学徒出陣 (10 月)
- 仮称一号局地戦闘機改完成、海軍制式機に採用、「紫電改」と命名、量産実施 (12 月)
- 1944 (昭和 19) ◇姫路航空基地にて、第三一空、第三二空編成、マニラに配備 (3 月)
- サイパン島陥落 (7 月)
- レイテ沖海戦敗退、海軍神風特別攻撃隊出撃 (10 月)
- B29 による日本本土空襲の開始 (11 月)
- 姫路製作所鶉野工場を開設 (12 月)
- 1945 (昭和 20) 川崎航空機明石工場を B29 が精密爆撃 (1 月)
- 東京、大阪、神戸、名古屋を B29 が焼夷弾爆撃 (3 月)
- ◇アメリカ軍艦載機により、姫路航空隊基地攻撃 (3 月)
- ◇姫路航空隊特別攻撃隊白鷺隊、宇佐航空隊に進出 (3 月)
- ◇紫電改不時着により、国鉄北条線列車転覆事故 (3 月)
- アメリカ軍、沖縄本島上陸 (4 月)

- ◇沖縄戦支援、菊水作戦による特攻出撃（4月）
- ◇姫路海軍航空隊閉隊（5月5日）
- 甲南製作所をB29が精密爆撃（5月11日）
- 鳴尾、姫路製作所をB29が精密爆撃（6月9日、22日）
- 川西航空機、国営第二軍需工廠に（7月）
- ◇アメリカ軍艦載機により、姫路航空隊基地攻撃
（7月24日、28日、30日）
- ポツダム宣言受諾の玉音放送、終戦（8月15日）
- ◇占領軍、姫路航空隊基地に進駐（10月、46年5月まで）
- 緊急開拓事業実施要項を閣議決定（11月）
- ◇旧姫路航空隊基地跡地に入植（秋）
- 1949（昭和24）◇旧姫路航空隊基地跡地の開拓土地売渡はじまる（11月）
- 1957（昭和32）◇滑走路、アメリカ軍による接收解除（大蔵省所管）
- 1962（昭和37）◇滑走路の4分の1、農林省に引渡（4分の3、防衛庁）
- 1966（昭和41）◇県立兵庫農科大、国立移管に伴う新農場建設工事開始
- 1994（平成6）◇KASAI スカイパークフェスティバル開催（11月）
- 1999（平成10）◇滑走路わきに、鶉野平和祈念の碑建立（10月）

（◇は鶉野飛行場関連事項 ●は川西航空機関連事項）

◎参考文献一覧

【参考史料】

戦時日誌 第3112 設営隊、防衛研究所図書館
第316 設営隊戦時日誌、防衛研究所図書館
第1001 海軍航空隊姫路基地派遣隊戦時日誌、防衛研究所図書館
海軍現用機性能要目一覧表 昭和二十年八月二十二日調 第一海軍技術廠
海軍飛行場面積概略表、航空基地関係、
姫路海軍航空隊 其三、防衛研究所図書館
姫路航空基地概要図、防衛研究所図書館
姫路航空隊、防衛研究所図書館
鶉野工場空襲被害状況図、米国戦略爆撃調査団資料、米国国立公文書館蔵
最終報告 川西航空機株式会社、米国戦略爆撃調査団、関西大学図書館蔵
米国戦略爆撃調査団：海軍・海兵隊艦載機戦闘報告書、国立国会図書館蔵

【参考文献】

あわ・がいど（1）『戦争遺跡』、安房文化遺産フォーラム、2004年
碓義朗著、『戦闘機「紫電改」』、白金書房、1975年
石井勉編著、『アメリカ海軍機動部隊：英和对訳対日戦闘報告 / 1945』、
成山堂書店、1988年
宇佐細見読本『「宇佐航空隊の世界1」』、豊の国宇佐市塾、1991年
上谷昭夫編、『いまに残る姫路基地』、平和祈念の碑建立実行委員会、1999年
上谷昭夫編、『川西航空機秘話』、鶉野平和祈念の碑苑保存会、2002年
『小野市史』、第3巻、本編3、2004年
『小野市史』、第6巻 史料編3、2002年
海軍第一期飛行専修予備生徒会編、『姫路海軍航空隊記：鶉野飛行場記念碑建立によせて』
海軍第一期飛行専修予備生徒会、1999年
『第二次世界大戦体験記 轍』、加西市教育委員会、1993年
『第二次世界大戦体験記 轍 第二集』、加西市教育委員会、1995年
菊池実著、『近代日本の戦争遺跡：戦跡考古学の調査と研究』、青木書店、2005年
菊池実著、『戦争遺跡の発掘：陸軍前橋飛行場』、新泉社、2008年
桑原 敬一 著、『語られざる特攻基地』、文春文庫、2006年
神戸大学百年史編集委員会編、『神戸大学百年史・通史1（前身校史）』、2002年
佐々木和子「川西航空機と紫電改」『歴史と神戸』第172号、1992年
十菱駿武、菊池実編、『しらべる戦争遺跡の事典』、柏書房、2002年
十菱駿武、菊池実編、『続しらべる戦争遺跡の事典』、柏書房、2003年

戦後開拓のあゆみ編集委員会編、『戦後開拓のあゆみ』、1974年
(財)地方自治研究機構・館山市『平和・学習拠点形成によるまちづくりの推進に関する
調査研究－館山市における戦争遺跡保存活用方策に関する調査研究－』、
館山市、2003年

朝鮮人強制連行真相調査団編、『朝鮮人強制連行調査の記録 兵庫編』、柏書房、1993年
塚崎昌之「本土決戦」準備と近畿地方、『戦争と平和』、第13号、2004年
塚崎昌之「神州不滅」本土決戦の実態、『季刊戦争責任研究』、第26号、2000年
辻川敦「阪神間の戦術的爆撃」『歴史と神戸』第172号、1992年
『東条町史』本文編、1995年

永石正孝著、『海軍航空隊年誌』、出版共同社、1961年
日本海軍航空史編纂委員会編、『日本海軍航空史 第2巻 軍備編』、時事通信社、1969年
日本海軍航空史編纂委員会編、『日本海軍航空史第3巻 制度・技術編』、
時事通信社、1969年

日本航空協会編、『日本航空史 昭和前期編』、1975年
姫路空襲を語りつぐ会編、『姫路空爆の記録：恐怖の昼と夜』、
姫路空襲を語りつぐ会、1989年

『姫路市史』、第13巻上、1994年
兵庫県農地改革史編纂委員会編、『兵庫県農地改革史』、1953年
防衛庁防衛研修所戦史室編、『戦史叢書95 海軍航空概史』、1976年
防衛庁防衛研修所戦史室編、『戦史叢書19 沖縄方面海軍作戦』、1968年
藤原昭三編「加西の戦争と平和－古家實三氏、昭和二〇年の日記より－」
『播磨郷土研究24号』2008年11月
藤原昭三編「加西の戦争と平和(二)－古家實三氏、昭和二〇年の日記より－」
『播磨郷土研究25号』2009年11月
松井範義、「神戸大学農学部附属農場の変遷」、『神戸大学史紀要』第5号 1995年7月/
神戸大学百年史編集委員会、神戸大学百年史編集室編
『社町史』第2巻、2005年
吉浜 忍編著、『沖縄陸軍病院南風原壕』、高文研、2010年

◎戦後の鶉野飛行場に関する神戸新聞記事一覧

	日付(西暦)	日付(和暦)	地方版	内容	備考
1	1950/6/10	S25.6.10	東播版	鶉野軍用地の水田化工事 近く第二期建設に移る	
2	1950/11/26	S25.11.26	播州版	土にいどむ 自営に道なお遠し せめて水田二反歩がほしい 夢もない鶉野開拓団の人々	写真
3	1952/7/27	S27.7.27	東播版	一町百姓の悲願達成 辛苦七年 旧海軍航空基地に平和の緑 50 世帯入植の鶉野開拓地	写真
4	1952/11/13	S27.11.13	東播版	兵舎は解体し明石へ 鶉野から姿消した”帝国海軍基地”	
5	1953/1/17	S28.1.17	東播版	悲願は水田 10 町歩創設 接収の不安も消えて 鶉野開拓者に 明るい春	
6	1953/6/13	S28.6.13	東播版	ギロリと光る眼 接収話だけでおびえる鶉野開拓民	
7	1954/6/13	S29.6.13	東播版	保安隊の整地に憶測 九会村鶉野元海軍飛行場 再び飛行場の 不安	
8	1955/1/9	S30.1.9	東播版 A	汗と涙の送り迎え十年 加西鶉野開拓団春来る 水田化の悲願 実る 「手で石開く」も今は夢	写真
9	1955/12/8	S30.12.8	東播版 A	開拓村に十年ぶりの正月 早くもシメナワの装い 加西町鶉野	写真
10	1956/1/1	S31.1.1	播州総合版	鶉野なお苦難の明け暮れ	
11	1956/1/1	S31.1.1	播州総合版	鶉野開拓団□	写真
12	1957/11/7	S32.11.7	北播版	熱心な質問攻め 自衛隊機加西町鶉野町へ	写真
13	1958/1/25	S33.1.25	北播版	加西町旧鶉野飛行場 第二の砂川にするな 滑走路払下げ運動 部落を真二つに切る 死活問題と近く中央へ	
14	1958/1/29	S33.1.29	北播版	学童通学にも危険 旧鶉野飛行場滑走路払い下げ 加西町が政 府へ陳情書	
15	1958/2/7	S33.2.7	北播版	是が非でも地元へ 鶉野飛行場滑走路問題 加西町でも決議	
16	1958/2/19	S33.2.19	北播版	ぜひ地元へ払下げを 鶉野旧海軍飛行場滑走路問題 部落長ら が政府へ陳情	
17	1959/3/12	S34.3.12	北播版	小谷池の□□□ 掘ミゾをこわせ 鶉野開田で抗議 流用問題 にならぬ	写真
18	1959/4/8	S34.4.8	北播版	あとは掘ミゾの場所 加西町鶉野の水紛争 ようやく解決の兆 し	
19	1959/8/2	S34.8.2	北播版	ブルドーザーで開墾 鶉野飛行場跡地	
20	1959/12/3	S34.12.3	北播版	払い下げ本決まり 加西町 鶉野元海軍飛行場	
21	1960/4/12	S35.4.12	北播版	新予算のゆくえ：④産業経済 加西町 鶉野飛行場跡など開発	
22	1960/12/28	S35.12.28	北播版	鶉野に飛行場を「播磨は一つ」を協調 姫路商議所の会頭語る	
23	1961/1/8	S36.1.8	北播版	荒地と取り組む四十九戸 加西町鶉野開拓村 飯米確保までに 成長 入植 15 年・・・あと 10 年の苦勞 食糧事情の好転で忘 れ去られた存在へ	写真
24	1961/1/14	S36.1.14	北播版	播磨の発展のため 鶉野に飛行場を 姫路市会同志会 市当局 に申し入れ	
25	1962/8/30	S37.8.30	北播版	またも脚光あびる鶉野 加西町 播磨空港実現するか 神戸経 済同友会が現地視察 地元は複雑な表情	写真
26	1966/1/18	S41.1.18	北播版	念願の部落会館完成 加西郡鶉野開拓農協 吹っ飛ばす 20 年の 苦勞 今後は文化施設に利用	写真
27	1966/2/27	S41.2.27	北播版	工場建つまで耕作 加西町鶉野北地区 12 人が陳情	

(資料提供：加西市史編集室)

(佐々木)

第3章 聞き取り調査

1 「鶉野飛行場建設時の様子について」 聞き取り調査

- (1) 日 時 平成 21 年 3 月 10 日 (火) 10:00 ~ 12:30
- (2) 場 所 加西市善防公民館
- (3) 出席者 藤原昭三 (内務省姫路施設工事事務所勤務者、加西郷土研究会会長)
聞き手 佐々木和子 (神戸大学地域連携推進室研究員)
森幸三 (加西市教育委員会市史・文化財室)

市内にお住まいの加西郷土研究会会長藤原昭三氏が、姫路海軍航空隊基地建設時に、内務省姫路施設工事事務所に勤務されていたということで、当時のお話をお伺いしました。

— 当時はどちらにお住まいでしたか。少し自己紹介をしていただけませんか。

藤原昭三：当時は網引に住んでいました。60 年も前の事で記憶も薄れていますが、昭和 4 年 (1929 年) 3 月 30 日です。まもなく 80 才です。昭和 29 年に下里の西笠原へ引越し、以後ずっと住んでいます。当時 5 人兄弟で、1 人昭和 16 年に死亡し、4 人のうちの 2 番目です。

当時は網引から飛行場の建設現場に通ってました。最初は内務省姫路施設工事事務所に勤めました。1943 年 (昭和 18) 5 月 27 日からです。現場事務所に勤めた後で、建設されて本事務所になった。場所は旧九会小学校にありました。

小学校の運動場の隅に農業用道具倉庫がありました。高等小学校になると農業も教えてもらっていた。そこには銃や飯盒等があったが、新しい本事務所が出来るまで、片付けて工事事務所になりました。私は本事務所に勤めていません。

もうひとつ現場事務所があり、私はそこ

に勤めていました。現場事務所へは自転車で 10 分程の所にありました。鶉野公会堂があり、それが現場事務所です。海軍記念日 (昭和 18 年 5 月 27 日) でよく覚えています。

— 勤められたきっかけは何でしたか。そして、お仕事の内容も教えてください。

藤原：前の方が辞められたので、その後に行った、という事です。日給が 1 円 15 銭と安かった為と思います。その後、現場へ行った (12 円程か) 現場監督の助手で行きました。仕事は、給仕で入りました。尋常高等小学校を卒業してからですから、今の中学 2 年生 (14 才) でした。

日給 1 円 50 銭の辞令をもらいました。まったく予期しなかったですが、お盆になって賞与をもらいました。給仕ですので、お茶を出したり、使い走りです。現場と本事務所との連絡に走ってました。工事が始まったのは 17 年頃だったと思いま

す。私が入ったころは、工事は大分進捗しつつありました。私は事務所を開けて皆さんが出勤する迄にお茶を沸かして置くのですから、朝は早くから勤務をしました。七輪に炭を起してお茶を沸かすのです。掃除をして揃うとお茶を出す、という事です。給仕は2人いたのです。食堂があったので事務所の人の弁当を取りにも行きました。私の就職の一番最初です。苦しい事もありましたが、果物や飴等配給してもらえます。北条の毛利書店の主人が勤めていたので、本の特配がありました。文学書など持って来ていて、私は買ってよく読んでいました。

特配というのは一般では手に入らないという事です。ここに施設が出来てたくさんの方が来るので、それ用にと特別に配給があったのです。

通勤にこの辺りまで自転車で来ていました。川西に変わった時は、加古川・北条線を通って行きました。法華口から野条迄歩いて通いました。

一現場監督や助手・給仕の方は近隣の方が雇われていたのですか。

藤原：そうですね。近くの人でしたね。現場・現場に監督がいましたので、10人前後はいました。技師・技手・技手補・定工夫・工夫・定夫・工夫という体制でした。技手は事務所にいて、技手補の指揮をしていました。所長は技師で、有本欣二海軍中佐(もしくは少佐)でした。

人夫には朝鮮人が多かったです。飯場があり、1つの工事現場で働いていました。

日本人も勿論います。後の方には勤労報国隊とか、たくさん何千という人が来ていました。

現場監督は、技手補がしていました。1人だけ工夫がいました。技手になれば事務所に入りますので。範囲が広いので、現場が10ヶ所あったと思います。1人の現場監督の下に何十人～何百人の人が働いているわけですから、指揮をするわけです。私等は現場事務所と本事務所の連絡・現場との連絡に走っていました。その間に朝・昼・3時にお茶を出す、といったことをしていました。

火の見櫓があり、下には工場があり、作業道具の修理をする鍛冶屋的な建物がありました。

海草池の辺りに現場事務所がありました。鶉野区長飯尾嘉康さんという人がよく来ていました。その内に新しく現場事務所が出来、本事務所が小学校から移りました。宿舎も出来て(清慶寺に泊まっていた人々)車庫も食堂も出来たのです。

18年中に出来たと思います。夏までに出来たのではないかと思います

一工事そのものは全部人力ですよ。

藤原：そうです。土の運搬にはトロッコというのがあって、レールを引いて、この辺りの山・小高い丘を削り、池を埋めていたのです。

土を運ぶのはトロッコです。最後の方ではトロッコで機関車が出て来ました。小さな機関車です。トロッコを10杯ぐらい引いていました。池を埋めるのに土を削っ

て、線路を引いて台車に囲を付けたものです。初めは手押しで土を乗せて1台ずつ押しに行く。上の囲いを取る。片方を上げると土が出る。進捗に合わせて線路を動かして行く、という工事方法でした。

トロッコ、トロ線と言っていました、いろいろな所に出ていました。写真機は無いし、フィルムも無かった。絵を描いてもスパイと言われていました。

山を崩すのも人力で、鶴嘴で崩していました。崩れて生き埋めになった人もいます。かなり危険を伴ったのです。低い山なら全部スコップで崩して積む。全部行って土をほかして、全部で帰って来る、という作業です。

—随分、骨の折れる作業ですね。

藤原：それが一番の重労働でしたね。普通常用（常時雇用）と受取り（歩合）とがありました。常用と受取りの現場がありました。受取りの所は10～20名のグループの請負師が別にいます。契約は役所か現場監督とかわかりませんが、これだけの土を取るとなれば、という事で受取りの別の頭（親方）がいて、それが交渉をして土を取ってなれば、という事で請け負うわけです。

これだけの土を取ってなれば、と親方が請け負って受取りで人夫に対する賃金を払っていました。常用は3円60銭と決っていました。受取りですと、多い時は7～8円になったそうです。普通でも人夫で一日賃金が5～6円です。

—相当高いですね。普通（常用）の人夫もいたのですか。

藤原：いました。そのかわりに重労働です。体力の無い人は普通の人夫です。今でも歩合給というのはあるのではないのでしょうか。常用の人も土木仕事が多かったです。普段の仕事の延長のような感じです。常用の人は相当遠くからも来ていました。

常用の人は、監督がここの土を取ってくれといっても普通に仕事をします。受取りの場合は、一度運べば1円となれば、5回・6回と運ぶ。それだけ賃金が多くなるという事です。朝鮮の人の飯場の頭が請け負って能率をあげてたくさん給料をもらったという事です。

受取りは朝鮮の方が多かったです。内地人、朝鮮人と言っていました、受取りは現場の人が多かったです。そこに飯場頭がいて、ピンはねをするわけです。よく儲けたと思いますね。

—飯場はどの辺りにあったのですか。

藤原：飯場はたくさんありました。中野の辺り、飛行場の外側にあるわけですから、中野・下宮木・宮木にもありました。場所的にはちょっとわかりませんが、覚えているのは、高山組・金田組ですね。高山組は大きかったので、抱えている朝鮮人も多かったです。バラックで雑魚寝をしていました。家族で来て、長屋型式で暮らしている人もありました。給料は飯場頭に払い、その頭は各個人に渡すという事です。

飯場は朝鮮の人達です。合計で多い時は

1,000 人程でしょうか。200～300 人は毎日現場に行っていましたから…。その賄は飯場頭が行っていました。

米は配給がありました。配給は、普通 2 合 1 夕、重労働の人は 3 合程ではなかったかと思います。私等百姓していなかったので、食糧は苦勞しました。偉い人は、清慶寺に泊まるのと、附近の家を下宿するのとありました。飯場は朝鮮の人達です。普通は通っていました。合計で多い時は 1,000 人程でしょうか。200～300 人は毎日現場に行っていましたから…。その賄は飯場頭が行っていました。

—給料の支払いは、どのようにおこなわれていましたか。

藤原：構造は、点検室（現場監督から名簿があり、出欠を確認する所）～現場事務所へ持って来る～本事務所の点検室へ持って行く。報告に基づいて常用だと 3 円 60 銭を日数にかけて書き出し、合計して金券で貰う。

労働者は間違いがあると苦情を言って来る。すると複写の上からなすって持って行っていました。

私達も金券でもらいました。当時農協の前身である九会村信用組合へ貰いに行っていました。それがあったのが、中野の役場の横にありました。何百人の人が貰いに行きますから、黒山の人だかりです。職員も大変だったと思います。

1 ヶ月に 2 回の支払いだったと思います。私は 1 回だったかな…。私達は混雑しない時に行っていました。

飯場の場合は、飯場頭が金券を全部受け取ります。まとめて自分が組合から受け取ります。一人幾等貰っているか知らないわけです。先程の話は常用の人達のことで

す。1 日 1 日の金額が書いてある金券です。クレームが来たら書き替えていましたね。そうした給与の受け渡しでした。

賞与は、お盆は 15 円、正月 22 円、1 円 15 銭～30 銭程上がって、1 円 45～50 銭ぐらいでしたかね。常用は 3 円 60 銭でしたから、比べると安いです。

—買物等はどうでしたか。新しい店があったのですか。

藤原：当時は、店はありましたが、物資がなかったのでね。横田菊松商店があり、萬屋でした。飯場頭がまとめてよく買っていました。米は配給ですから、当時はみんな配給ですからね。味噌・醤油・副食品・タバコ・酒・油等配給です。

—勤労報国隊も来ていたのですね。

藤原：勤労報国隊は村々で、この村は何日ということです。（大字に分かれて？）月に 1～2 回程です。その日は仕事を休んで行っていました。日給だからその日は給料は出ませんでした。女の人も出ていますが、あまり見ませんでした。人を頼まれたのかね。女の方は婦人会で出ていましたから。

父が病弱だったので、家長代わりに、勤

労報国隊以外も村の葬式等も行ってました。ですから村の事は年の割にはよく知っていましたね。

勤労報国隊は常用と同じ仕事をしました。作業としては畚（もっこ）で土を運ぶ事が多かったですね。婦人会からの人も、学生も同じような仕事をしていました。

当時の中学校や青年学校からも勤労報国隊は行ってました。青年学校生の勤労奉仕ということで、職場を休んで行ってました。優良証を貰いました。

飯盛青年学校が新しく出来て、富合と九会と合併という形で山枝にあり、勤めていてもおおっぴらに行くことができました。それには給料は出ました。学校ではなく、タバコの乾燥室が校舎でした。週に1回ぐらい、昼からでした。1クラス70名ぐらい、教練が多かったです。3年生で戦争は終わりました。

—19年の夏頃まで給仕されていたのですね。

藤原：内務省には1年ぐらいいたと思います。19年5月19日に私の兄が海軍に入営したので、家のことをしないといけないという事で1年余り行きました。

それから給仕というのは国の制度で男は採用してはいけないということで、2回目の賞与を貰った時は名称が変わってました。雇員ではなかったかと思います。

—その後、川西にお勤めになられたのですか。

藤原：川西の下請に須賀商会とっていましたが、過日に『鳴尾村誌』を貰ったら、そこに鳴尾株式会社となっていました。そこが川西航空機の水道工事を請け負ってまして、その水道工事をしていたのです。新生に川西の社宅がありました。この水道工事とか飛行場の中に病院があった（農大の辺り）病院の水道工事をやっていました。

仕事以外の時間にさつまいも等、入院患者に運んであげていました。食糧が不足してましたからね。偉い人もいました。銀行の頭取もおられました。川西での重要なポストの人は全部他所から来られていました。

川西では、格納庫の中で組立てていました。姫路から分解したものを運んでくるのを夜と書いてあるものがありましたが、昼もありました。私は見ました。馬力（馬力は荷物、馬車は人が乗るもの）、特に大きな馬力です。大きな道も付けましたからね。4～5頭立てで運んでいました。翼が立っていました。

—紫電改は海軍のエース級の戦闘機でしたが、ご存じでしたか。

藤原：私は紫電はよく知っていました。よく落ちていましたからね。1日に3機ぐらい引っ繰り返ってましたから。脚が出なくて無線もしっかりしていなかったのか、半長靴が指揮所を低空して半長靴を落とすのです。その中にメモが入っていて脚が出なくて不時着する、ということです。

脚が出なければ胴体着陸するわけで、も

う一本滑走路があり、土だけの滑走路もありましたからね。火災を起こした記憶は無いですね。片方だけ出たというのもありましたし、飛行場の中で、急角度で降りたので、一方の脚が折れて、脚を中心にコンパスのようにぐるーと囲ったのとか、いろいろ見えています。逆立ちしているのもありました。

病院に居た時は飛行兵が落ちて亡くなるとう一日練習を休んでいたが、暫くしたら、そのような事があっても何事も無かったように毎日練習していました。そうしたのが病院へ来たら忌日だから休むと、私も家に帰って居ましたが、叱られましたね。若いから向意気もあるし、叱られたのでしょね。

— 列車転覆事故を見られたのですか。

藤原：それは内務省を辞めた以後です。

私は事故には遭わなかったのですが、事故の方に話を移しますと、3月31日だったと思います。自転車のタイヤが無く、縄を何本か縊りをかけて（太縄5～6本）手では出来ないので、大八車の車輪に縄を縛り付けて廻すと縊れるのです。縄は縄ない機があったので、簡単に出来ていました。それをチューブの代わりにして自転車に乗っていました。10日程でダメになる。1人では出来ないので、叔父が手伝ってくれました（こうした事を知っているのは80才以上の人でないとわからないと思います）。何回もした記憶は無いので、後は汽車通になったのでしょ。

網引駅・田原駅から法華口駅まで汽車で

通いました。自転車なら15分程です。事故のあった日は休みだったのです。畑をしていたら八幡神社の森あたりで変な音がした。西の方（事故の起きた所から自宅まで1km程）です。今まで飛行機の引っ繰り返るのを飛行場でよく見ていたので、ドーンという音がしたので落ちた、と思いました。網引に警鐘台があって鉄製です。その時は小学校高等科をあがると適齢期の者は軍隊に行ってしまうので、強制的に消防団というのは警防団でした。すぐに半鐘を鳴らそうと思って走っていると、半鐘が鳴り出しました。織辺宇一（故人）という人が鳴らしてくれたのです。突っ込んだ後に私も行きました。

ドーンという音は落ちた音だと思えます。列車が引っ繰り返っている事など、まったく予期しなかったです。飛行機が落ちて、汽車も引っ繰り返っていました。汽笛が長い間鳴っていました。ケガ人を運ぶため、消防団が集まって来ました。客車の椅子で運んだと書いてありますが、私は筵と竹を切って来て、担架のようにして人を乗せて、網引の公会堂へ運んだ。急の拵え（竹を切ったり）作る迄に時間がかかっていたと思います。死体やケガ人も一応公会堂へ運びました。その場で死体を引き取った人は無かったように思います。無我夢中で運びました。最終的には10余人の方が亡くなっておられましたね。記録を見ましたら、キシモトノブコさんがたまたま乗っていて、飛行士の脳みそが出ているのを見た、とおっしゃっていました。私は見ませんでした。が麦畑のど真中でしたから、麦の穂が大きくなっていましたのは覚えています。何回か運ぶ内に海軍の兵隊が来て運ん

でいました。石炭が線路にこぼれていました。機関車が北の方に倒けていまして、客車2両が乗り上げて悲惨なことでした。夜になって公会堂で炊き出しをして皆食べていました（私は食べなかった）。負傷者や遺体を公会堂へ運んだ後はする仕事がありません。見守るだけでした。その後、陸軍の軍医が来て診察をしていました。

後で聞いた話ですが、三枝さん（北条の新聞店の兄カ）兵隊さんに食べさせる為にどんごろす（麻袋）にイモを持ち帰っていたらしいのです。事故に遭って亡くなられたのです。陸軍将校ではなかったかと思えます。海軍は海軍の軍医が来て診ていました。

一般の人はどちらか（陸軍医か海軍医）が診察していたのを覚えています。気の毒だったのは尾上さんの娘さんの子ども（2～3才ぐらい）が亡くなられ、その場に座っておられた。おじいさんが駆け付けられたが、痛い光景でした。

一戦争の終る頃はどこにおられたのですか。玉音放送は聞かれましたか。

藤原：ラジオが無いので聞いていません。皆集まって聞いていたことはまったく無いです。神社があり、森があります。グループがそこで防空壕を掘っていて、居た人達が戦争が終わったことを話していましたので、終わったのかなという感じでした。その時、そこに居たということは須賀商会に行っていなかったのではと思います。

一志願した、と言っておられましたが。その時に、機銃掃射もうけられたそうですね。そのほか、空襲もうけられましたか。

藤原：。志願をして（海軍）2～3人で網引から列車に乗って北条へ行く途中で空襲に遭いました（長駅のあたり）。グラマンがうろうろして、鉄道は狙われているという事で長駅で止まった。皆降りて、池の堤に逃げ、汽車から離れようとしたのです。そうしてバリバリ……。と機銃掃射を遣られました。

奇襲狙撃をやられましたからね。客車には当らなかったですが、怖かったです。野条でも遣られましたからね。グラマンが何処かへ行ったので、幸い逃げることができました。空襲は恐ろしいです。グラマンが来るとヴェーンという音がします。野条で水道工事をやっている時にも来ました。

又列車に乗って志願の検査に行きました。検査で合格だったか、不合格だったか知りませんが、一番恥ずかしかったのは尻を見る事でした。幕は囲ってあるが、足と手を置く所が決められていて、そこに裸で立ち、尻を見るのです。軍医は豪そうに言っていました。初めての事でびっくりしました。もう一つは性病検査です。恥ずかしい思いをしました。

志願は青年学校で次は誰、と言うのです。志願とは志すと願うのですのにね。無理矢理では無いけれど、受けないといけないような雰囲気です。受けません、と言う人は知りません。非国民・国賊と言われます。当時はそんな雰囲気ですね。幸い20年ですから戦争が終わったからね。終っていなかったら行っていたかも知れません。

また、現在も川西航空の社宅は残っています。この辺りに大きな井戸があり、航空隊がここから水を揚げていました。それに水道を繋いで行く仕事をしていました。笠原の薬師という所、ここは水が切れなかったの、ここからも航空隊がポンプで水道を揚げていました。

灌漑用水は池ばかりです。今は糞屋ダムから水は来ますがね。鶉野台地があり、高射機関銃置いて（地図を見ながら）、この辺りで遣られました。（格納庫あたり）格納庫を狙って居たのでしょうか。空襲に遭いました。飛行機が遠くへ行くと又戻って来る。畑に穴が開いていました。

—戦後の飛行場についてお尋ねします。

藤原：戦争が終って進駐軍がすぐに来ました。飛行機を爆破して煙が上がっていたのを覚えています。大分、飛行機がありましたからね。

朝鮮人の人は変りました。我が世の春と言いますか。私等の方にはそうした人達は居なかったのね。（法華口に居たので）北条に行くとなんな雰囲気、そういう意味では戦争に負けたのだという事を感じました。日常はそんな事より食糧は無いし、生活する事の方が大きかったですね。

いろいろな所から米や麦を買いに来ていました。私宅は百姓していなかったが、野菜や米ありませんか、と来ていました。駅もあり、沿線ですから。

朝鮮戦争が昭和 25 年頃ですから（6 月 25 日）。それから 1～2 年朝鮮人の方が大会をやっていた時、自衛隊が居りました

のでね。当時は国民警察予備隊と言っていました。

農場がやってきたのは、昭和 40 年ごろだったと思います。

—貴重なお話をありがとうございました。

2 「鶉野飛行場の調査・研究の取り組みについて」 聞き取り調査

- (1) 日 時 平成 22 年 7 月 29 日 (木) 10:00 ~ 12:00
- (2) 場 所 加西市南部公民館
- (3) 出席者 上谷昭夫 (鶉野平和記念の碑苑保存会)
聞き手 佐々木和子 (神戸大学地域連携推進室研究員)
森幸三 (加西市教育委員会自己実現サポート課)

この鶉野飛行場については、上谷昭夫氏 (鶉野平和記念の碑苑の保存会) が、約 15 年にわたって、地道な調査・研究の取り組みを続けてこられています。その成果は、『いまに残る姫路基地』(上谷昭夫編、鶉野平和記念の碑建立実行委員会、1999)、『紫の閃光 - 川西航空機秘話』(上谷昭夫編、塩谷一男レイアウト、鶉野平和記念の碑苑保存会、2002) にまとめられています。

この戦争期の鶉野飛行場と今を結びつける役割を果たされた上谷氏に、この研究・調査をはじめられた経緯やその思いなどをお聞きしました。

—上谷さんが、鶉野飛行場と出会われたきっかけを教えてください。

上谷昭夫：私が、鶉野飛行場の調査をはじめた糸口というのは、1976 年(昭和 51)に、この飛行場の側の「たこの散歩」の場所に、私の会社が営業所を建設したんです。会社は上水道の仕事をしていました。

実は、その以前、昭和 32 年に、私は飛行場と出会っています。当時勤めていた会社では、加西の建材店にセメントを卸すなどのことをしていました。先輩が、香寺町の溝口から加西へ来る道が通行止めになったと時に、今の 372 号線の小川橋を渡って加西に来る道路、これ通って行ったら途中で飛行場があるぞと教えてくれました。姫路から加西に来るのに、舗装道路がどこもなかった頃です。

その頃、自動車の運転免許を取りました。車も新車だったので、一体どれだけの

スピードが出るかテストするのだったら、飛行場がいいと、飛行場にやって来ました。戦争終わってまだ十年程しか経ってないから、滑走路も綺麗かった。一番端の南まで行って、横断道路もないし、車を全速力で走らせました。それが、飛行場との最初の出会いです。

子どもの頃には、加古川飛行場の近くに家がありました。戦争中、飛行機が上がったりするのをみていたり、飛行場に勤めていた叔母が、戦後飛行機の名前のハンコをくれて大事にもっていたり、その頃から飛行機へのあこがれがありましたし、飛行場が戦後変化していくのには、興味をもっていました。

たまたま高砂にあった会社が、兵庫県内あちこち行くのに便利の良いところに営業所を建てるときに、土地探しの仕事をまかせられました。1973 年(昭和 48)に、鶉野は、車での移動に便がよく、値段は他

より高かったけれど、ここに決めました。76年に事務所が建つまでに、地元の区長さんなどとも仲良くなりました。その頃には、地元の人から夜中に特攻隊の人が出てくるなど、少し怖い話もききました。

—飛行場のことを調査してみようと思われたのは、どういうことからでしょうか。

上谷:それからしばらく経って、1993年(平成5)に、元海軍の人が三人か四人、ちょっと聞きたい事があると、わざわざ会社へ入って来られました。ここに姫路海軍の航空隊や川西航空機の組立工場があったんやけど、それどのへんにありますか。この辺や思って来たんやけどと尋ねてこられました。私は、戦争中の飛行場のことは知りませんわと言うたのですが、加西市が今市史の編纂をやっとるから、ちょっと聞いてみますわと、住所とお名前と電話番号を聞いて帰っていただきました。

しばらくして、神戸新聞に、加西市のこの飛行場跡を使った航空フェスティバルをやるというのが新聞に出ました。

訪ねてこられた海軍の人たちは、香取海軍航空隊の整備から姫路の航空隊に来たという人たちでした。私たちには、戦友会とか、同窓会のようなものがないけれど、仲間に会いたいということでした。航空ショーをやるという事が、新聞に出たら、そういう人たちがお見えになるかも分からん。いっぺんその時に来られませんかとお声かけをしました。そうすると、その時に集まる場所を、お願いしますわということでしたので、私が、加西市に、「テ

ントを出していただくとかそういう事は出来ませんか」とお願いに行きました。

航空ショーの一週間前に、市としては一切関与しないが、テント一張り、机を二つ、椅子を十脚を貸しましょうと話がありました。

当日(1994年11月6日)、天気が悪かったです。やるということになったので、慌てて模造紙をかうてきて、関係のある飛行機、川西の紫電、紫電改などの写真をコピーして、会社の看板に貼り付けました。また、姫路海軍航空隊、川西航空機など文章を書いたB5位の用紙をコピーして、机の上に置きました。

航空ショーがはじまると、そんなんに見向きもせん年配の方がドッとやって来ました。あちこちで、昔話にもものすごい花が咲きました。「わてな、ここで飛行機作ってん」とか言うおばちゃんとか、海軍の人たちはあのまたそういう話をしてる。航空ショーが終わっても皆帰りません。資料三百枚刷も瞬く間に無くなりました。また会社に戻ってまたコピーして持っていきました。こんなに反響が大きいとは思いませんでした。ある人は、列車転覆事故の時の話をする人が出てきなした。ほう、こんな事もあったんかいなと思いました。それで皆名前、住所、電話を聞いて控えました。連絡した海軍の人たちは来られませんでした。一応終わりました。

翌日、市役所から、昨日、航空ショーで、海軍のことを何かやったのかと、その人に出会わせてほしいと問い合わせがあったと連絡がありました。

その人は神戸の方で、甲種飛行予科練の十二期生でした。鶉野に練習に来た人たち

の戦友会で、常吉で落ちた練習機の慰霊祭をやっていたという話でした。予科練の十二期生の飛行術の三十七期生いう人たち、最後の予科練を操縦した人たちが、自分たちでまとめたB4の大きさを約二百ページ位の手書きの戦争記録をいただきました。その中には、ここでの訓練風景、配置図、兵舎、飛行機の写真などがありました。市史編纂室に聞いてもなかなかわからなかったことが、わかってきました。

一元海軍の軍人さんたちに、出会われたことで、調査がはじまったのですね。

上谷：1996年（平成8）になって、いただいた写真を持って、市役所内などから、調査をはじめました。都市計画課には、この飛行場のこの地図を、一万分の一、二千五百分の一、三千分の一の地図がある。三千分の一だと克明にわかるのではと思って買いに行ったんです。

そこに防衛大出身の方がいて、私も興味があるというて、いろいろ教えていただきました。

昭和20年代、30年代の写真があり、国土地理院の出先機関で斡旋していることも聞きました。連絡してみると、五万分の一の地図に、あなたが欲しい所の場所を、四角に書いて送って下さい。当時は九十センチ角ぐらいの写真、掛け軸状になってるのを販売する事は出来ますということでした。

送っていただいたのは、昭和23年2月の写真でした。戦争が終わってからまだ間がないし、開拓団が今やっと入居した時ぐ

らいのことです。よくみると、小さな掘立小屋みたいなのがわかる。上から見た滑走路も綺麗、あの兵舎や格納庫の写真がなんぼか残っている。それから誘導路、掩体壕がもう全部バチッとわかる。すごい写真が出てきたな、飛行場の概略というか官民境界もわかる、一級資料やなどと思いました。

さらに、防衛省の中目黒にある戦史研究所、そこに図書館があると教えていただきました。夜行バスに乗って、恵比寿駅の近くの研究所に行きました。わからないなりに、検索したりしていると、その職員の方が、「何調べよってんや」と声をかけてくださいました。事情を話すと、これにあるかもと見せていただいたのが、武装解除の時の書類の中に、飛行場の概略を書いた地図です。あの周辺の、志方辺りまでの飛行場の事と探照灯があるといったもの。その他、より詳しい図面、基地内の手書きの図面などもありました。

それらと購入した写真、米軍が写したものでしたが、見比べることにしました。もう少し、綺麗な写真ということで、国土地理院が撮影した昭和36年のものも購入しました。飛行場も開拓団がいろいろ田んぼの区画が出来ているけど、飛行場は綺麗なものでした。当時の道とか、川西のあの辺りもきちんとわかるものでした。

何回か防衛省に行くうちに職員とこころやすなって、「ほなこれ探したらどうや」と言うて、武装解の時の目録とかが出てきました。それをみたら、飛行場の全貌、百四十ページ程あって、飛行場の主な装備品から建物から…備品や勿論大砲が何丁、機関銃が何丁あって弾が何丁…何個あった

とか全部出てきました。

そこから、大阪警備府というのがあったということを知り、そこの資料を調べました。そうすると、設営隊の日誌がでてくる。飛行場を建設するのではなく、飛行機を隠したり、トンネルを掘ったり、そういう部隊の戦時日誌が出てきました。

一列車転覆事故のことも、調べられたのですね。

上谷：たまたま第一〇〇一海軍航空隊という部隊が、川西航空機で作った紫電・紫電改のテスト飛行と輸送部隊ですが、その戦時日誌が出てきました。

その頃、列車転覆事故の話を、新村の人から話を聞きました。「ここでな列車が落ちてひっくり返ったんや。ほんで自分は川西航空機において、ちょうど帰る時やったんや。飛行機が落ちたいうから、自分の家の近くやから、自転車で見に行った」と。その人は、「ゴンダ上等飛行兵」と、パイロットの名前を覚えてました。

その人から、加西市が出した戦争体験記録集列車に乗っていた車掌の太田加七さんが『轍』の中に、手記を寄せられていたことを聞き、買いにいきました。

戦時日誌には、3月31日の日誌見たら、その日、紫電二一型、こんな呼び方、みんなしていない一一型、紫電二一型、訓練飛行中に墜落大破。搭乗員殉職と出てる。これがその時の記事やなど思いました。

部隊がわかったので、戦友会をさがしました。八王子でやっているのを見つけ

て、」連絡すると、第一〇〇一航空隊というのは飛行機の種類によってそれぞれ仲間が違うんや。これ川西で来とるからね、ほんでひょっとしたらこの戦友会が新潟でやるとる、そうかわからんと。そこの住所教えたるわと。ほな教えてくれ言うて。そんで手紙を書いて出したら、あの姫路航空隊へ行った一〇〇一の戦闘機部隊の戦友が何人か生きとると。ほんでこの人に手紙出してみいというて調べたんが、あの…下関の人やった。その人に手紙書いて出した。ほな私は姫路航空隊ですが、仲間はだれとだれとだれがいた、その時にゴウダサカエ上等飛行兵さんは同期やったと、あれが落ちてなど、思い出した。と手紙にありました。その搭乗員は、石川県出身で、親一人子一人の家だったとも聞きました。

そうすると、地元の人からも、話がでてきました。その列車のデッキに乗っていた女学生からも話をききました。

また違う人が第一〇〇一海軍航空隊は、飛行機のテストをするパイロット以外に、整備する部隊がおった。川西航空機のテストパイロットが飛行機をテストした後、海軍に引き渡しをする。引き渡しをした時に海軍側のテストをするのが第一〇〇一海軍航空隊、そこの整備兵がいたんやと教えてくれた。その人にも連絡をとり、話をいろいろ聞きました。この間、車掌の太田加七さんが亡くなられましたが、いろんな人の話を聞いていたので、大体全貌はわかったと思っています。

一鶉野平和祈念之碑をつくられた経緯を教えてください。

上谷：1997年（平成9）11月にも、航空ショーをしました。その時、予科練の人が一生懸命やるから言うて、看板を私が作り、旗を持って行ってえらいやりました。これで一躍この存在が各航空雑誌に載ったわけです。それで、『丸』（1998年1月）に記事を書いて投稿しました。

これが発端になって、私たちの同期がこの最後の訓練生やったという水川通さんという方が、これを千部ぐらいコピーして、加西市へやって来られました。市議員、商工会などに、全部この記事を配られました。ここから出て行って、特攻で戦死した者がかなりいる。九州の串良で慰霊祭をしているけれど、ここも三、四ヶ月の飛行訓練をした思い出の場所でもある。ここにし、ここに碑を建てられたら建てて欲しいということでした。

声をかけてこられたのが、小西の化粧品屋さんです。小西さんの家に、戦争中に「下宿」（外出日に基地の近くの民家に宿泊）していた人が特攻にあって戦死された。そのご遺族と戦後も交流をもっておられたそうです。小西さんは、碑を建てられるのであれば協力しましょうと言ってこられました。元北条高校の校長先生で、航空隊の最後の訓練生で、予備生徒だった方も協力しましょうということで、話が進みました。土地を探している時に、小西さん、倉敷の方、北条高校の元校長先生に呼ばれて、私も加わりました。

四人で、碑を建てる土地を探したのですが、人の土地を勝手にここやと決めるわけにはいきません。そのころ、当時の加西市長が慰霊碑をたてるという事を前向きに考えようということで、保存会を立ち上げよ

うということになりました。

どなたに保存会の代表になってもらうかと言う時に、中野の三宅通義さんが加西市全体の区長会全体の代表で適任ではないかとお願いに行ったら、快く引き受けていただきました。

副会長には、鶉野の南、中、上の区長さんに引き受けていただきました。土地の関係や式典の関係もあるので、海上自衛隊にも協力をお願いしました。

土地は、鶉野区長の名義で、保存会で購入しました。滑走路の際の七メートル程は開拓道路やった。その余地が七メートル程ずっと端まである。一番相応しい場所はどこかなという事で、滑走路の真ん中の一区画の所有者に話をしたら、構へんということで話を進めました。

善防山も後ろに見えるええ場所やなど、海軍の人たちも喜ばれました。

―保存会を立ち上げられて、碑ができるまで、何年ぐらいかかったのですか。

上谷：2年位かかったかな。祈念碑ができたのは1999年（平成11）です。姫路航空基地の開設記念日、10月1日に近い日曜日にしようということになりました。全国から来られるから宿泊施設がいる。いこの村はりまに問い合わせたら、改装工事で9日は利用が可能ということで、9日に式典をやることになりました。

碑には、いつ飛行場ができて、どんな部隊があったかということ、名前を全部刻んであげたいなということになって、私が調べた資料が、ありませと言いました。

それで、祈念碑というより飛行場の説明文みたいなかっこうの碑になりました。ただ特攻隊の戦死者だけあげておこうと思いましたが、殉職搭乗員ならある程度分かるからその人の名前も刻んでくれという事で刻みました。だから列車転覆事故も、常吉で落ちたり、いろんな人の分かった人たちは、日にちもみな調べて入れました。上は特攻隊の戦死者名簿、下に殉職搭乗員の戦死者名簿です。

—ここには、碑は一つだけではありませんね。特攻隊の碑や、この飛行場について記したものもありますね。どのような経緯で作られたのでしょうか。

上谷：特攻隊の碑は、生き残りの人たちの文章と市史編纂室の先生方との合作です。

碑文の冒頭の短歌をめぐっては、いろいろ揉めました。「美しく空に果てたり鶉野の雲夕焼けて永くたゆとう」は、実は元の歌は「果てたし」でした。毎日土木作業ばかりしていた予科練生です。昼前に離陸して九州に向かった特攻隊の人たちを見送った作者が、夕方に、善防山の方を見たら、空がパーッと赤くなっていて、あたかも特攻隊の人たちが死に行くという、そういう様子を詠んだもの。「果てたし」というのは、俺たちも後に続くよ、行きたいという意味だそうです。ところが、特攻隊で生き残った人が、「何を甘い事言っとるんや。そんな渦中に入らずに人が行っとるもんを見て、俺も後から続くと言うけど、われらは行かされる者の身になったら、誰が行き

たいかいな」と反対しました。

そこで、私が、「果てたり」にすると過去の話になるので、作者に一字変えることを了承してもらいました。

話し合いの中で、予科練の人たちが、そやけど戦争中地元の人にはものすごい迷惑をかけとる。飛行場一つ作るにしても、百十何個の家が立ち退きになり、空襲もあった。この付近の人たちの文章も入れるべきやということで、もう一つ碑を追加しようということになりました。そこにこの飛行場建設の為に、いろいろ協力してくれた地元の人々のいわれを入れました。見捨ててはいかんのは、異国から来た、あの時は朝鮮と日本とは併合して日本人であったけれど、やっぱりその人たちの苦労も忘れてはいかん。地元で寄宿しながら、そらえらい目におうてる。もう彼らのおかげである程度出来たとも、私常々思っていた、地元の人たちの所にその文章入れるべきやと言いました。その裏には、海軍航空隊の様子と、川西航空機の事も書く文章も入れておかないといけない。これは全国で珍しい、製造場所と航空隊の二つが同居したところなんです。できるだけ、その内容も網羅しました。

平和祈念の碑の揮毫は、当時の加西市長にいただきました。当初「平和祈念碑」と言う案をもっていました。平和を語り継ぐ上の証やいう事も知ってもらおうという碑に変えたから、「平和の祈念碑」ということになりました。それで市長は「平和祈念碑」やなしに「の」を入れて、「平和祈念の碑」しようということになりました。

飛行場の事を細かく書いた看板を別に作りました。仕事でつきあいのある会社と相

談して、ステンレスで永久的に残るようにして、川西航空機と姫路海軍航空隊についての防衛省の資料をもとに、説明文を作りました。

—『いまに残る姫路基地』を出版された経緯をお教えてください。

上谷：本を作る話は、7月の中頃、三宅会長から提案がありました。記念式典の時には恐らく最高の人出になるやろう。それぞれの思いを持った人たちが来るんで、あんた本作らへんかと言い出した。興文社に頼もう言うて、原稿締め切りいつまでやと聞いたら、9月の中頃には欲しいですわと言うことでした。会社勤めしているときやから、それから、毎日晚の一時まで帰ってきたらやって、朝五時に起きて、八時過ぎの出勤時間までやりました。間に合わんから会社を三日程休ませてくれ言うて、三日程休ませてもらってやりました。出来上がったのが、明日式典と言う時でした。資料を中心とした、資料集のようなものになりました。

防衛省の図書館に、ここまで調べた資料を挿ましてもらったけど、こういうのがお陰さまで出来ました言うて持っていきました。後で丁寧な礼状が来て、今までいろんな飛行場の事とか調べてきたけど、こういう調べ方をしたのはあなたが初めてです。これは後世に残る大事な資料です、と言って褒めてもらいました。

—その後、『紫の閃光 - 川西航空機秘話』

を作られましたね。

上谷：『轍』に寄稿された東剣坂の中本光雄さんが、自分たちの記録をなんとか残して欲しいとあってこられました。中本さんは、川西航空機の戦闘機組立ラインの油圧関係の班長をされていました。

その方のお宅を訪問すると、その人がずっとノートとか、給料明細や表彰状など、全部出してくれました。その中に、大学ノートのボロボロになったものが二冊あって、鶉野工場に来てから川西の6月22日の姫路製作所の空襲までの日誌でした。「こんな資料をわし持とったってしょうがないし、あんた調べてんやったらこれあげますわ」と、言われて、名簿などと一緒に預かりました。

この鉛筆書きの日誌を、私が横書きに読みやすくしました。薄くなって読みにくくなったところは、コピーの焼き方を何度も変えながら読めるように工夫しました。

このあと、ご病気されたときに、お見舞いにいったら、残りの資料も預かることになりました。新明和にいても残っていない、当時の現場の資料でした。これらの資料を整理し、体験談も集めて作ったのが、『紫の閃光 - 川西航空機秘話』です。

—最後に、上谷さんがここまで、一生懸命やっけてこられた理由をお話ください。

上谷：たまたま私が、加西に昭和51年に来たから、平成5年に海軍の人との出会ったから、調べることになりました。海軍の人は、戦争終わった後、現役で仕事や家族

の思ってやってきた年代も過ぎていき、フツと、戦争中の自分がえらい目におうた事を思い出して、いっぺんこう尋ねてみようかというて、こう皆寄り集まってこられた。ある程度気持ちのゆとりができて、ここにこられた。それを私が聞いてしまった。航空ショーをした時には、そのテントのどこへすごい人がやって来た。その時にも戦争中の話が出てきた。皆自分のところの話はわかるけれど、他のところの話はわからない。それで市史編纂室へ行っても、誰に聞いてもわからない。戦争中のそんな事なんか公にしてません。この当時は、もう秘密秘密の時代でした。ちょっとおかしな事言うだけで引っ張られる。父が、姫路の部隊に二回目の召集で引っ張られて行って、古参兵だから時々帰って来た。その時に、日本は戦争に負けるぞ。偉いさんがどんどん死んでいくし、アメリカから飛行機来よるし、もう勝てっこないぞ。うっかりもう日本が戦争に負けると親父が言うた事がみなに言うたらえらいことになる、子どもでも思った。そんな時代の話でした。

そんな経験をしてきています。これはしょうがない、いっぺん自分で個人的に調べよかということになりました。海軍の人にであったのが、はじまりでした。

—ありがとうございました。

(佐々木)

第4章 鵜野飛行場関係施設測量調査

1 鵜野飛行場の現況

1947年（昭和22）に撮影された空中写真（写真3）を見ると、姫路海軍航空隊基地の庁舎建物・格納庫、川西航空機工場の格納庫などは確認できるが、翌1948年（昭和23）に撮影された空中写真（写真9）では、格納庫や庁舎の一部が解体撤去されている。掩体壕や誘導路はまだ明確に確認できる。1961年（昭和36）に撮影された空中写真（写真10）では、基地関係の建物はすべて解体撤去されており、防空壕、エプロンや格納庫の基礎、庁舎前ロータリー、貯水槽などコンクリート製施設が残るのみである。掩体壕は一部確認できるが、誘導路は道路と農地に再整備されている。

昭和42年の兵庫県立農科大学付属農場開設時の現況図（図6）を見ると、農場内にコンクリート敷きの基礎やコンクリート製の防空壕が表記されている。現在では確認できない防空壕なども当時は多く残っていたようである。

現在、鵜野飛行場周辺は市街化調整区域であり、滑走路西側は主に農地として利用され、東側は工場用地として利用されている。航空隊基地庁舎跡地は神戸大学食資源教育研究センターとなり、その東側には農地が広がっている。

2 今に残る戦争遺産

鵜野飛行場関係の軍事施設は、保存会の調査で50箇所以上が確認されている。

軍事施設は建築素材で分類すると、木製建築物、土製構築物、コンクリート製構築物に大別される。

鵜野飛行場において、木造建築物は解体撤去され残っていない。ただし、木造建築物の基礎部分はコンクリートで作られており、格納庫の基礎などは現地に撤去されずに残っている部分もある。木造建築物では唯一、川西飛行機鵜野工場の格納庫が姫路市内に移築され、民間会社の倉庫として今も活用されており、内部のトラス構造が確認できる。

土製構築物とは、いわゆる素掘りの防空壕や隧道、塹壕、無蓋の掩体壕などであり、崩落が進んでいるものの10箇所程度が現地に残っている。

コンクリート製構築物は30箇所程度残っている。施設の種類は、次の6種に大別されるが、それぞれ平面形態、内部構造などに違いがあり、その様相は多様である。

(1) 機銃座

上部の銃座部と地下の弾薬収納庫部の2重構造になっている。（図7の7・22・28）

(2) アーチ型構築物

天井部がアーチ状に造られた内部に空間をもつ倉庫状の壕である。入口形態により細分されるが、内部不明の壕もあり、分類には再検討が必要である。

a 開放口の単純構造壕（図7の5・19・20・29）

b 小型入口もつ単純構造壕（図7の4・8・11・12・13・18・24）

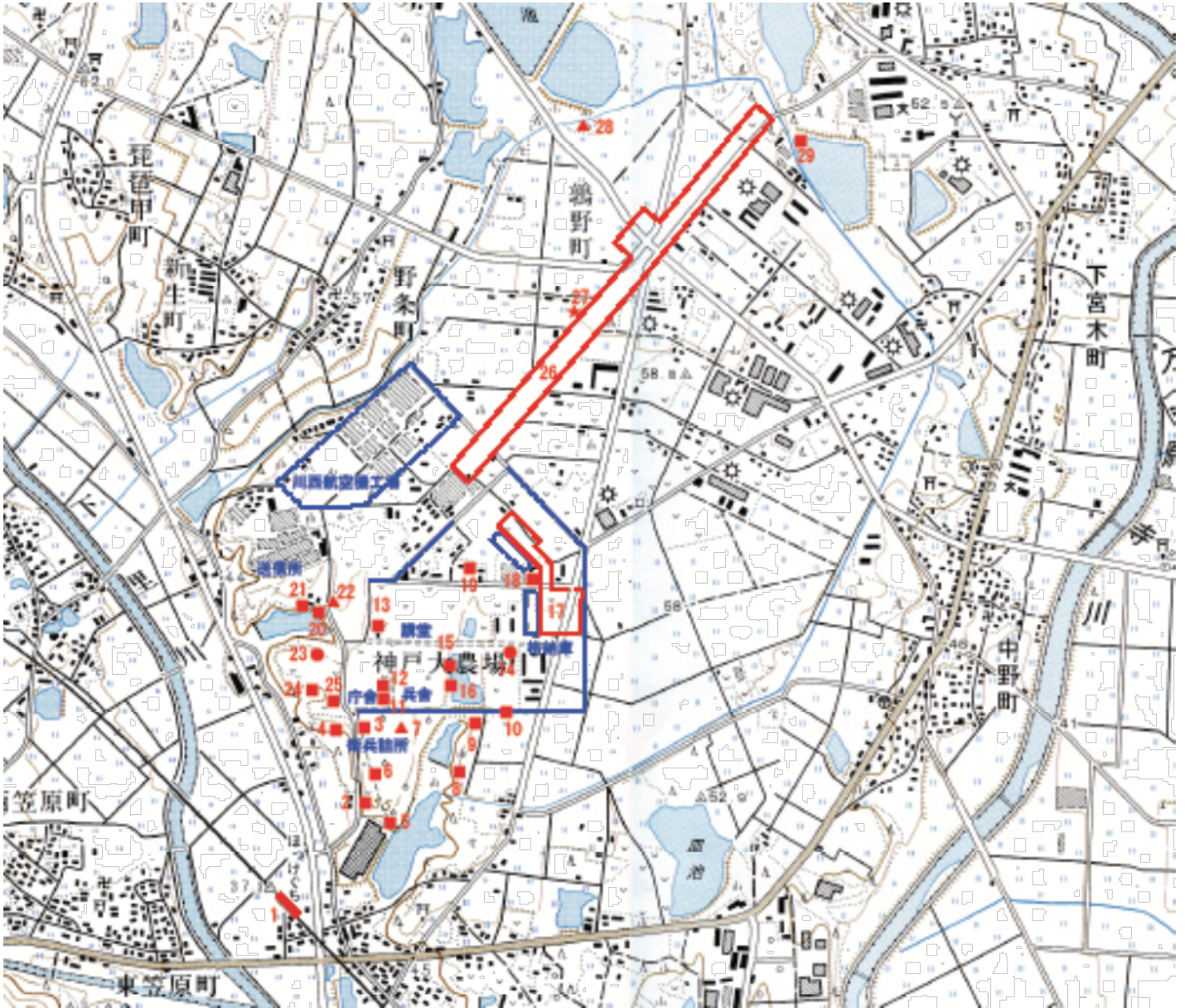
- c 小型入口に前室が付く単純構造壕（図7の21）
 - d 地下式単純構造壕（図7の9）
- (3) フラット型構築物 天井部が平坦に造られた内部に空間をもつ倉庫状の壕である。
（図7の4・6・25）
- (4) 退避壕 内部が屈曲し、通路状を呈する壕である。（図7の3・15・16）
- (5) 貯水槽 円形の大型貯水槽である。（図7の14・23）
- (6) エプロン・滑走路 コンクリート敷である。（図7の17・26）

3 測量調査

測量調査は、予備調査を平成22年1月26日に実施し、実測調査を平成22年2月15日に実施した。予備調査によって、現存している構築物の形態分類をおこない、代表的な5施設（図7の7・8・9・15・28）について実測し、図面を作成した。

調査の体制は以下のとおりである。

調査指導者	内平 隆之	（神戸大学大学院農学研究科地域連携研究員）
調査参加者	浅井 健太	（神戸大学大学院工学研究科建築学専攻）
	国居 郁子	（神戸大学大学院工学研究科建築学専攻）
	田中 了太	（神戸大学大学院工学研究科建築学専攻）
	山口 創	（神戸大学大学院農学研究科食料共生システム学専攻）
	佐々木和子	（神戸大学地域連携推進室研究員）
	水本 有香	（神戸大学大学院人文学研究科地域連携研究員）
	森 幸三	（加西市教育委員会市史文化財室）
	萩原 康仁	（加西市教育委員会市史文化財室）
	東 憲一	（鶴野平和祈念の碑苑保存会戦跡探索協力者）



- | | | |
|--------------------|---------------|-----------------|
| 1 北条鉄道法華口駅 | 11 防空壕 (CO 製) | 21 防空壕 (CO 製) |
| 2 防空壕 (素掘り) | 12 防空壕 (CO 製) | 22 機銃座 |
| 3 防空壕 (CO 製) | 13 防空壕 (CO 製) | 23 貯水槽 (CO 製) |
| 4 退避壕・地下防空壕 (CO 製) | 14 防空壕 (CO 製) | 24 防空壕 (CO 製) |
| 5 爆弾庫 (CO 製) | 15 防空壕 (CO 製) | 25 地下防空壕 (CO 製) |
| 6 地下防空壕 (CO 製) | 16 防空壕 (CO 製) | 26 滑走路 |
| 7 機銃座 | 17 エプロン | 27 鷺野平和祈念の碑苑 |
| 8 防空壕 (CO 製) | 18 防空壕 (CO 製) | 28 機銃座 |
| 9 地下防空壕 (CO 製) | 19 防空壕 (CO 製) | 29 防空壕 (CO 製) |
| 10 地下燃料貯蔵庫 (CO 製) | 20 防空壕 (CO 製) | |

CO製：コンクリート製

図7 鷺野飛行場現存施設位置図 (国土地理院発行 2万5千分1地形図使用)

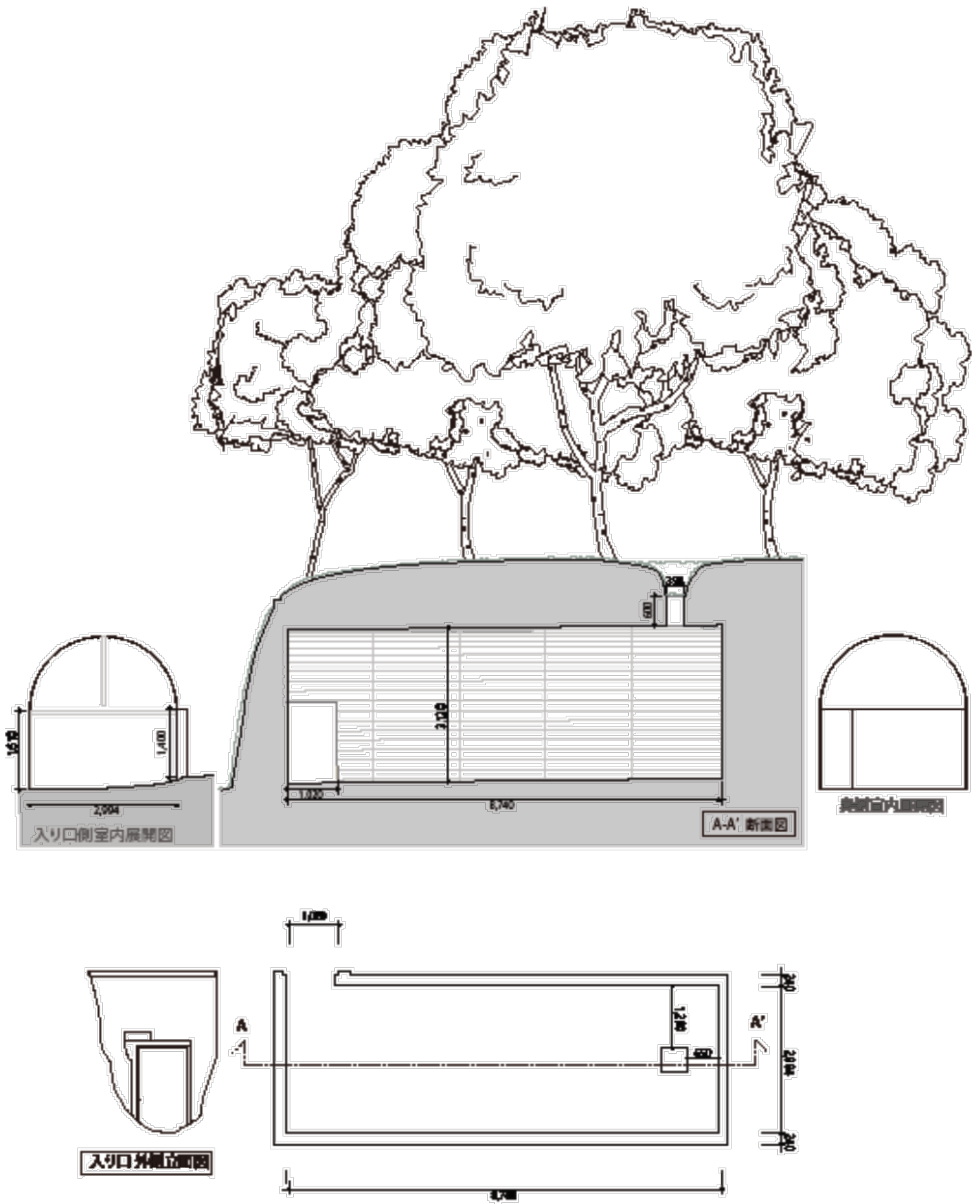


図8 防空壕 (8) 測量図

防空壕 2010/2/15 実測調査

縮尺 1:100

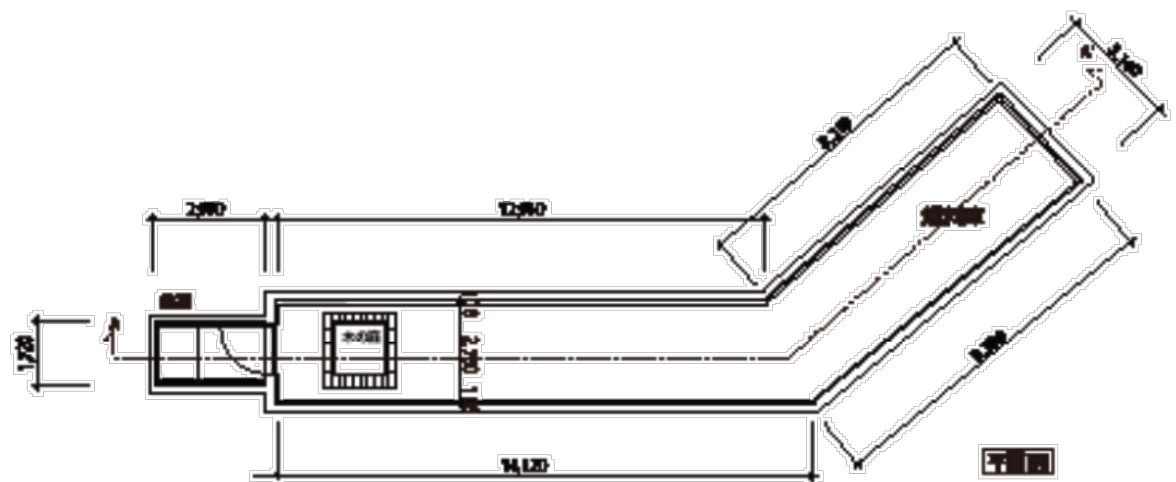
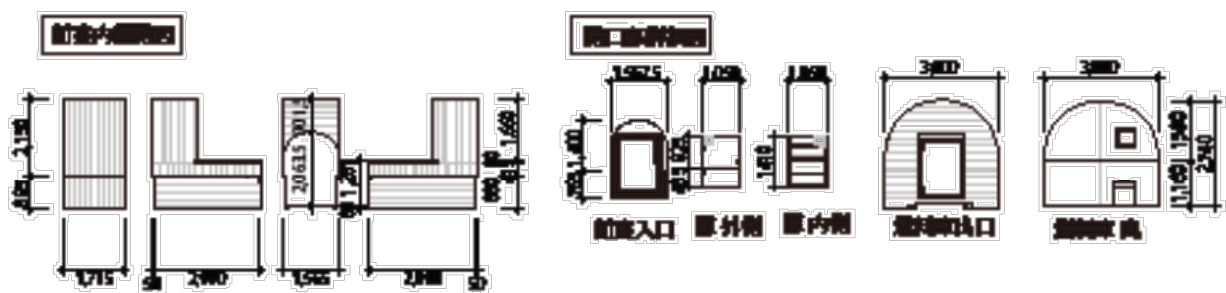
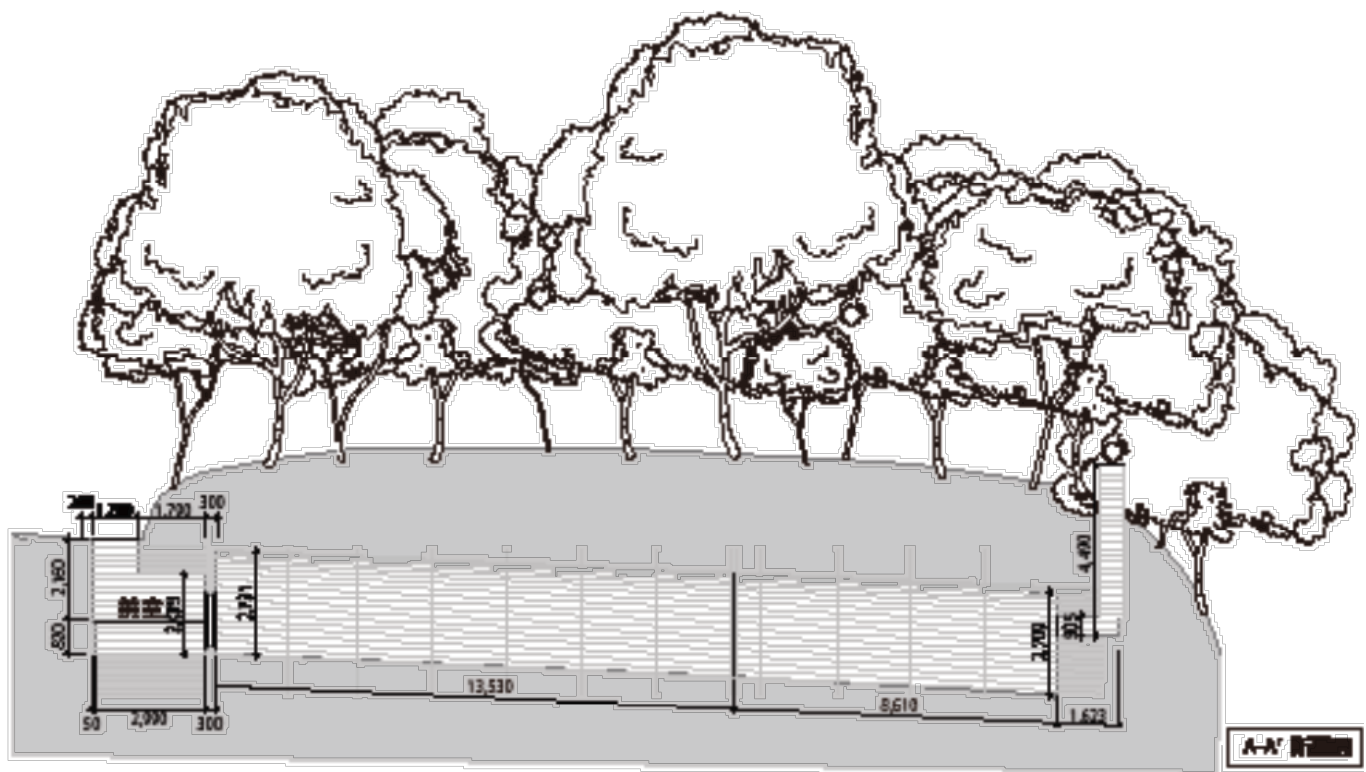


图9 地下防空壕(9) 测量图

燃料庫 2010/2/15 実測調査
縮尺 1:200

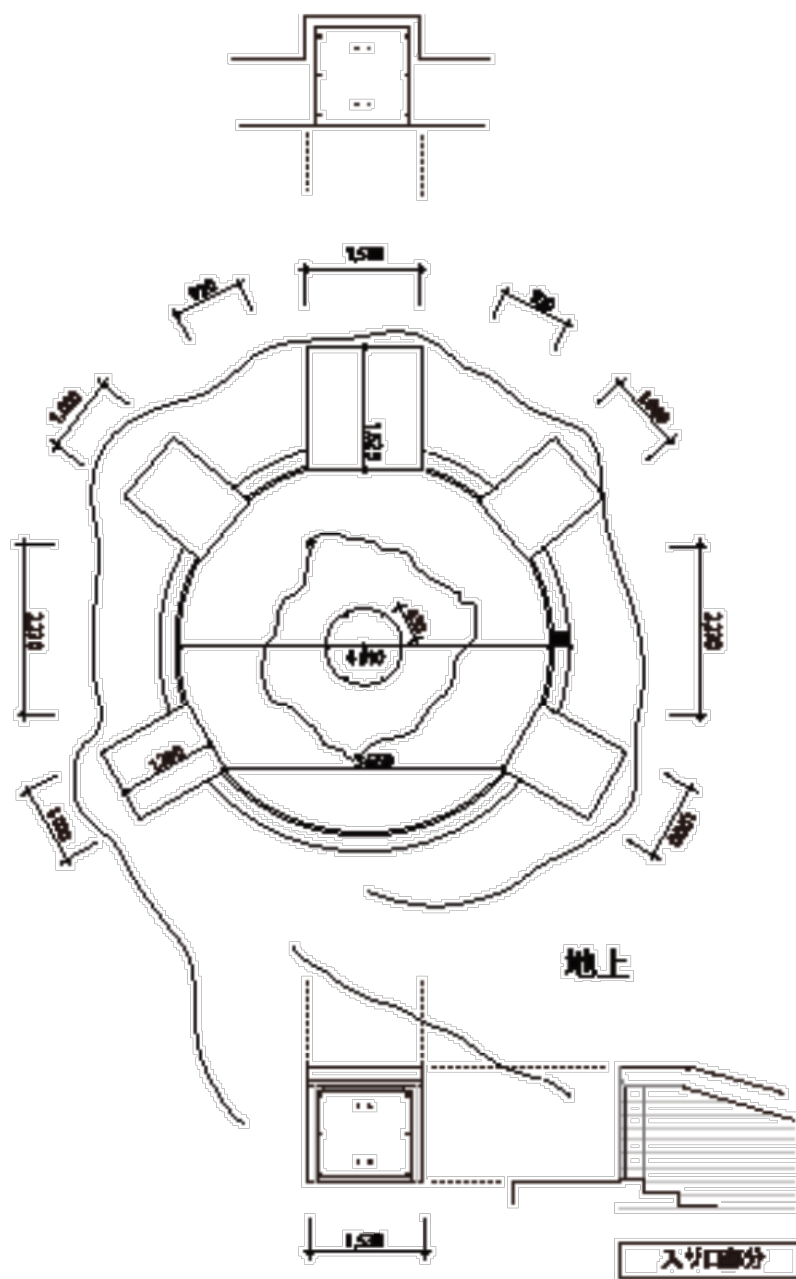


図 12 機銃座 (28) 測量図

第5章 戦争遺産活用事例調査

1 概要

戦争遺跡の保存・活用に係る先進地として、赤山地下壕跡関連戦争遺跡（千葉県館山市）、宇佐海軍航空隊関連戦争遺跡（大分県宇佐市）、松代大本営跡（長野県長野市）、沖縄陸軍病院南風原壕（沖縄県南風原町）などがある。一方、旧鈴鹿海軍基地（三重県鈴鹿市）格納庫群は、2011年2月に1棟の部材保管で、市民団体と合意、旧大社基地滑走路（島根県斐川町）は近年まで比較的残っていたが、道路用地に転換されるなど、消えていく遺跡も存在する。

この共同研究では、戦争遺跡の保存・活用に係る先進地の事例調査を、加西市教育委員会、神戸大学人文学研究科と共同して、実施した。調査の実施概要は、下記のとおりである。

(1) 千葉県館山市 赤山地下壕跡関連戦争遺跡

日 時：2010年10月29日（金）

概 要：NPO法人安房文化遺産フォーラム主催の戦争遺跡見学ツアーに、18名の団体見学に同行参加し、その後NPO法人代表、副代表に聴取調査をおこなった。さらに、館山市役所担当者にも聴取調査した。

(2) 大分県宇佐市 宇佐海軍航空隊関連戦争遺跡

日 時：2010年11月19日（金）

概 要：宇佐市役所文化財担当者の案内で、現地調査をおこない、その後、市役所教育委員会で担当者から同市の取り組みについて、聴取調査をおこなった。

2 内容

(1) 千葉県館山市 赤山地下壕跡関連戦争遺跡

① NPOの対応

東京湾岸に位置する館山市には、明治期以来、首都東京の防衛基地として館山海軍航空隊をはじめ、多くの軍事関連施設が置かれていた。そのため、市内およびその近辺に、館山海軍航空隊赤山地下壕跡、掩体壕、洲ノ崎海軍航空隊跡など、多数戦争遺跡が残っている。これらの戦争遺跡については、同地ではNPO法人安房文化遺産フォーラム（<http://www.internetex.com/npo/digest/digest05.html>）が、見学コースをつくり、全国からの学校や団体等の平和学習ツアーを企画している。



図13 館山市戦跡マップ

このNPOは戦争遺跡だけではなく、南房総、安房地域にある海や花などの自然環境、風土に根付く歴史的な文化遺産など、その地域に今あるものを活かした地域づくりを目指してきた。これらは、「地域まるごと博物館」という発想で、市民による市民のための市民が主体・主役となる地域づくりをおこなうために、2004年、NPO法人が作られた。

地域まるごと博物館では、戦争遺跡の保存運動を含む歴史的環境の保存活用が中心になっている。1989年（昭和64年）頃から安房の戦争遺跡の調査を行い、1996年（平成8年）からは里美八犬伝の里見氏の稲村城跡保存運動を行ってきた。また、大正期の銀行建物（小高記念館）を事務所として、2006年よりが管理・使用している。

有料ツアーガイドは、いくつかモデルコースを設定しておこなわれている。ガイドに交通費のみ払うにしても、10人以上が必要とのことである。

ここの特徴は、見学コースだけではなく、まず座学を受けることから始めるところである。この館山の戦跡から見るアジア太平洋戦争とか、戦跡を活用した教育と地域づくりとか、つまり、地域まるごと博物館というかたちで、安房について勉強する。そして地域の持っている意味とか、他の遺跡との関係とか、色々説明をいただいた後、見学コースへと出ていく方法をとっていた。

ツアーガイドの利用で、一番多いのは小中学校の平和学習です。市外からの見学者が多く、昨年の見学者は1万7千人、修学旅行などがよく訪れている。修学旅行で、新幹線を利用して関西などからやってきた学校が、東京からバスでアクアラインを通過して、館山までやって来て、半日勉強をする。そして次の日はディズニーランドをまわって帰る、というコースが多い。

ガイドは、地域の方。養成に、決まった教育やマニュアルがある訳ではない。他のガイドのやり方を見ながら、自分の体験も交えて、自分なりの方法を開発していくやり方であった。

ツアーガイドを行っているNPO法人の代表は、ガイド事業というのは高齢者の生きがいくくりになる。ガイドと見学者との人の交流を大事にしている。非常にたくさんの方がきて、交

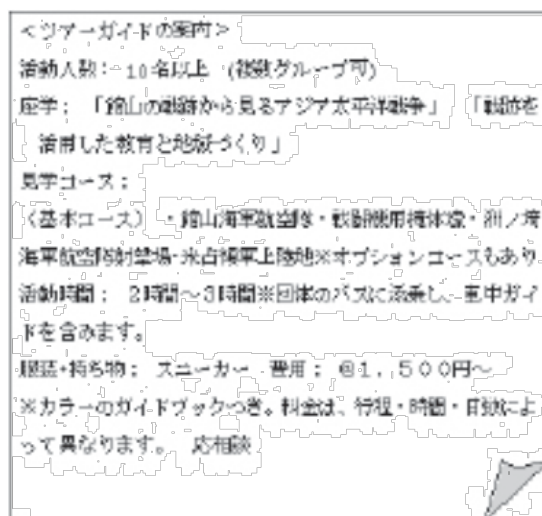


図14 ツアーガイドの案内



写真12 赤山地下壕案内看板

流して帰っていくというお話であった。

②市の対応

次に、館山市の取り組みについて、報告する。館山市では、1989年に博物館地区展で戦争遺跡を取り上げたのが最初である。1997年、市民団体からの要望を受け、文化財審議会による所在確認調査をおこなった。99年には、文化財審議会では史跡指定については時期尚早ということで、継続調査となった。2002年、館山市は（財）地方自治研究機構と共同して、「戦争遺



写真 13 赤山地下壕見学風景

跡保存活用方策に関する調査研究」をまとめ、戦争遺跡を地域の歴史資源として保存し、歴史学習や観光・交流に役立てていくと表明した（館山市ホームページで公開、<http://www2.city.tateyama.chiba.jp/Guide/?tpcid=39&stoid=761>）。2004年には、赤山地下壕一般公開がはじまり、翌05年には、赤山地下壕が市指定史跡となった。なお、地下壕は市有地であり、取り扱い要綱あり）。

市は、赤山地下壕が一般公開を前提に基盤整備をおこなった。現在、壕内の250mだけを一般公開している。一般公開にあたって、壕内には、見学路、ライト、フェンスを整備し、また、壕外では看板を整備し、大型バスのための駐車場整備をおこなっている。

赤山地下壕への入壕時には、豊津ホール（市公民館、地下壕入り口脇）で受付が必要である。入場は無料。受付後ヘルメットを貸与し、危険防止のため必ず着用することになっている。土・日曜日は、行政対応が休みなので、市から70万円予算化し、宮城・岡沼地区の保存協力会というかたちで受付をおこなっている。また、個人や小グループを対象に、毎月第1日曜日には無料ガイドをおこなっている。入壕時の混乱などを避けるために、概ね20名以上の団体については事前に予約することになっている。ただ、10名以上の団体は、事前に有料ガイド（安房文化遺産フォーラム）に問い合わせることになっており、赤山地下壕のツアーガイドを利用すれば、その申し込みあるいは手続き等については、このNPO法人がやってくれるという事になっている。

赤山地下壕の市の対応部署は、管理・整備は都市計画課、コース設定・パンフ・フィルムコミッションは商工観光課、窓口・調整は生涯学習課、受付業務は中央公民館（豊津ホール）と、4課にわかれていた。

赤山地下壕に対する市民の認知度は、低いのが現状である。小中学校の平和学習利用（年間で中学校は1回、小学校は班学習などで数回程度）をおこなっている。NPOでガイドできない少人数の見学は、教育委員会生涯学習課で対応している。

(2) 大分県宇佐市 宇佐海軍航空隊関連戦争遺跡

①遺跡概要

大分県宇佐市は、宇佐海軍航空隊基地の町であった。宇佐市の戦争遺跡の保存には、行政がその整備に力を入れている。市内には、コンクリート製掩体壕が10基残っており、そのうちの1つ、城井一号掩体壕は1995年3月市指定の文化財（第2次世界大戦期の遺構の史跡指定は、1990年沖縄県南風原陸軍病院壕に続き全国で2番目）となった。

現在、市内には掩体壕以外にも、次のような遺跡が残っており、市の作ったリーフレットに写真とともに掲載されている。2, 滑走路跡（現市道、モニュメントあり）、3, 爆弾池（民有地、4, レンガ造りの建物、5, 特攻隊慰霊碑（154名が出陣）、6, 蓮光寺の山門（生残り門）、7, 柳田清雄の碑、8, 航空隊踏切（柳ヶ浦駅近辺）、9, 海軍棧橋、10, 高居横穴壕、11, 爆撃痕が残るコンクリート塀（柳ヶ浦小学校、他に被爆樹木、航空隊正門柱2基）などである。

レンガ造りの建物は、国所有のもので、一時、民間工場として利用されていたが現在は空室となっている。建物の管理、取壊しに巨額の費用を要することから、国は処分に積極的である。その他にも、国所有のものはあと②棟残っており、約3,000㎡の面積がある。市が戦争遺跡としての活用計画を決定すれば、国から払い下げを受ける予定である。滑走路跡は、現在は市道となっている。当初、市が市基金、県補助金を使い、14本の標柱（モニュメント）と記念碑を建立し、滑走路跡を明示した。その後、すべて市民の寄付金によって、標柱を92本道路沿いに設置した。

コンクリート製掩体壕は、10基現存している。そのうち城井1号掩体壕が、1995年3月に市の史跡に指定された。それにともない、自治省地域文化財保全事業で史跡公園を整備している。滑走路のコンクリート片を路肩の使用し、路肩を整形している。史跡の管理は、地元の人に委託契約でお願いしている。公園内には、鎮魂碑と賽銭箱が設置されている。寄付金で設置、宗教、政治色は関係無く集めることもおこなっている。また、地域振興事業調整費等の補助金を活用して、モニュメントをつくったり、観光トイレを作るなど史跡公園の整備に努めている。

②戦争遺跡整備の経過

宇佐市での戦争遺跡保存活動は、市が推進する事業であるが、豊の国宇佐市塾という市



図15 宇佐市戦跡マップ



写真14 史跡公園内の鎮魂碑

民によってはじまったものである。それに応えるかたちで、市は宇佐航空隊の史跡等の保存事業検討委員会を作ったり、保存事業基金をはじめた。

- 1983年（昭和58）7月 大分県、豊の国づくり塾開設決定。58年度から3年間、県内12地区に各1塾開設。
- 1988年（昭和63）10月 豊の国宇佐市塾（豊の国づくり宇佐塾う卒塾生中心）は、地域に根づいた活動として、宇佐細見第一弾「横光利一の世界」を開催。
- 1991年（平成3）2月 宇佐市塾、「宇佐航空隊の世界」を開催
- 1992年（平成4）6月 宇佐海軍航空隊の隊門1基発見
- 1993年（平成5）11月 宇佐航空隊史跡等保存事業基金、宇佐航空隊史跡等保存事業検討委員会（企画課）
- 1995年（平成7）3月 城井1号掩体壕が市指定史跡に
4月 自治省に「地域文化財保全事業」を申請（95・96年度）
- 1999年（平成11）4月 地元の下城井地区と史跡管理委託契約を締結
- 2003年（平成15）3月 「地域振興事業調整費事業」として滑走路跡地の市道緑地帯に石造りモニュメント16基設置
- 2004年（平成16）3月 「地域振興事業調整費事業」として観光トイレ建設
- 2005年（平成17）8月 高居地下壕を市指定史跡に

③活用

宇佐市では、市内の小中学生向けに副読本（小学校低学年、高学年、中学校）を作り、平和学習に利用している。また、8月6日には、6年生がサイクリングで戦争遺跡を回るなど、地元に着した平和授業がおこなわれている。

宇佐市へはグリーンツーリズム（農家体験）で、約8000名（主として修学旅行）が訪れるが、その内約5000名が、城井一号掩体壕など戦争遺跡も見学（平和学習）していくコースが組まれている。

ガイド付の見学は、年間約1,000名である。市民向けには、5月に平和ウォークを実施（約500名、ガイド付き）している。

ガイドを担当するのは、宇佐市塾のメンバー、市に3名程度であるが、ガイドボランティア（戦争遺跡だけでなく他の歴史遺産を含む）30名ほどもおこなうことが可能である。

現在、戦後70周年（2015年）にあわせて、ミュージアムを完成させる予定である。



写真15 戦争遺跡についての副読本

（佐々木）

本冊子は、芸術文化振興基金助成金・加西市ふるさと応援
寄付金を活用し作成しました。

本冊子作成にあたり、上谷昭夫氏をはじめ鶴野平和祈念の
碑苑保存会、地域の皆様方のご協力をいただきました。

神戸大学・加西市共同研究

鶴野飛行場関係歴史遺産
—活用シンポジウム記録集・基礎調査報告書—

2011.3

編集 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター
加西市教育委員会

発行 加西市教育委員会



芸術文化振興基金助成金事業

神戸大学・加西市共同研究
鵜野飛行場関係歴史遺産基礎調査